

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第19集

勝ち 川 遺 跡 III

1992

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

名古屋環状2号線や国鉄瀬戸線の敷設計画を契機に、春日井市勝川町一帯に大規模な都市計画が実施されることになってすでに10年以上の年月が流れました。環状2号線は勝川まで完成し、平成5年3月名古屋インターチェンジまでの完成を目指し工事は急ピッチで進んでいます。国鉄は分割民営化が行われ、国鉄瀬戸線はJR城北線として昨年12月から部分的に営業を開始しました。JR中央線勝川駅西側の土地区画整理をはじめとした都市計画はほとんど完成しましたし、駅前の大規模なビルも姿を現し、遺跡周辺の景観は大きく変貌しつつあります。

これらの工事に伴う事前調査として始まった勝川遺跡の発掘調査も、昨年度末には終りを遂げました。勝川廃寺の解明をおもな目的とした発掘調査によって、文献記録に残らない縄文時代から現代に至る勝川の歴史がかなり明らかになり、多くの成果を得ることができました。

本書で扱う愛知県土木部による勝川土地区画整理関係の発掘調査では、勝川廃寺の主要伽藍は確認できませんでしたが、寺に伴う権立柱建物を数棟発見することができましたし、寺の周囲を巡っていた溝を3か所で確認し、寺の位置と規模をほぼ確定することができました。その他には弥生時代中期・後期の墓である方形周溝墓を確認したことから、当時の墓地の範囲も推定できるようになりました。また江戸時代後期から明治時代にかけての下街道沿いの町並みの様相や人々の暮らしを復元できる大量の資料を得ることができました。この報告書が地域史研究や埋蔵文化財に対するご理解の一助ともなれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、関係各機関および関係者からの御指導と御配慮を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます次第であります。

平成4年3月

財団法人愛知県埋蔵文化財センター
理事長 高木 鐘 三

例 言

- 1 本書は、愛知県春日井市勝川町に所在する勝川遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は勝川土地区画整理事業に伴う事前調査で、県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた(財)愛知県教育サービスセンターが昭和59年度に、(財)愛知県埋蔵文化財センターが昭和60年度～昭和63年度、平成2年度に実施した。調査面積は、総計6,375㎡。
- 3 調査担当者は下記の通りである。

昭和59年度…上部 肇(サービスセンター主査、現津島市立神島町小学校)、赤塚次郎(同主事)

昭和60年度…赤塚次郎(本センター主事)、松原隆治(同嘱託員)

昭和61年度…清水雷太郎(同課長補佐、現稲沢市立明治中学校)、赤塚次郎、松原隆治

昭和62年度…赤塚次郎、松原隆治(同主事)、神谷友和(同主事、現安城市立安城北中学校)、丹羽 博(同嘱託員、現福岡県豊前市教育委員会)

昭和63年度…神谷友和(同主査)

平成2年度…真鍋雅治(同主査、現松蔭高校)、岡本直久(同嘱託員)
- 4 調査区の座標は、国土座標第Ⅶ座標系に準拠する。
- 5 調査にあたっては、次の各関係機関のご協力を得た。

愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県名古屋土木事務所、春日井市教育委員会
- 6 本書の執筆は、松原・岡本・森 勇一(本センター課長補佐)が分担した。なおIV-2瓦の胎土分析はバリノ・サーヴェイによる。
- 7 編集は加藤安信(本センター調査課長)の指導のもと、松原が担当した。
- 8 調査に関する資料、出土遺物はすべて(財)愛知県埋蔵文化財センターが保管している。

目 次

I 調査概要	
1 遺跡の立地と歴史的環境	1
2 調査に至る経緯	3
3 遺跡の概要	3
4 調査の工程	4
5 各調査区の概要	5
II 遺構の概要	
1 基本層序	7
2 遺 構	8
(1) I期の遺構	9
(2) II期の遺構	11
(3) III期の遺構	14
(4) IV期の遺構	20
III 遺物の概要	
1 I期の遺物	23
2 II期の遺物	25
3 III期の遺物	31
4 IV期の遺物	43
IV 自然科学的分析	
1 勝川遺跡より産した昆虫群集について	55
2 勝川遺跡出土瓦資料胎土分析報告	63
V ま と め	68
付表	70

図版目次

図版 1	遺構全体図(1)	図版21	59C区Ⅲ期遺物出土状態
図版 2	遺構全体図(2)	図版22	60A区、61A区の遺構
図版 3	遺構図(1)	図版23	61A区、61B区遺物出土状態
図版 4	遺構図(2)	図版24	62A区の遺構(1)
図版 5	遺構図(3)	図版25	62A区の遺構(2)
図版 6	遺構図(4)	図版26	62B区の遺構
図版 7	遺構図(5)	図版27	62C区の遺構
図版 8	遺構図(6)	図版28	62J区の遺構(1)
図版 9	遺構図(7)	図版29	62J区の遺構(2)
図版10	遺構図(8)	図版30	62J区の遺構(3)
図版11	遺構図(9)	図版31	63A区の遺構
図版12	遺構図00	図版32	90B区の遺構
図版13	遺構図01	図版33	90C区の遺構
図版14	遺構図02	図版34	I期、II期の遺物
図版15	遺構図03	図版35	II期、III期の遺物(1)
図版16	遺構図04	図版36	III期の遺物(2)
図版17	遺構図05	図版37	III期の遺物(3)
図版18	59C区全景	図版38	III期の遺物(4)
図版19	61A・B区全景	図版39	IV期の遺物(1)
図版20	59C区Ⅲ期の遺構	図版40	IV期の遺物(2)

挿図目次

第1図	遺跡の位置(1).....	1	第13図	勝川庵寺北大溝.....	15
第2図	遺跡の位置(2).....	1	第14図	勝川庵寺東大溝.....	15
第3図	遺跡周辺の地質.....	2	第15図	勝川庵寺南大溝.....	15
第4図	勝川遺跡と周辺の遺跡.....	2	第16図	区画溝SD134断面図.....	16
第5図	調査区位置図.....	4	第17図	Ⅲ期掘立柱建物群(1).....	18
第6図	基本層序(61B区北壁).....	7	第18図	Ⅲ期掘立柱建物群(2).....	19
第7図	I・II期遺構全体図.....	10	第19図	IV期遺構全体図.....	21
第8図	南東山地区SB74.....	12	第20図	SZ出土遺物.....	23
第9図	南東山地区SB75.....	12	第21図	62J区出土石器.....	23
第10図	南東山古墳測量図.....	13	第22図	I期の遺物(SD165出土).....	24
第11図	南東山古墳墳裾断面図.....	13	第23図	方形周溝墓遺物出土位置図.....	26
第12図	Ⅲ期遺構全体図.....	14	第24図	I期の遺物(SZ30出土).....	26

第25図 II期の遺物 (SZ27・24・25出土)	第37図 軒平瓦・文字瓦・瓦塔
27	42
第26図 I・II期の遺物	第38図 IV期の遺物 (下街道側溝)
28	46
第27図 埴輪	第39図 IV期の遺物 (区画溝)
30	47
第28図 II b・III期の遺物	第40図 IV期の遺物 (区画溝)
33	48
第29図 III期の遺物	第41図 IV期の遺物 (町屋)
34	49
第30図 III期の遺物	第42図 IV期の遺物 (廃棄土坑等)
35	50
第31図 III期の遺物	第43図 IV期の遺物 (廃棄土坑)
36	51
第32図 平瓦	第44図 IV期の遺物 (廃棄土坑)
37	52
第33図 平瓦・軒丸瓦	第45図 IV期の遺物 (廃棄土坑)
38	53
第34図 軒丸瓦	第46図 IV期の遺物 (金属・石製品)
39	54
第35図 軒平瓦	第47図 出現昆虫の顕微鏡写真(1)
40	61
第36図 軒平瓦	第48図 出現昆虫の顕微鏡写真(2)
41	62
	第49図 重鉱物組成
	67

表 目 次

第1表 調査の工程	5	第3表 出現昆虫の種名およびその特徴	59
第2表 遺構の時期区分	8	第4表 試料の重鉱物組成	66

〈調査協力者〉

発掘調査

加藤とよ江（調査研究補助員） 水野弘子（発掘調査補助員）
東 征江 伊藤芳子 上田外志美 吉川綾子 小松豊子
浜田高子 藤井洋子 松井かねよ 齋島久仁恵 水野アイ子
山田益恵 安達たみ 足立利子 足立洋子 大野たかゑ
梶藤良子 加藤政子 加藤美智子 川島鈴子 川端春美
桜田恵子 佐竹富士子 神野みどり 杉浦あつ子 外 紗子
土屋登美子 野村明美 野村弘子 橋本由紀子 長谷川和子
長谷川隆子 藤井綱代 福田光子 前川禮子 杉浦八重子
松田郁代 山津久子 山中和子 吉田純子 青柳美代子
安藤信子 伊藤静枝 岡田常光 小椋八重子 加藤久子
川村悦子 栗本知子 楠原まゆみ 小林八州子 斉藤希成
佐伯宣子 坂井千寿子 高木正和 田口典子 竹川みゆき
塚本あけみ 長井冬子 長瀬辰郎 中原里美 中村雅子
長谷川末子 馬場とみゑ 福富孝子 松澤洋子 松森雅良
福山幸子

整理作業

岡田智子（調査研究補助員） 植田恵子 加藤敏子
河瀬豊子 大江茂子 杉山美智子 戸川真理 後藤徳子
多田富代 玉作美智子 服部智子 山口紗子 加藤明美
鈴木登貴子 竹川裕見子 渡辺たかみ

I 調査概要

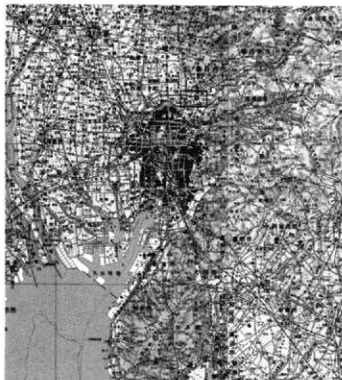
1 遺跡の立地と歴史的環境

位置 勝川遺跡（遺跡番号04127、東経135°57'、北緯35°13'）が所在する春日井市は、庄内川をはさんで名古屋市守山区の北に位置し、西は名古屋市北区・名古屋空港のある西春日井郡豊山町、北は小牧市、東は岐阜県多治見市と接する。

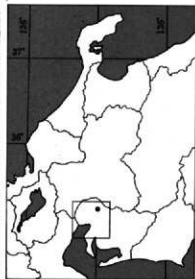
地形 春日井市は、尾張丘陵と濃尾平野との境界付近を占め、県境にある標高約400mの道樹山・弥勒山などの古生層山地、その西に展開する標高約200m以下の新第三紀丘陵、5段の段丘面（桃山・田楽・小牧・鳥居松・春日井）、そして庄内川の氾濫原である現沖積面へと続き南西端の勝川橋付近で標高約11mになる、東に高く西に低い地形である。庄内川を挟んだ対岸の名古屋市守山区においても、春日井市域と同様に低位丘陵と段丘が発達している。勝川遺跡は春日井市の南西端に位置し、JR中央線の勝川駅の南西約500m付近を中心

鳥居松面 として約12万㎡の広がりを持つ。遺跡は、標高14~13mの鳥居松面の縁辺部からその南に広がる標高約11mの現沖積面にかけて立地し、段丘崖の湧水を集めて流れていた地蔵川がほぼその南限と考えられる。

鳥居松段丘上には南東山古墳を始め、山神古墳、笹原古墳、狐塚古墳、兜塚古墳などがあり、勝川古墳群を形成している。また勝川遺跡の西1~1.5kmには白山神社古墳・二子山古墳・春日山古墳などの味美古墳群、その南には白山藪古墳などの味岡古墳群がある。



第2図 遺跡の位置(2)



第1図 遺跡の位置(1)

段丘下では、王子製紙の工場拡張工事に際して弥生時代中・後期の土器が確認された王子遺跡以外には従来ほとんど遺跡は知られていなかったが、環状2号線の事前調査によって町田遺跡、松河戸遺跡が確認された。町田遺跡からは弥生時代後期の住居跡や方形周溝墓が見つかり、同時代の勝川ムラの分村的性格が明らかにされた。松河戸遺跡は条里制地割りの残る所として良く知られていたが、発掘調査によって、地割りは14・15世紀以後のかなり新しい時代のもので、水田下の所々に弥生時代や縄文時代の遺構が存在することが明らかになった。特に宇安賀の弥生時代前期の環濠集落跡は注目に値するし、さらにB.C. 火山灰 1200年頃の火山灰層（松河戸火山灰）が確認され、今後の発掘調査に対し、年代決定のための良い指標を提供することになった。



第3図 遺跡周辺の地質



第4図 勝川遺跡と周辺の遺跡 (1/25,000)

1 勝川遺跡、勝川庵寺	8 兜塚古墳	15 春日山古墳	22 白山藪古墳
2 笹原古墳	9 東白塚古墳	16 伊勢山古墳	23 町田遺跡
3 山神古墳	10 愛宕神社古墳	17 シギ塚古墳	24 松河戸遺跡
4 狐塚古墳	11 ドンドン塚古墳	18 岩屋堂古墳	25 松新遺跡
5 南東山古墳	12 白山神社古墳	19 長塚古墳	26 春光稲荷古墳
6 大塚古墳	13 二子山古墳	20 大塚古墳	
7 森（オシメンド）古墳	14 御旅所古墳	21 天神殿古墳	

2 調査に至る経緯

勝川遺跡は春日井市勝川町4丁目、5丁目、長塚町にかけて所在する。特に勝川町5丁目付近は古瓦散布地として知られ「勝川廃寺」の存在が推定されていた。しかし、当地に名古屋環状2号線（一般国道302号線）や国鉄瀬戸線が通ることになり、それに伴い勝川駅を中心とした総合的な開発計画が策定され、勝川土地区画整理事業も実施されることになった。そのため昭和55年から春日井市教育委員会による勝川廃寺範囲確認調査、昭和56年から（財）愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部による環状2号線用地内の調査も実施され、多くの成果をあげた。昭和59年からはさらに国鉄瀬戸線・勝川土地区画整理事業に伴う調査も開始された。昭和60年からは埋蔵文化財調査部を母体として設立された（財）愛知県埋蔵文化財センターが調査主体となり調査を進め、平成2年度をもって勝川遺跡における予定の全発掘調査を終了した。

3 遺跡の概要

昭和55年以後の勝川遺跡の発掘調査の成果の一部はすでに春日井市教育委員会、（財）愛知県教育サービスセンターによって公表されており、本センター実施分についても『年報』、『勝川遺跡 1988』によって発表してきた。

時期区分 これらによれば、勝川遺跡は奈良・平安時代の勝川廃寺のみではなく、古くは縄文時代晩期から現代までの人々の活動の跡が見られる複合遺跡で、Ⅰ期：弥生時代中期、Ⅱ期：後期から古墳時代、Ⅲ期：奈良・平安時代、Ⅳ期：江戸時代後期の四期に、それぞれ集落形成、墓域形成、寺院建立、宿場町形成といった特徴的な内容が確認されている。

この報告書で取り扱う発掘調査でも、これを追認したものとなった。

勝川遺跡関係文献

- 春日井市教育委員会1981～1984『勝川廃寺範囲確認調査概報』第1～4次
- （財）愛知県教育サービスセンター1982『環状2号線関係発掘調査中間概報Ⅰ』
 - （財）愛知県教育サービスセンター1983『環状2号線関係埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』
 - （財）愛知県教育サービスセンター1984『勝川』
 - （財）愛知県教育サービスセンター1985『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』
 - （財）愛知県埋蔵文化財センター1986『年報 昭和60年度』
 - （財）愛知県埋蔵文化財センター1987『年報 昭和61年度』
 - （財）愛知県埋蔵文化財センター1988『勝川 1988』
 - （財）愛知県埋蔵文化財センター1988『年報 昭和62年度』
 - （財）愛知県埋蔵文化財センター1989『年報 昭和63年度』
 - （財）愛知県埋蔵文化財センター1990『年報 平成元年度』
 - （財）愛知県埋蔵文化財センター1991『年報 平成2年度』

4 発掘調査の工程

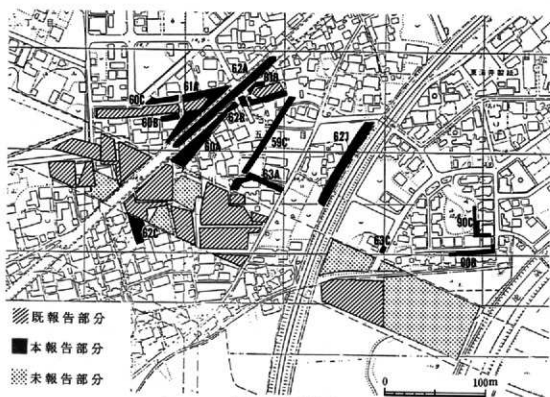
発掘調査は、用地買収と家屋の立ち退きの進展に伴い実施した。土地区画整理関係の発掘調査は、昭和59年から(財)愛知県教育サービスセンター埋蔵文化財調査部が主体になって開始したが、翌年には埋蔵文化財調査部を発展的解消して(財)愛知県埋蔵文化財センターが設立されたため、同センターの事業として調査が引き継がれた。

各調査区ともバックホウを用いた表土掘削から開始した。旧国道19号線に沿う地域に大規模な擾乱が多く認められたが、それ以外はおおむね遺構の遺存状態は良好であった。表土は近・現代の整地層であり、この整地層の下面が遺構検出面になった。

遺構検出に先立ち、まず、国土座標による基準杭を設定し、遺構掘削後原則としてヘリコプターによる空中写真測量を実施した。図化にあたっては、1/50基本平面図を作成し、必要に応じて1/20で土層断面図、1/10で遺物出土状態図を作成した。

また適宜発掘調査の進捗状況や遺構検出状況、遺物出土状況などの写真撮影を実施し、空中写真測量に前後して、高所作業車を用いて調査区全体の撮影を実施した。

遺物の整理は、現場事務所で行った洗浄や出土地点の注記等の基礎的な整理作業を実施して、「年報」や「情報」に発掘調査の概要を報告した。また平成3年度には、報告書作成のため、遺物実測図の作成、復元した遺物の写真撮影などの整理作業を実施した。



第5図 調査区位置図

5 各調査区の概要

調査区には、それぞれ昭和期は年度、平成に元号が変わって以後は西暦年号下2桁にアルファベットを付け加えて調査区名としている。

- 昭和59年度 59C区** 旧国道19号線とJR中央線の中間付近の幅6mの道路部分。攪乱は少なかった。方形周溝墓2基の他には、III期の掘立柱建物群と堅穴住居跡、東西方向に延びる溝を検出。
- 昭和60年度 60A区** 旧国道19号線の南に沿った調査区。家屋転居に伴う大規模な廃材投棄坑があった。鳥居松礫層が浅く、近代以降の整地が著しい。IV期のかまどや掘立柱建物を検出。東端ではIII期の方形掘り形と柱痕跡の残る柱穴が並ぶ掘立柱建物、中央付近では寺域内を区画するらしい東西方向に伸びる溝とそれに直交する溝を確認した。
- 60B区** JR城北線の南側道部分に設定。薄く広げた碎石の下はすぐ礫層で、北西端からIII期に属するらしい堅穴住居跡のコーナー部分と柱穴を検出。
- 60C区** JR城北線の北側道部分に設定。中央は礫層が浅く、現代の攪乱がひどい。西端と東端部分に赤色粘土層が残り、溝や土坑を検出。
- 昭和61年度 61A区** 旧国道19号線北側に接するJR城北線の側道部分。IV期の河原石を積んだ石組井戸や溝を検出した。中央やや南寄りから礫層に1m以上も深く掘り込んだ大規模な方形掘り形の柱穴列を発見。掘形からは布目瓦しか出土せず勝川庵寺の主要建物の一つと推定。
- 61B区** 旧国道19号線南側に接するJR城北線の側道部分。全面に赤色粘土層が残り、狹

年度	調査区	面積	月															
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3				
昭和59年度	59C	450㎡						■	■	■	■							
昭和60年度	60A	1,033㎡														■	■	
	60B															■	■	
	60C																■	■
昭和61年度	61A	1,033㎡						■	■	■	■							
	61B							■	■	■	■							
昭和62年度	62A	2,813㎡																
	62B				■	■												
	62C										■	■						
	62J				■	■												
昭和63年度	63A	450㎡			a ■												b ■	
	63C												■					
平成2年度	90B	596㎡			■	■												
	90C																■	■

第1表 調査の工程

い部分にも拘らずⅢ期の溝やⅡ期の方形周溝墓を検出。いずれの周溝からも弥生時代後期の壺などの土器が出土した。

昭和62年度 62A区 旧国道19号線部分。61A区で検出した大規模な掘り形の柱穴列の続きを確認した。61B区に接する部分では赤色粘土層が残り、方形周溝墓を検出した。この辺りがⅡ期の墓域である事が分かった。

62B区 61B区と62A区の南に接する「へ」字状の部分。東半では方形周溝墓、西半ではⅢ期の掘立柱建物を検出した。

62C区 名古屋環状2号線の南側に設定した調査区。Ⅳ期の遺構がかなり確認できた。また調査区南端で東西方向に平行して延びる幅3mの2条の溝があった。これは予想していたもので勝川廃寺の南を区画する溝とその内側の溝と推定。

62J区 勝川廃寺の範囲外と推定し、調査を予定していなかったJR中央線の北側の道路部分。道路工事の立ち会い中に遺構を確認。工事をストップして急遽調査した。方形周溝墓や溝、竪穴住居それに勝川廃寺の東を区画するらしい南北方向の溝を検出した。

昭和63年度 63A区 旧国道19号線とJR中央線の中央付近の調査区。攪乱が多い。

63C区 JR中央線の南の狭い調査区。灰軸陶器に混じり弥生土器が出土した。

平成2年度 90B区 南東山古墳の南側の東西に走る道路部分の調査区。北西から南東にのびるⅡ期の溝を検出。

90C区 南東山古墳の東側墳裾部分にかかる道路部分の調査区。墳丘盛り土の下に古墳時代初頭の竪穴住居跡を数棟検出。

(松原)

II 遺構の概要

1 層位

調査地の旧地表は標高13~14mを測り、全体に北東から南西に向かってわずかに傾斜している。層位は、基本的には上から現代を中心とする上部整地層(第I層)、江戸時代後期から明治時代の下部整地層(第II層)、奈良・平安時代の整地層である褐色粘質土(第III層)、そして地山と考えられる第IV層の赤色粘質土層、黄色砂質土、礫層と続く。

整地層 第I層と第II層との境界は必ずしも明確ではなく、薄く堅い整地層がいく層にも重なっているのが認められ、頻繁な建替えが想像される。これは特に旧国道19号線に沿った地域で著しい。なお第II層にはかなりの割合で奈良・平安時代の瓦が含まれており、石組井戸やかまどなどの遺構にこうした古い瓦が再利用されていることも時折見られる。

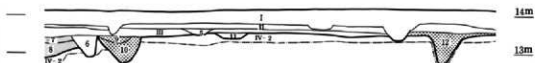
第III層は部分的に残存するものであり、瓦・須恵器・弥生土器を含む。

第IV層の赤色粘土層も、礫層が深く下がっている場所に、部分的に認められ、ここに方形周溝墓が確認されることが多い。この粘土層の成因は、良く分かっていない。礫層はい

鳥居松礫層 わゆる鳥居松礫層で、拳大のチャート礫が多い。

遺構の検出は整地層中での確認が難しく、I層とII層との境界で近世の遺構を確認した場所は狭い。ほとんどの調査区では表土を排除し、赤色粘土もしくは礫層上面で初めて検出ができ、しかも弥生時代から近世に至る遺構を同一面で確認した。

なおJR中央線の北西側を字名から上屋敷地区と呼ぶのに対し、東側を南東山地区と呼ぶが、こも鳥居松段丘上であるため、基本層位は他の地区と変わらない。下街道からかなり離れるためにIV期の遺構が見られないものの、近・現代の整地のためにかなり攪乱をうけており、遺構検出面は整地層下の鳥居松礫層上面である。なお90C区は南東山古墳の東側墳丘裾を調査することになり、表土(耕作土)の下に古墳の盛り土があり、黒褐色粘質土(弥生時代遺物包含層)、鳥居松礫層という層序になっていた。



I 上部整地層	7 明褐色7.5YR5/8粘質土(SD79埋土)
II 下部整地層(原築状)	8 褐色10YR4/6粘質土(SD79埋土)
III 明褐色7.5YR5/8粘質土	9 明褐色7.5YR5/8粘質土
IV-2 明黄褐色10YR6/8砂質土(地山)	10 明赤褐色5YR5/8粘質土
5 明褐色7.5YR5/6粘質土	11 黄褐色10YR5/8粘質土
6 明褐色7.5YR5/8粘質土	12 赤褐色5YR4/8粘質土(S227周溝埋土)

第6図 基本層序 (61B区北壁)

2 遺構

検出した主な遺構は、方形周溝墓18基、堅穴住居10棟、掘立柱建物13棟、溝18条、土坑8基、井戸1基である。また大規模な土坑が多数認められたが、これらはいずれも現代の家屋転居に伴う廃材投棄坑であることが明らかであり、遺構との関係を明らかにするため、廃材投棄坑の上端線のみ図示した。

検出した遺構は、Ⅰ期（弥生時代中期）、Ⅱa期（弥生時代後期）、Ⅱb期（古墳時代）Ⅲa期（白鳳～奈良時代）、Ⅲb期（平安時代）、Ⅳ期（江戸時代後期～明治時代）に大別する。なお、遺構には、方形周溝墓SZ、建物SB、溝SD、井戸SE、土坑SKなどの遺構の種類を示す記号の後に既刊の報告書からの通しの一連番号を付した。

時期区分	時 期	既報告分（上屋敷のみ）	今回報告分
Ⅰ	弥生中期	SZ 14, 23 SK 04, 41 SD 10	SZ 23, 30, 32, 34, 35, 36, 39, 40, 41, 42, 43, 44 SD 165, 175
		SZ 15, 16, 17, 18, 19, 20, 22, 24, 25	SZ 16, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 37, 38 SD 163, 170
Ⅱ	a	SZ 03, 05, 09, 10, 11, 13 SK 52	SZ 31 SB 73, 74
	b	古 墳	
Ⅲ	a	7C末～8C前 SB 08, 09, 20, 21, 22, 23, 46, 47 SD 33, 34, 37, 63, 64, 65, 79, 81, 82, 84 SK 53	SB 47, 48, 49, 50, 51, 52, 56, 57, 58, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 69, 71, 72 SD 79, 159, 162, 164
	b	8C後～	SD 133, 134
Ⅳ	18～19C	SA 04, 08, 10 SB 04 SD 20, 74, 75, 77 SK 13, 16, 38, 39, 40, 99, 100, 101, 105 SX 05, 06, 07, 08, 09, 12, 16, 19, 21, 22 SE 01, 02, 03, 05, 07, 09, 10, 11, 12	SB 53, 54 SD 108, 127, 129, 147, 148, 151 SK 339, 379, 382, 383, 388, 418, 562 SX 24

第2表 遺構の時期区分

(1) I期の遺構

62B区、59C区、62J区で方形周溝墓、90B区で溝を検出した。

方形周溝墓

SZ23 62B区東端付近で検出した方形周溝墓。すぐ北側の瀬戸線部分の調査に際し、周溝の一部を確認したため、今回の検出が推定されていた。主軸はN52°W。墓の規模は8.4×7m、溝幅は0.35～0.5m、溝の深さは検出面より0.63m。埋土は、上層が明褐色粘質土、下層が明赤褐色粘質土である。周溝の一部は調査区外のため検出できなかった。四隅に陸橋を持つこと、主軸方向が真北から45°以上振れていることから、遺物は出土しなかったが、I期の遺構と考えられる。

SZ30 62B区中央付近で、東側周溝と西側周溝の一部を検出した方形周溝墓。東溝は幅1.2m、深さ0.9m、底から弥生時代中期の底部穿孔の壺が出土した。西溝はかなり検出が困難であったが、幅1.2m、深さ0.5m、同時期の壺の破片が出土。

SZ32 59C区で検出した方形周溝墓。四隅に陸橋があるタイプで、主軸はN50°W。北西側の周溝が調査区外のため未検出。墓の規模は一辺5.6m。溝幅は0.8m、深さ0.55m。埋土は赤褐色粘質土。

SZ33 63A a 区の西端で東溝と南溝の一部のみ検出した。A b 区の東端では近世の遺構によって削られ確認できなかった。東溝は幅1.2m、深さ0.2m、南溝は幅0.8m、深さ0.2m。埋土は赤褐色粘質土である。遺物は出土しなかったが、埋土と溝の形状から四隅が切れるタイプの方形周溝墓の南東の端と考えられる。

SZ34 63A a 区でSZ33と並んで検出した。西溝と南溝の一部を検出。SZ33同様の埋土であり、遺物の出土は見なかった。西溝は幅0.6m、深さ0.3m、南溝は幅0.6m、深さ0.2m。

SZ35 63A a 区で、SZ34の南東側から北溝と東溝を検出。いずれの溝も幅1.2m、深さ0.5mを測り、埋土中から高蔵期の土器が僅かに出土した。主軸はN12°W。

SZ36 63A a 区で、SZ35の南東側で一条の溝を検出した。長さ5m、幅1.3m、深さ0.5mで、溝中から中期前半の壺の口縁部が出土した。この溝一条だけでは方形周溝墓とはいえないが、他の方形周溝墓の溝と埋土が同じであり、溝が短く終わっていることなどから、南に展開する方形周溝墓と考えられる。

SZ39 62J区で一番南に位置する方形周溝墓。62J区ではこの方形周溝墓とSZ41の2基の主軸方向が異なる。N27°W。四隅が切れるタイプ。東溝は長さ2.6m以上、幅1.2m、深さ0.45m、南溝は長さ3.8m、幅1.2m、深さ0.2～0.35m、南溝から弥生時代中期の壺形土器が出土。西溝は検出できなかった。北溝は調査区外。

SZ40 62J区で検出した四隅が切れる方形周溝墓。主軸方向は、N10°E。北溝は一部調査区外のため全長は不明。幅2.5m、深さ0.7m。西溝は長さ4.7m、幅1.8m、深さ1m。ほとんど遺物は出土せず。

SZ41 62J区で検出した四隅が切れるタイプの方形周溝墓。主軸はN30°W。東溝は長さ6m、幅1m、深さ1m。南溝は長さ6m、幅1.1m、深さ0.4m。西溝はおよそ長さの半分

ほどしか検出できず、続きは調査区外へのびる。幅1.2m、深さ0.4m。墳丘規模は、一辺約8m。SZ40との周溝の切り合い関係から、SZ40より新しい。

SZ42 62J区で検出した方形周溝墓。SZ40にはほぼ平行し、北側に位置する。東溝は長さ5.4m、幅0.8m、深さ0.4~0.7m、西溝は長さ4.2、幅0.6、深さ0.4m、北溝は長さ2.4m、幅0.5m、深さ0.15m。南溝は長さ2.8m、幅1.2m、深さ0.4m。東溝と西溝の間隔から墳丘規模は一辺が5mほどである。やはり遺物の出土はほとんど無かった。

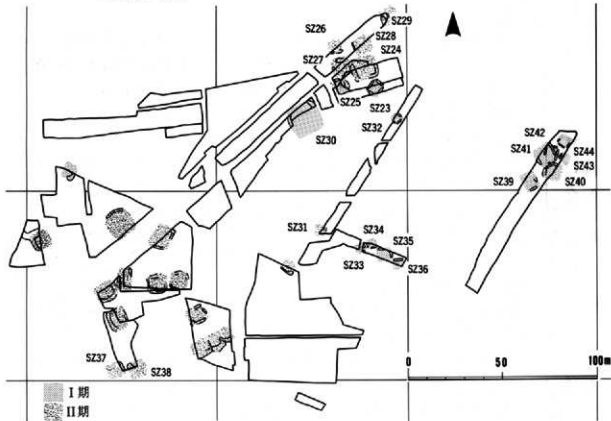
SZ43 62J区で検出した方形周溝墓。SZ42の東から平行した長さ2.5m、幅0.8m、深さ0.3mの溝を1条検出した。溝の形状と埋土から方形周溝墓と推定。恐らく東の調査区外に主要部分があるのであろう。主軸方向はN20°E。

SZ44 62J区の一帯北に位置する方形周溝墓。北溝はⅢ期の遺構に削られ、検出できなかったもの、残りの溝は検出できた。東溝は現在長2.5m、幅0.5m、深さ0.2m、南溝は長さ3.7m、幅0.6m、深さ0.4mを測る。西溝は不明瞭。規模は一辺約5.5mの方形周溝墓と推定。

溝

SD165 62J区で検出した溝。方向はN100°W。幅1m、深さ2m。断面V字形で、非常に多くの弥生土器が出土した。弥生時代中期後葉に比定。

SD175 90B区で検出した溝。方向はN25°W。幅2.9m、深さ0.9m。壺が出土。弥生時代中期後葉に比定。



第7図 Ⅰ・Ⅱ期遺構全体図

(2) II期の遺構

方形周溝墓、溝、竪穴住居を検出した。

方形周溝墓

SZ16 昭和57年度J区の発掘調査において東側半分を検出した方形周溝墓で、62C区の調査では残る西半分を検出した。西側周溝は幅1.6m、深さ0.1~0.2m、遺物は赤生土器の細片が出土した。東西6m、南北7.5m。弥生時代後期後半に比定。

SZ24 昭和59年度B区で検出した方形周溝墓の西側周溝の続きを確認した。幅2.3m、深さ1m。北西角に陸橋部が存在した。周溝の中から壺が2点出土した。主軸方向はN17°W、東西14m、勝川遺跡の方形周溝墓としては大型。弥生時代後期前半に比定。

SZ25 昭和59年度B区で検出した方形周溝墓の北側周溝を確認した。幅1.4m、深さ1m、長さ4mの規模の周溝で、ほぼ中央から壺2点、埴1点出土した。昭和59年度の調査では東側周溝を確認し下副部穿孔の短頸壺と台付盆が出土している。他の周溝は確認できなかった。主軸方向はN21°Wで、規模は一辺約7.5m。弥生時代後期前半に比定。

SZ27 61B区で東・西・南の周溝の一部を確認し、壺が1点出土。62A区で北側周溝を確認し、壺が1点出土した。規模は東西7m、南北7m、北西端に陸橋部がある。主軸方向はN25°W。弥生時代後期前半に比定。SZ24と切り合い関係があり、SZ24に先行。

このほかにも溝の一部しか確認できなかったが、形状や埋土から、この時期の方形周溝墓の可能性が高いものとして、62A区のSZ26・28・29、62C区のSZ37・38があげられる。

溝

SD163 62J区の南端で検出した。幅8m、深さ0.4m。方向はN50°W。弥生時代中期の土器もわずかに混じるが、後期後半の壺・甕などが出土した。住居や墓の位置、溝の規模などを考慮すると、この溝は勝川遺跡の弥生時代後期の環濠である可能性が高い。

SD170 90Bで検出した幅2m、深さ1m、N45°W、弥生時代後期後半の溝である。

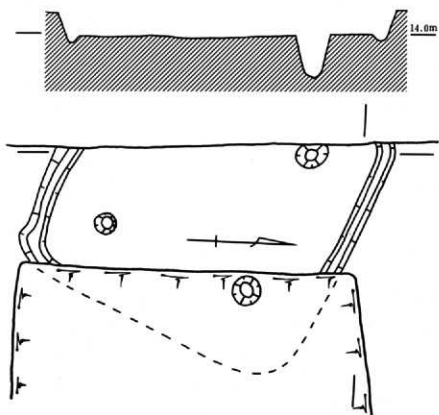
竪穴住居

SB73 90C区北寄り検出。住居跡の2辺を検出、他は調査区外。1辺5.2m、主軸方向はN45°W。床面は検出面である鳥居松礫層を約40cm掘り込む。周溝は断面として確認できるが、平面では不明瞭で部分的に検出。主柱穴は2か所ある。床面中央には緩やかな落ち込みがあり、焼土と炭化物が埋土に混じることからこれは炉跡と思われる。床面の出土遺物から弥生時代後期後半に比定。

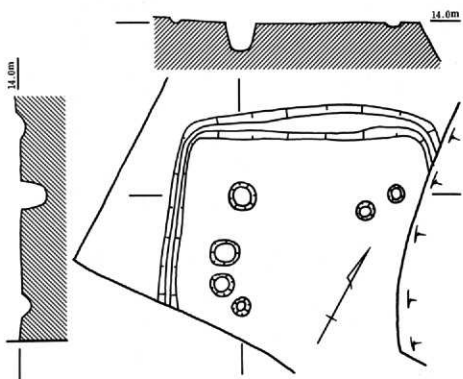
SB74 90C区中央付近で検出。北壁・南壁および主柱穴3か所を確認。床面は鳥居松礫層を30cm掘り込む。東壁は攪乱によってえぐられ、西壁は調査区外になる。南北幅4.7m、主軸方位はN25°E。高杯が出土。弥生時代後期後半に比定。

SB75 90C区南端で北側半分を検出。床面が礫層を掘り込まないために周溝と主柱穴をかわらうじて確認できずにすぎない。東西幅4.1m。ピットは多数確認したが、主柱穴は1か所のみ。主軸方向はN30°W。複合口縁壺や短頸壺などが出土した。弥生時代後期後半に比定。

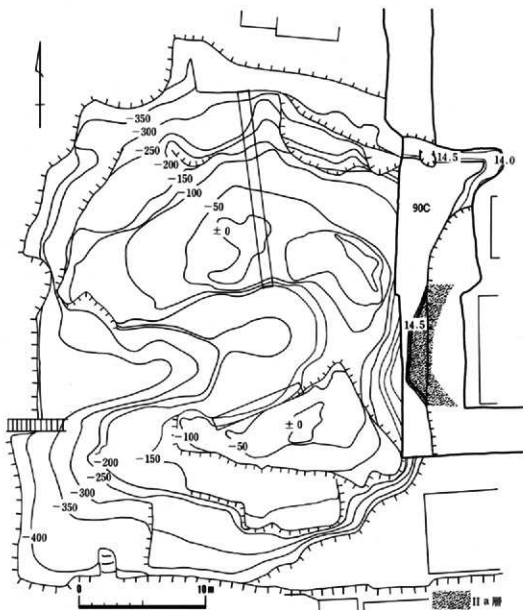
(岡本・松原)



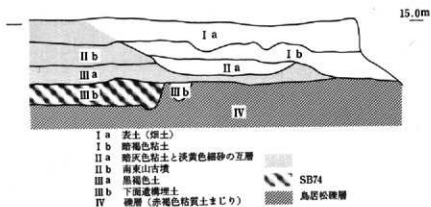
第8図 SB74実測図 (1/60)



第9図 SB75実測図 (1/60)



春日井市教育委員会「南東山古墳」の測量図をトレースし、90C区を加筆
 第10図 南東山古墳測量図 (1/300)



- I a 表土 (原土)
- I b 暗褐色粘土
- II a 暗灰色粘土と淡黄色細砂の互層
- II b 南東山古墳
- III a 黒褐色土
- III b 下面遺構埋土
- IV 總層 (赤褐色粘質土まじり)

- SB74
- 鳥居松機層

第11図 南東山古墳掘削土層図 (1/40)

(3) III期の遺構

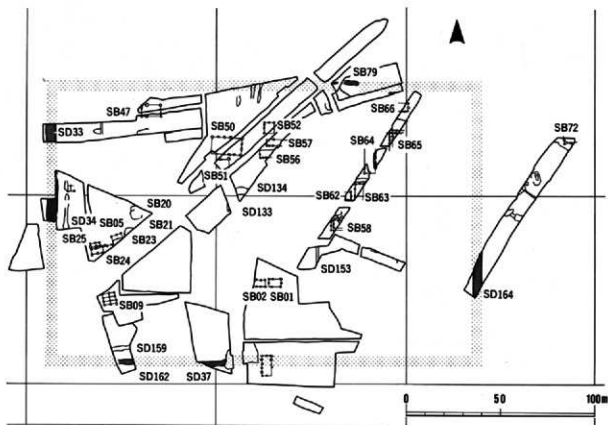
III期は奈良・平安時代で、寺の周囲を巡る大溝と寺域内部を区画する溝、建物、土坑などの遺構を確認できた。

寺の周囲を巡る大溝

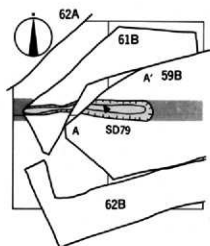
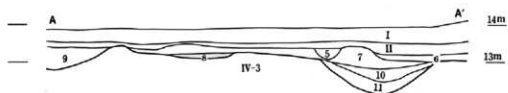
SD79 59B区で検出した溝の続きを61B区で検出した。東西にはぼまっすく延び、瓦や須恵器が出土した。しかし、その西側延長上に当たる62A区、61B区では検出できなかった。旧国道19号線脇でもあり、近代以降削平されたものか。

SD162 62C区南端で検出した幅2.7m、深さ0.5m、東西方向に延びる溝である。瓦と須恵器が出土した。なおこの溝から北7.5mの位置で、SD162に平行する幅2m、深さ0.3mの溝SD159を確認した。これは過去の調査(E区、59A区)で寺域の西側では2条の溝が平行して延びることが明らかになっていることと考え合わせると、少なくとも寺城南側にも2条の溝が巡らしいことが推定できた。

SD164 62J区で検出した幅5m、深さ0.4~1m、南北に延びる溝である。瓦と須恵器が出土した。この溝の確認により、勝川廃寺の東西幅が227mとほぼ確定できたことになる。

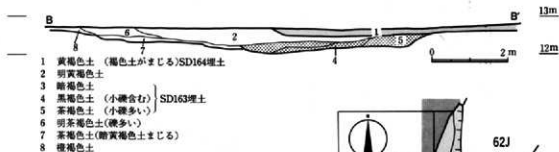


第12図 III期遺構全体図



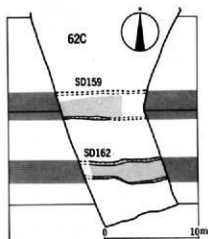
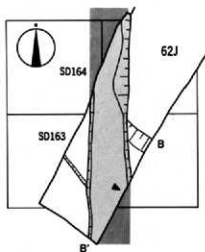
- | | | | |
|------|-------------|----|-----------|
| I | 上部整地層 | 7 | くらい赤褐色粘質土 |
| II | 下部整地層 (版築状) | 8 | 暗黄褐色粘質土 |
| IV-3 | 鳥居松埋層 | 9 | 鮮赤褐色磁質土 |
| 5 | 灰褐色粘質土 | 10 | 黒褐色粘質土 |
| 6 | 褐色粘質土 | 11 | 鮮赤褐色粘質土 |

第13図 SD79実測図



- 1 黄褐色土 (褐色土がまじる)SD164埋土
- 2 明黄褐色土
- 3 暗黄褐色土
- 4 黒黄褐色土 (小礫含む) SD163埋土
- 5 黄褐色土 (小礫多い)
- 6 明赤褐色土 (礫多い)
- 7 赤褐色土 (暗黄褐色土まじる)
- 8 暗褐色土

第14図 SD164実測図



第15図 SD162・159実測図

寺域内区画溝

SD133 60A区で検出した幅0.6m以上、深さ0.2mの南北溝。かつてK区の調査で検出した南北に延びるSK31の北側延長上に位置する。

SD134 60A区で検出した幅3m～4m、深さ0.5mの東西溝。かなり大量の瓦や須恵器、灰釉陶器が出土した。

SD149 59C区中央で検出した幅1.6m、深さ0.3mの断面U字形の東西溝。鮮茶褐色の埋土中から須恵器、瓦、瓦塔などがまとまって出土した。

SD150 59C区で検出した東西溝。SD149の北約22mに位置し、幅1.4m、深さ0.1m。後で述べるSB65と切り合い関係があり、こちらが新しい。

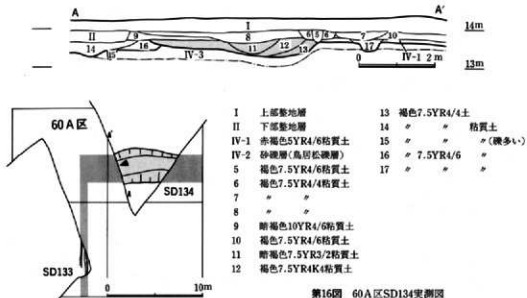
SD153 63A b区で検出した南北溝。幅1.1m、深さ0.7m。

獨立柱建物

SB47 59A区で検出した建物の北側半分を60C区西端で確認。桁行4間。柱間2.6m。柱穴から瓦、須恵器が出土した。

SB50 61A b区と62A区にまたがって確認した建物。桁行5間、梁行3間、柱間寸法は3m。柱穴は1.2m×1mほどの長方形の掘り形で、堅くて掘りにくい鳥居松磯層を1.2mも掘削して太さ30cmの柱を立てている。柱の列がほぼ東西南北に並ぶこと、勝川廃寺の推定される範囲内において、中心よりやや北に位置することなどを考慮すると、この建物は寺の重要な建物の1棟になろう。瓦、須恵器が掘り形から出土。

SB51 62A区でSB50の南側で検出した建物。SB50と同規模の掘り形の柱り穴を3か所



第16図 60A区SD134実測図

確認できたが、他は調査区外のため建物の規模は不明。柱穴の位置から建物の北東隅を検出した事になる。

SB52 62A区で検出した建物。掘り形は小さく浅い。東西2間、南北2間。遺物は出土しなかったが、柱穴が東西もしくは南北に並ぶこと、下街道の真下に位置することからⅢ期と推定。

SB56 60A区東端から62B区にかけて検出した。桁行4間以上、梁行2間の東西に長い建物。柱間は1.8m。長軸はN84°E。

SB57 62B区でSB56の北側で並ぶように検出した。桁行4間以上、梁行2間。東西に長く、長軸はN88°W。

SB58 59C区で検出した東西に長い四面庇の建物。母屋は南北2間、梁行は調査区外のため不明。柱間1.94mの等間。

SB62 59C区で検出した。南北2間、東西2間以上。2m等間。

SB63 59C区でSB62の東側で検出した南北に長い建物。南北3間以上、東西2間。柱間は不揃い。建物の主軸はN3°E。

SB64 59C区においてSB63の北側で検出した南北に長い建物。南北4間以上、東西2間。柱間は2.64mの等間。

SB65 59C区においてSB64の北東側で検出した四面庇の建物。母屋は東西2間以上、南北2間以上。

SB64 59C区北端で検出した建物。南北2間、東西2間以上。東柱列2.15m等間、南柱列1.85m等間。

SB72 62J区北端で検出した建物。東西2間以上、南北2間以上。

竪穴住居

SB48 60C区東端で検出した。赤色粘質土を掘り窪めた周溝と床面の一部を確認。

SB49 60B区西端で、南西隅と主柱穴を1か所検出した。

SB57 59C区で検出。北壁中央にカマド跡が残る。壁高0.15m。住居の主軸はN35°W。

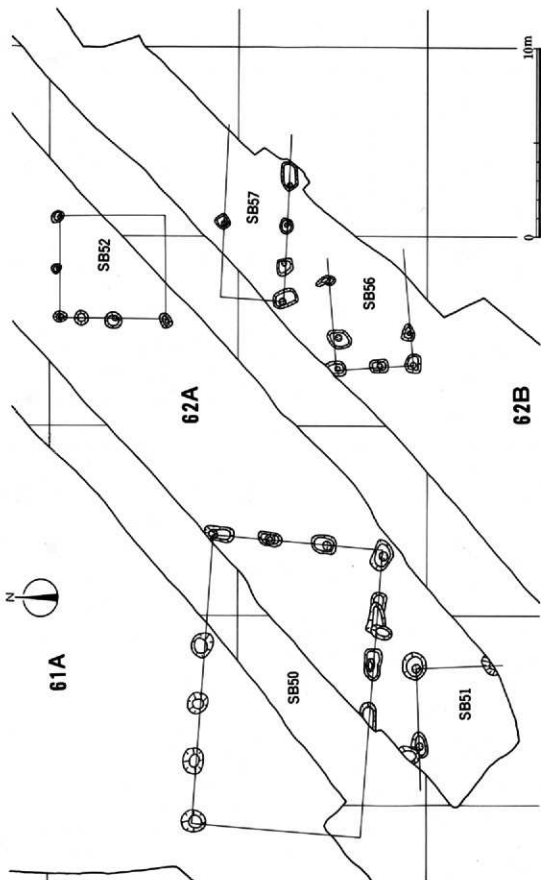
SB58 SB57の北側に隣接して検出。主軸はN18°W。

SB59 SB58と切り合い関係があり、こちらが新しい。

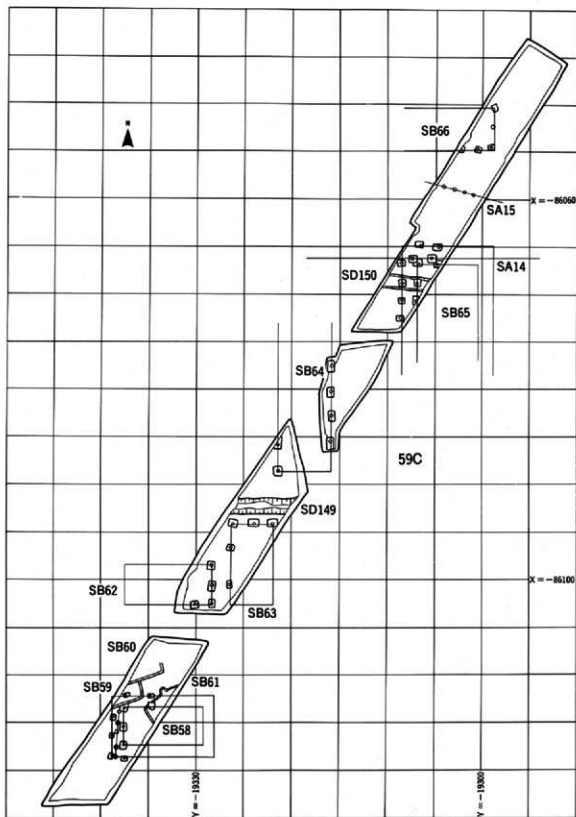
SB67 62J区で検出した。主軸をN65°Wとした住居で、西側半分が調査区外。一辺3.8m、南東側の壁にかまどが残る。

SB69 62J区で検出した。主軸をN75°Wとした住居で、主柱穴2か所を確認。短辺3m長辺4m以上。

SB71 これも62J区で検出した住居で、北東側が土坑で掘削されているが、一辺4mを測る。



第17図 田期の建物群(1)



第18図 II類の建物群(2)

(4) IV期の遺構

下街道の側溝、町屋の区画溝、掘立柱建物、井戸、廃棄土坑などを検出した。

下街道の側溝

SD127 62A区は旧国道19号線の直下にあたり、ここでは下街道も同じ位置にあったことが地籍図から明らかのため下街道の検出に努めた。しかし旧国道の基礎工事が地表下60cmにまで及んでおり、遺構検出面は鳥居松機層上面となり、下街道の道路面は削平されてしまっていた。ただ62A区の東半において側溝と推定できる溝を検出した。SD127は北西側の溝で幅1m、深さ0.4~0.1mで、25mの長さに渡って続いていた。側溝の南東側には土止め用と考えられる杭列が続いていた。溝の埋土の灰色粘質土からは陶磁器のほか昆虫遺体が多数出土した(IV-2、55頁~62頁参照)。

SD129 62A区で検出した下街道の南側溝と推定できる溝で、埋土の滲水性をしめす灰色粘質土から陶磁器が出土した。南側が調査区外のため幅は不明、8mの長さを検出した。なおA区での溝や土坑の在り方から、下街道は南西になるにつれ、旧国道から南へずれるような様子を示す。またSD127とSD129が正しく下街道の側溝とすると、街道幅は約4mとなり、削平を考慮すると、2間幅と推定できる。

町屋区画溝

SD108 61A b区で検出した東西方向に延びる溝。幅0.6m、深さ0.3m、3mの長さを確認できた。土器・陶磁器が出土した。

SD147 59C区南端で検出したL字形に曲がる溝である。片側の端が確認できなかったため溝の規模は不明。陶磁器と共に瓦や須恵器が出土した。

SD148 59C区で検出した東西に延びる溝。幅2m、深さ0.1m。大量の陶磁器が出土した。

SD151 59C区北端で検出した東西に延びる溝。幅1.4m、深さ0.4m。

掘立柱建物

SB53 60A区西端で検出した、主軸をN68°Eとし、東西5間以上、南北3間、1.2m等間の建物。柱穴の底に人頭大よりやや小さい礎石をもつものが含まれる。

SB54 60A区西端でSB53と重なるようにして検出された東西6間、南北2間の建物。主軸はN65°E。

井戸

SE13 62A区で検出した石組みの井戸で、掘り形は直径2.2mの円形をなすと推定されるが北側半分は調査区外のため確認できなかった。安全確保のため、底まで調査はできなかったが、底近くでは石組みではなく瓦組みであることを確認した。端を揃えて積んであった瓦は古代の瓦で、しかも厚い軒平瓦あるいは胴部を打ち欠いた軒丸瓦の瓦当部分を横積みしたものであった。井戸を構築する際に、周囲に石を積むに先立ち安定性を確保するため、付近に散乱していた古代の瓦を再利用したのであろう。

かまど

SX24 60A区で検出した遺構。瓦を横積みにした長径1.6m、短径0.6mの楕円形プランで外側には厚く土が塗られ、内側には灰がたまっていた。瓦は均整の瓦に混じって布目瓦が再利用されていた。

用・排水施設

SK339 60A区で検出した。直径2.3mのほぼ円形で、深さ0.2mを計る。底には黄灰色の粘土が貼りつけてあり、埋土から陶磁器が出土した。周囲には4か所の柱穴が残ることから屋根を持つ施設と考えられる。

特殊土坑

SK379 62B区で検出した、長径1m以上、短径0.7m、深さ0.6mの土坑。埋土中から梵字などを墨書した土師質皿が2枚出土した。地鎮具と考えられる。

廃棄土坑

SK393 62B区で検出した長径1.5m、短径1.2mの土坑。深さ0.4m。陶磁器が出土。

SK392 62B区で検出した長さ10m以上、幅4mの土坑。深さ0.2～0.4m。陶磁器が出土。

SK398 62B区で検出した直径約2mの土坑。深さ0.1m。陶磁器が出土。

SK418 62B区で検出した長径3.5m、短径1.5m以上の土坑。深さ0.2m。陶磁器が出土。

SK562 62C区で検出した土坑。東西6m、南北3.4m、深さ0.9mで北側に一部張り出す。

かなり新しい廃棄土坑で、装飾技法に摺輪や銅版転写が認められる磁器が出土。また内側に「せいろきねん 陣中作」、外側に「清国大平山」と刻書し、「満州焼」、「歩ノ六ノ六」、「安藤」と押印された小坏が出土している。文字通りとするならば20世紀初頭に年代比定できる。

なお遺構のまとまりが認められるものとして、62C区の北東隅で検出した土坑群が指摘できる。これらがかつての調査で検出したSX16やSE08、SD42などと関連をもち、常滑産の甕を埋置した土坑(SK544～550)と粘土を周囲に塗った土坑(SK551～553)、さらに炭化物が堆積した大型土坑(SK555)とで構成され、厨房関係の場であったことが容易に想像される。

(松原)

III 遺物の概要

出土した遺物には、石器、弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、瓦、陶磁器などがある。遺構出土遺物を中心に、時期別に記述する。

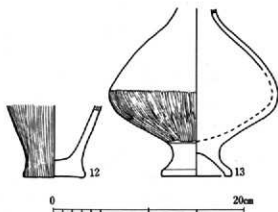
1 I期の遺物

SZ33 (第24図、7～11)

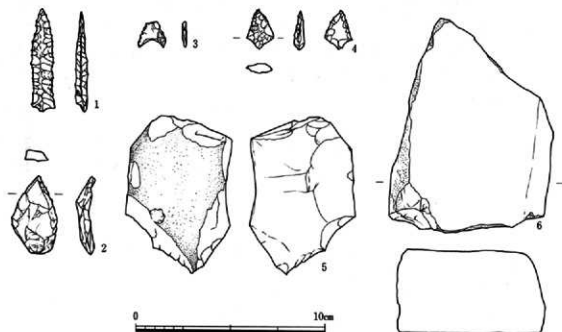
周溝内から壺が出土した。7は壺の口縁部で、凹線文の下に櫛による刺突文が施される。8は口頸部を欠損、底部は平坦で、焼成後の穿孔が認められる。胴部の形態は算盤玉状を呈し、櫛描き横線文と波状文が施される。弥生時代中期後葉に比定できよう。

SZ39 (第20図、12～13)

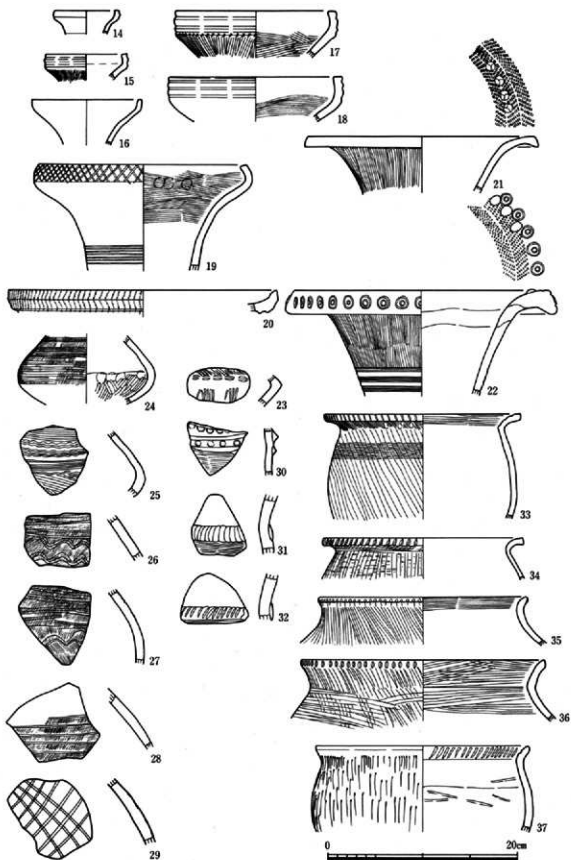
南東側周溝から壺と甕が出土した。13は台がついた壺で胴部は算盤玉状で、下胴部は縦位のヘラ磨きが認められる。口頸部を欠損。弥生時代中期後葉に比定。



第20図 SZ39出土遺物



第21図 62区出土石器



第22図 1期の遺物 (SD165出土)

SD165 (第22図、14~37)

壺や甕が多数出土した。14・16は壺の口頸部で中位で屈曲し、内傾(14)もしくは直立(16)する。弥生時代中期中葉に比定。15~18は受口状口縁部で凹線文が施される。19・23は壺の口頸部で、口縁部は内側に屈曲する受口状口縁部をもつ。19は口縁部に半載竹管により斜格子文を施す。20は口縁部に羽状刺突文を施す。21は壺の口頸部で、強く外反し口縁部内面に三角状浮文と羽状刺突文をもつ。22も壺の口頸部で、強く外反し肥厚する口唇部を持つ。口縁部内面には円形浮文と羽状刺突文それに二重の竹管文があり、口唇部にはやはり二重の竹管文を施す。24は胴部に櫛描き横線文をもつ。25~27は櫛もしくは半載竹管による横線文と波状文をもつ。29は半載竹管による斜格子文を施す。33~37は甕で33~36は口唇部にヘラ刺突列を施す。37は口縁部内面にヘラ刺突列を持ち、胴部外面はヘラけずりを施す。石器としては砥石(6)が出土した。

SD175 (第26図、62)

細片が多く、図示し得るものはほとんど無かった。62は壺で口頸部と下胴部から底部にかけて欠損。頸部から胴部に櫛描き横線文が施され、胴部は算盤玉状を呈する。

2 II期の遺物

SB74 (第26図、57~58)

高杯と器台が出土した。58は高杯脚部で外面はヘラ磨き、上部には櫛描横線が施される。57は器台で外面にはヘラ磨きが施される。58は弥生時代後期前半(山中期)、57は古墳時代初頭(元屋敷期)に比定。

SB75 (第26図、59~61)

壺が出土した。いずれも表面の痛みがひどく調整は不明。59は複合口縁の壺である。61は短頸壺である。古墳時代初頭に比定。

SZ27 (第25図、38~40)

壺2点、甕1点出土。壺はいずれも溝の底近くから出土した。器表面の剝落が著しい。

SZ24 (第25図、41~42)

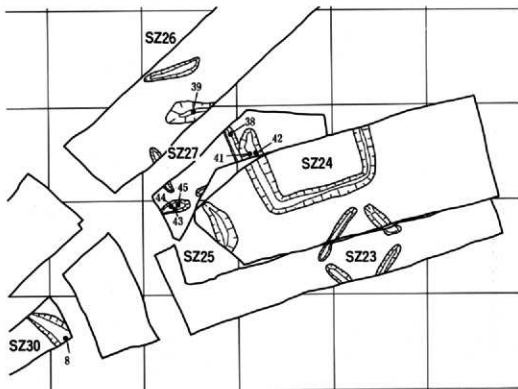
壺2点が、周溝がかなり埋まってから正立して置かれた状態で出土。強く外反する口縁部と球形に近い胴部を持つ。

SZ25 (第25図、43~45)

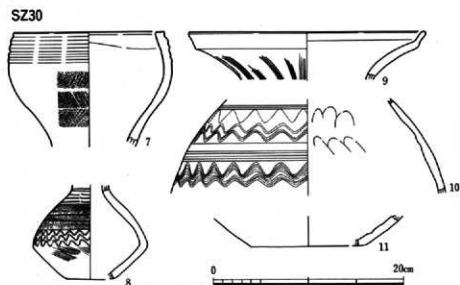
壺2点、埴1点出土。43はヘケメが残る。44はヘラミガキが認められる。45は上胴部に3か所の横線帯をもち竹管文を施す。

SD163 (第26図、46~51)

高杯、壺、甕が出土した。46は碗状の杯部を持ち、口縁部が水平に外へ突き出る。口縁内側には小さい突帯が巡る。47は複合口縁で内外面に櫛による羽状刺突文を施す。49はS

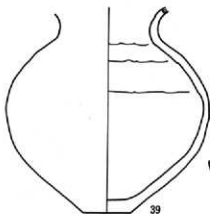
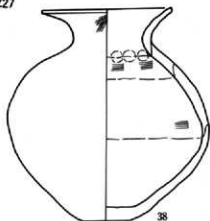


第23図 方形周溝基遺物出土位置

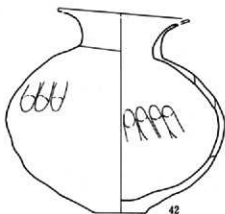


第24図 I期の遺物 (SZ30出土)

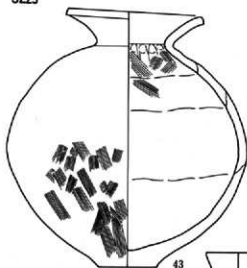
SZ27



SZ24

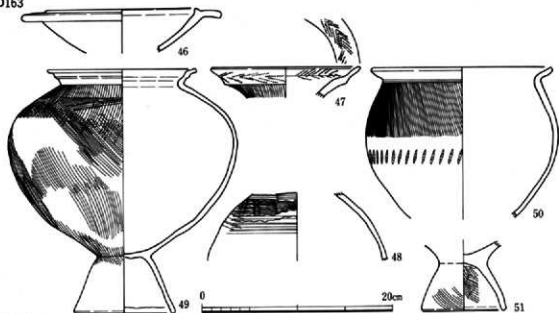


SZ25

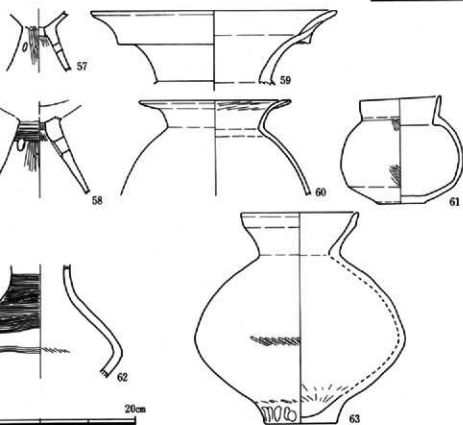
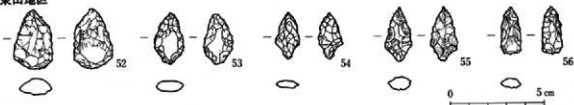


第25図 日野の遺物 (SZ27・24・25出土)

SD163



南東山地区



第26図 I・II期の遺物

字状口縁台付甕。弥生時代中期後葉から古墳時代初頭にかけての遺物が認められる。なお1～4の石鏝もこれらの土器に共伴。

SD170 (第26図、63)

甕が出土。外面は剝落が著しい。口縁内側にはヨコナデ、頸部内側にはヘラミガキが認められる。形状から弥生時代後期前半に比定。

SZ31 (第28図、64～65)

高杯、蓋が出土した。64は天井部と口縁部との境に稜をもつ。65は短脚で透孔はない。底部上面に1条の凸線を巡らす。

SD154 (第28図、67)

甕が出土した。胴部には3本の波状文帯をもつ。口縁部を欠損。

なお、古墳時代の遺物として埴輪がある。遺構に伴うものはなく、いずれも二次堆積であり、ここで簡単にまとめておく(第27図、68～89)。すべて須恵質である。

68は朝顔型埴輪である。円筒埴輪は調整技法によって、タテハケの後ヨコハケを施したもの(69～87)と断続的なタテハケで二次調整が見られないもの(88、89)の二種類に分類できる。前者には、細かいハケメのもの(77～80)、内面は撫でてハケメが認められないもの(81、82)、内面に部分的にヨコハケが残るもの(84～86)などがある。

(岡本・松原)



68



69



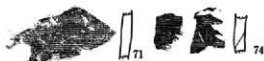
81



70



82



71

74



83



72

75



84



73

76



85



77



86



78



87



79

80



89



第27图 瓦片

3 III期の遺物

III期の遺物としては、須恵器、灰釉陶器、瓦などがある。説明の簡略化のために、須恵器のうち類出器種である杯蓋、杯の分類をする。なお瓦の分類は『勝川』1984に準ずる。

(1) 須恵器・灰釉陶器（第28図～第31図）

須恵器の器種分類

- 杯蓋A つまみがあり、かえりを有するもの。
B つまみがあり、口縁端部を下へ折り曲げるもの。
C つまみがなく、口縁端部は下側に厚くなるもの。
- 杯 A 台はなく胴部で折れ曲がり、逆ハ字状に直線的に体部が外へ広がるもの。
B 杯Aに高台が付くもの。
C 丸みを持った体部で、底に回転糸切り痕が残るもの。
D 杯Cに高台が付くもの。

大溝からの出土遺物

SD162（第28図、90・91） 壺が出土した。浅い体部に強く折り曲げた口縁部を持ち、端部は小さく外反する。

SD79（第28図、92・93） 杯蓋Bと甕が出土した。93の口頭部は内・外面ともに回転横ナデ、体部は外面に平行タタキ、内面に同心円タタキが残る。

SD164（第28図、94～110） 杯蓋B、杯A・B、壺が出土した。95の杯蓋には、体部に焼成前の穿孔が1か所認められる。杯A・Bの底部は回転ヘラケズリで、ヘラ記号が残るものがある（96～101、107、109）。

区画溝からの出土遺物

SD134（第29図、111～120） 杯蓋C、杯A・C、甕のほか新しい遺物として灰釉陶器の皿や瓶が出土した。199は甕で、焼成前に、頸部外面に「人」と1文字が刻書されている。118は灰釉陶器の皿で淡黄色の釉が掛かる。見込み部と外面下半部から底部にかけては施釉されない。なお口縁部は4か所つままれ、輪花皿となる。120は口頭部、注口の受部を欠損するが、浄瓶である。

SD149（第29図、121～135） 杯蓋B、杯A・B、盤、甕、瓶などが出土した。130は恐らく甕であろう。131と132は長頸瓶と考えられる。

住居からの出土遺物

SB61（第30図、136～139） 杯Aのほか高杯138や平瓶139が出土した。138は脚部を欠くが、丸みを帯びた杯部で、外面中央に稜が巡る。

SB71（第30図、142～146） 杯蓋B、杯B・Cが出土した。

SB69（第30図、147～151） 杯蓋B・杯A・Bが出土した。

SB67（第30図、152～154） 152は灰釉陶器の皿。淡黄緑色の釉が口縁部のみ施される。

153は長頸瓶の口縁部である。154は杯Aであるが、大型で厚い。

寺域外の溝からの出土遺物

SD169(第30・31図、155～200) 東西に延びる溝であるが、途中で鍵の手にまがっている。上面では礫が大量にみつかり(図版30)、礫に混じって須恵器や瓦が出土した。杯蓋A・B、杯A・B・C、高杯、鉢、長頸壺、短頸壺、甕などがある。170・171は杯蓋Aで、少さいかえりが認められる。167・168は高杯の脚部である。169は土師器。192・193は鉢。192の底部には糸切り痕が明瞭に残る。193の底部は回転ヘラケズリ。194は長頸壺で口頸部と体部上面に釉が掛かる。196はほぼ垂直な短い口頸部を持つ壺。

(2) 瓦(第32図～第37図)

瓦はIII期の遺構に伴うものがあるが二次堆積であり、また必ずしも出土が多い訳ではない。IV期の廃棄土坑や整地層からの出土量が多い。したがって瓦については、遺構ごとではなく器種ごとに取り扱う。

瓦は丸瓦(KA)、平瓦(KB)、軒丸瓦(KC)、軒平瓦(KD)、鬼瓦(KE)と分類し、それぞれさらに以下のように細分される。

- | | |
|----------------------|--|
| KA I 粘土紐まきつけによる玉縁丸瓦。 | KA II 粘土板まきつけによる行基葺丸瓦。 |
| KB I 粘土紐による桶巻作りの平瓦。 | KB II 粘土板による桶巻作りの平瓦。 |
| KC I 素文縁復弁8葉軒丸瓦。 | KC II 珠文縁復弁8葉軒丸瓦。藤原宮6233
Ac と同一の范を使用。 |
| KD I 三重弧文軒平瓦。 | KD II 四重弧文軒平瓦。 |
| KD III 偏行唐草文軒平瓦。 | KD IV 均整唐草文軒平瓦。 |
| KE I 重弧文鬼瓦 | KE II アーチ形鬼瓦 |
| KE III 鬼面文鬼瓦 | |

文字瓦

201は KA II、202・203は KA I。205は KB I、204・206は KB II。202・203・206は軟質で淡黄白色を呈する。206のみかなり砂粒が目立つ。他は灰色で堅い焼成。

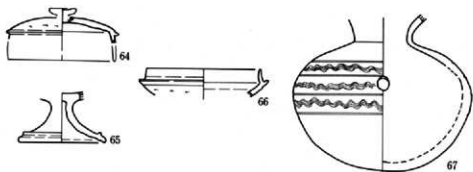
207～213は KC I、214～219は KC II。KC I のうち、外縁がケズリを施すものとナワタタキを施すものがある。212には側面に同心円タタキが認められる。207～210は須恵質、211～213が軟質で淡褐色。KC II は217を除いて軟質、淡褐色。

220～224は KD I、225・226は KD II。いずれも須恵質で、堅い。228～232は KD III、227が KD IVである。

文字瓦 233・234はいずれも平瓦の下面に焼成前にヘラで文字を刻んだもの。前者には「石」(いしへん)、後者には「二十一」と記されている。

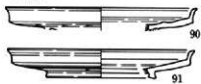
瓦塔 236は瓦塔で、外面はケズリ、内面は指ナデで調整、外面の斗拱を粘土貼り付け、柱を刻線でリアルに表現している。235は軟質の瓦と同じ胎土と焼成で、図の上面には縁が削り出され、下面には端部が薄く中央がかなり厚い。用途不明。

IIb期 (古墳時代)

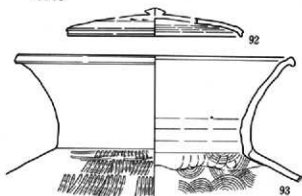


III期の遺物

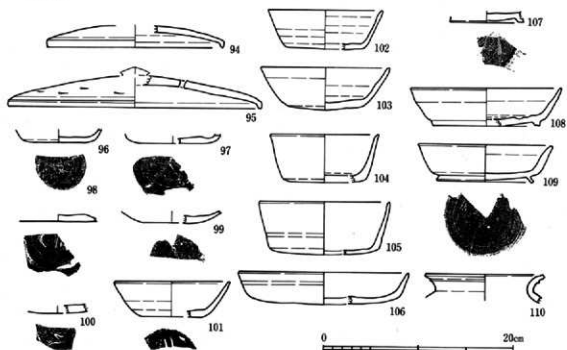
SD162



SD79

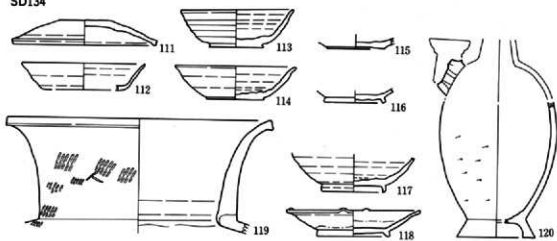


SD164

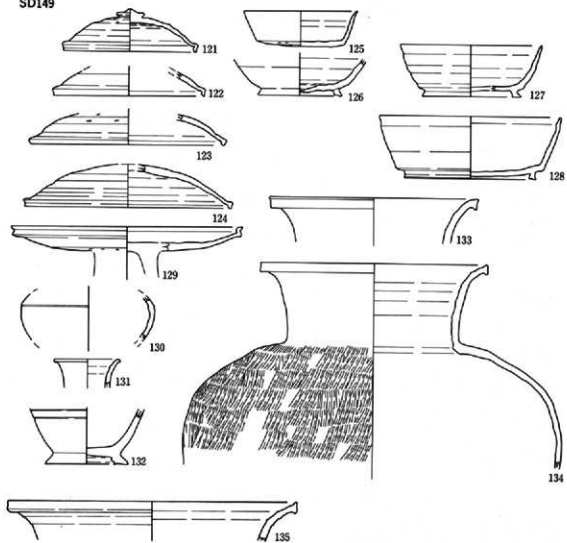


第28図 IIb期・III期の遺物

SD134

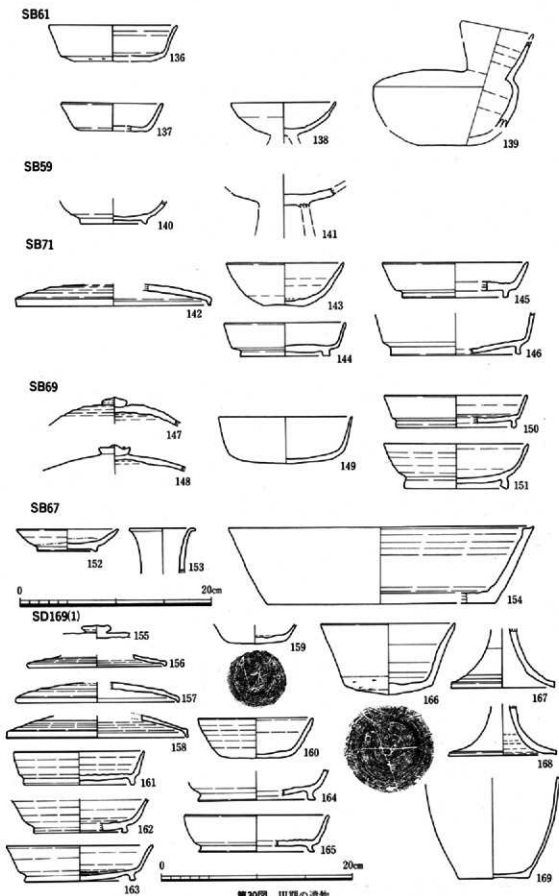


SD149



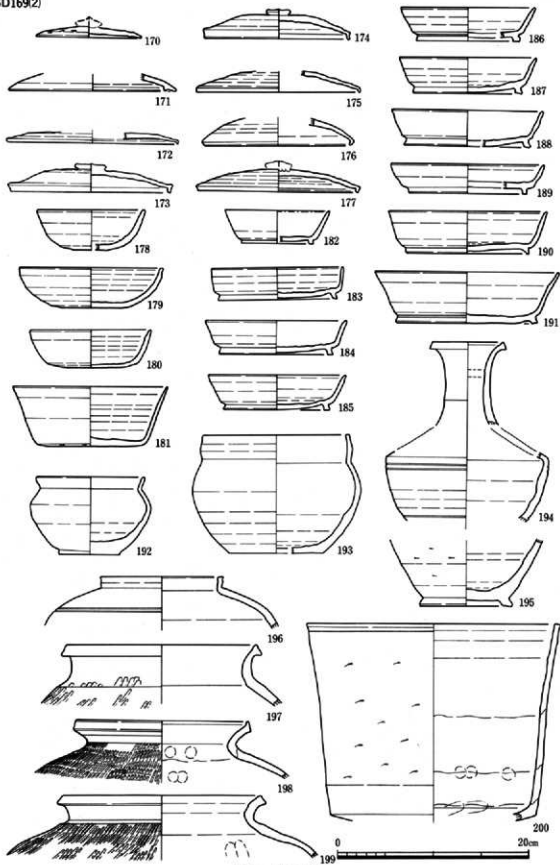
0 20cm

第29図 Ⅲ期の遺物

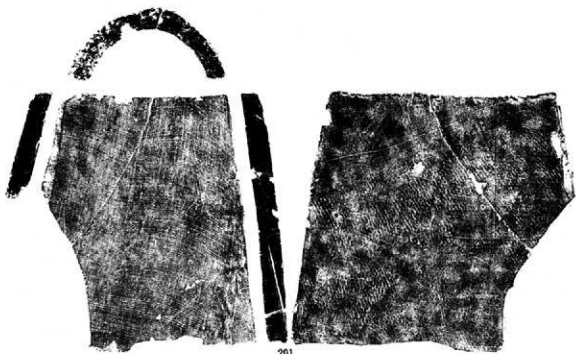


第30図 Ⅲ期の遺物

SD169(2)



第31図 田原の遺物



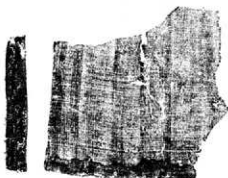
201



202



203



204



第32图 瓦瓦·平瓦

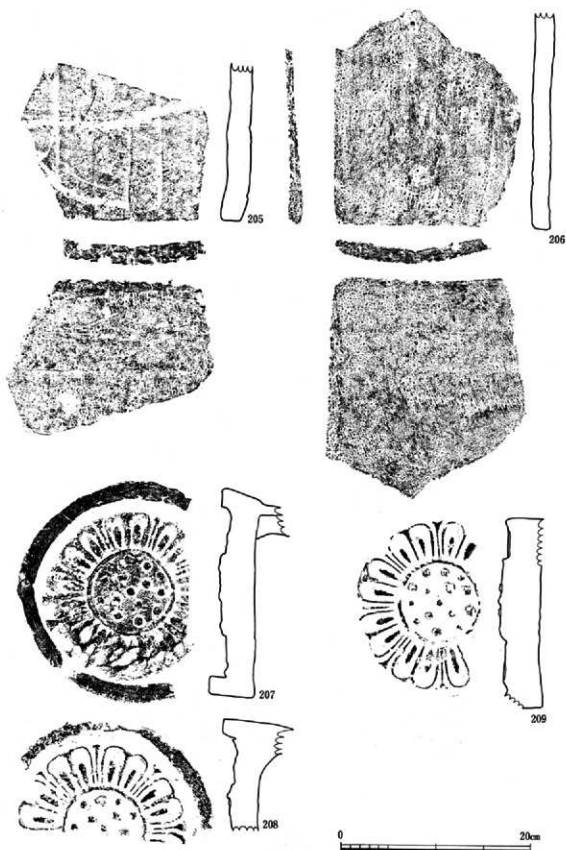
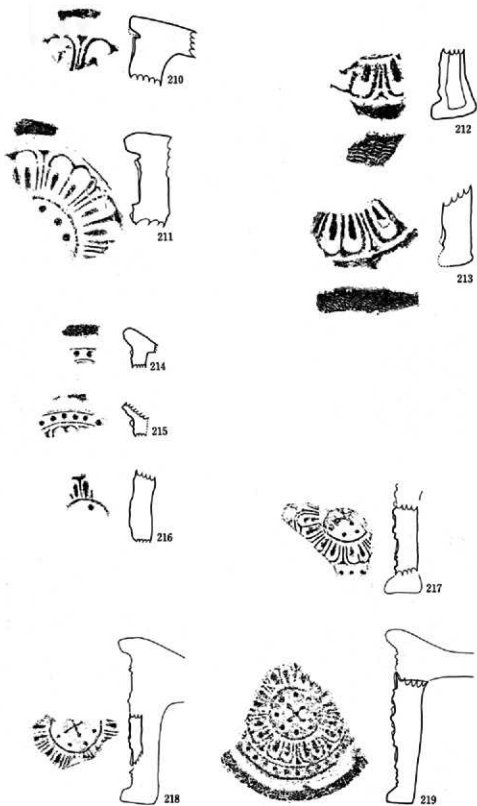


圖33 平瓦・軒丸瓦



0 20cm

第34图 軒九瓦

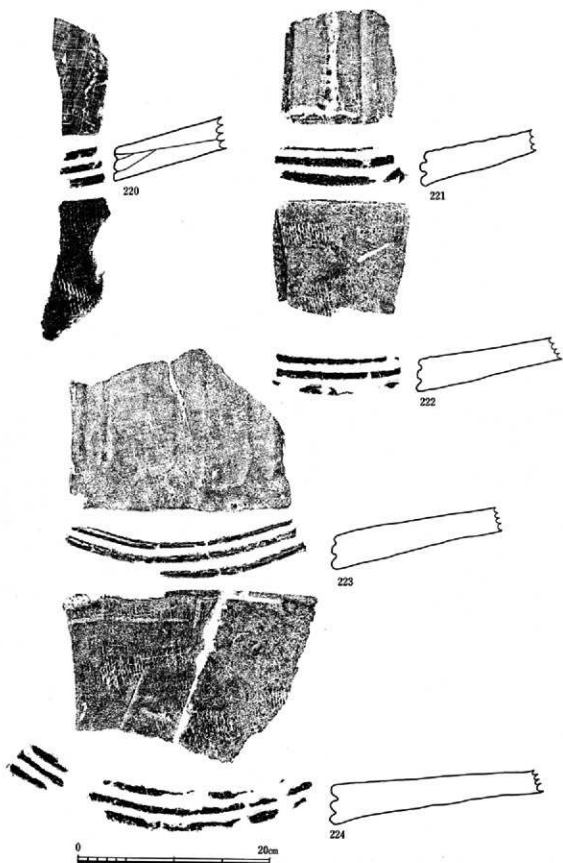
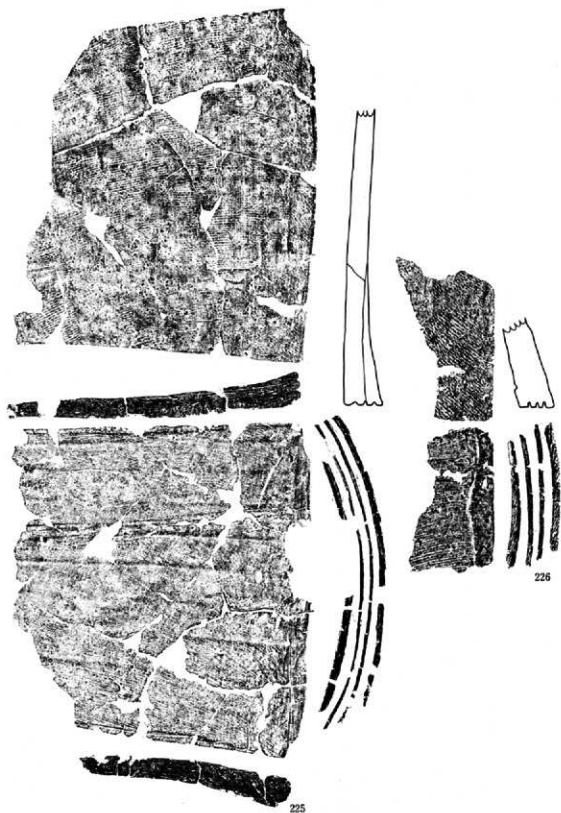


图35 秆九瓦



第36图 卦九元

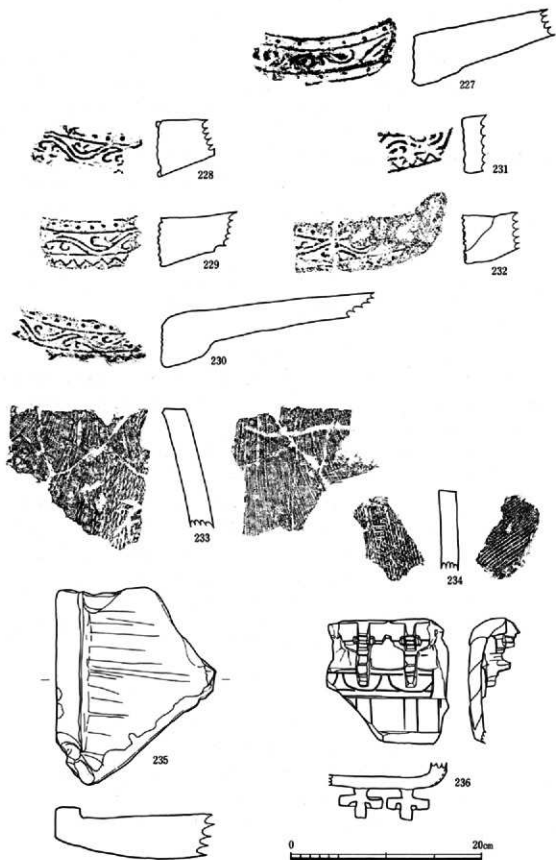


图37 軒瓦·文字瓦·瓦塔

4 IV期の遺物

江戸時代になると幕府によって五街道をはじめ多くの街道が整備された。名古屋清水口から小牧・善師野・美濃国土田を経て太田宿付近で中山道に合流する街道を上街道（木曾下街道 街道）といい、大曾根から内津を経て美濃国に入り旗ヶ根で中山道に合流する街道を下街道（善光寺街道）といった。上街道が、木曾を支配するために尾張藩によって開かれた藩営の街道であったのに対し、下街道は、上街道経由より四里程近い事もあって庶民の旅で賑わったという。勝川宿は、この下街道の大曾根から最初の宿場町で、上街道へ抜ける道も通じていたため、追分の宿として繁栄した。勝川IV期は、宿場町として繁栄の時期にあたり、19世紀を中心とした時代である。

調査では、先に述べたように下街道の側溝や宿場町の町屋を区画する溝、ゴミ穴などが見つかると、多くの遺物を得た。遺物には、土器、陶器、磁器、金属製品、石製品などがあり、遺構から出土した一括遺物を中心にふれることとする。

(1) 土器、陶器、磁器（第38図～第45図）

説明の繰り返しを避けるため、最初に主要器種の種類をしておく。椀や皿に注目すると同じ器種でも陶器と磁器が見られることから、陶器をI類、磁器をII類とし、形状の違いによって器種分類をする。

- 碗
- A 口縁部が小さく外反し、削り出し輪高台の鉄釉の碗。天目茶碗。
 - B 高台脇から丸みを帯びて開いた碗。丸碗。
 - C 高い高台から直線的に開く灰釉の椀で、呉須による紋様がある。広東碗。
 - D 高台脇から丸みをもって開く端反りの碗。
 - E 腰折れ気味に丸みを帯びつつ立ち上がり直線的に開く碗。
 - F 胴部下方は丸みを帯び、上方はほぼ直立する筒形の碗。
 - G 高台脇から垂直に立ち上がる筒形の碗。
- 皿
- A 小型の皿で、高台が付かないもの。
 - B 体部が丸みを帯び開く皿。
 - C 端反りの口縁の皿。
 - D 腰部で折れ曲がる皿。
 - E 折り腰気味に口縁が外反するひだ皿。
 - F 体部が緩やかに広がる大型の皿。
- 鉢
- A 浅い大型の鉢で、丸みを帯びて立ち上がる体部を持ち、口縁部はやや肥厚。
 - B やや深い鉢で、外反気味の口縁部は厚くなり、玉縁状になる。
 - C 深い鉢で丸みを帯びて内湾気味に立ち上がるもの。

SD127 (第38図、237~240) 碗II B・II D、鍋、ミニチュアの灯籠が出土した。

239は型起こしの灯籠で笠部とは別造り。灯明部には馬のレリーフが認められる。240は鍋で、鉄軸が掛かる。外側下半は露胎で、厚く煤が付着している。2個の取手にはそれぞれ3孔が開いている。

SD129 (第38図、241~247) 碗II C・II G、合子蓋、小壺、戸車が出土した。245は合子の蓋で、灰釉が施されている。246は灰白色の釉が掛かり、体部上面には呉須で文様が描かれている。247は陶器の戸車。周辺部がかなり磨滅している。

SD108 (第39図、250~257) 碗II E、鉢I A、播鉢、鍋、瓶などが出土した。

248は外側に単純な文様が呉須で描かれるが、技術が未熟なものか、呉須の部分に釉がよくかかっておらず、不鮮明。249は薄い鉄釉がかかると灯明皿。外面下半は露胎。253は取手も注口も欠損しているが、厚く茶色の釉がかかる瓶。254は花形の取手が付いて胴部上半はツシによる平行線が引かれ、厚く黒色の釉がかかる土瓶。底近くには申し訳程度の三足が付く。厚く煤が付着。256・257はいずれも土器。256は円筒形の体部に薄い板状の三足が付く。煤は係着していない。七輪であろう。257は浅い鍋で、いわゆる炮烙。

SD148 (第40図、258~277) 碗I C・II B・II D・II E・II G・I F、皿I B・I C、鉢I A・I B、そのほか大型の甕や壺が出土した。261は248とまったく同じ物。265はいわゆる鑑茶碗で、外面には黄灰色の灰釉が施され、外面口縁部から内面には鉄釉がかかる。櫛状の道具で刺突文を施す。266・267は鉄釉と灰釉の掛け分け茶碗で、碗I F。体部外面中央付近に数条の沈線を施し、外面には鉄釉を掛け、一部重ねて体部中央から内面全面に灰釉をかける。260は皿II B。鮮やかな紺色の花文が見込に拵書きされている。

272は皿II Cで、内面のみに呉須で花文がえがかれる。見込み部には「寿」字が書かれる。

273は鉢I Bで内面に亀、外面に単純な文様が、呉須で描かれる。274は鉢I A。黄白色の灰釉が掛かる。275・276は壺で、それぞれ肩、台の側面に陰刻で文様が彫られ、鮮やかな緑釉が掛かる。277は水甕で、体部には流水文が彫られ、高台周辺を除き濃緑色釉が施される。

SK393 (第42図、299~300) 碗I Aが出土した。口縁部のすぐ下のくびれが顕著で厚く黒色釉がかかる。高台周辺は露胎。

SK392 (第42図、301~309) 碗I B・I F、皿I A・I B・I D、鉢I C、小壺、大いぶしなどが出土した。301はやや小振りの碗で淡黄色釉がかかる。高台付近は露胎。

302は鉄釉と灰釉の掛け分け茶碗。303は皿I A。灰釉の皿で、灯明皿であろう。304は淡黄緑色釉が施される。高台は断面三角形で大きく、露胎。305は皿I Eで、灰釉が掛かる。見込に呉須で文様を描く。306は皿I D。灰釉皿で内面に花文が描かれる。307は灰釉の小壺。陶器。308は鉢I C。309は常滑窯産のアカモノで、大いぶし。肩部に6孔が外から中に向かって開けられている。内面の浅の部分にも同様な穴が開けられている。外面下胴部には長径12cm、短径6.5cmの楕円形の穴が開けられている。肩には取手が付く。内面の浅より上には厚く黒い煤が付着している。

SK398(第43図、310～313) 碗 I F、甕などが出土した。312は常滑窯産の甕。内湾する口縁部で、外面には指押圧によって施文した1条の突帯をもつ。313も常滑窯産のタドで、口縁部は内側に引き出される。体部には幅20cm、高さ16cmの隅丸三角形の焚口がある。

SK418(第43図、314～317) 碗 I F、搦鉢が出土した。碗はいずれも鉄釉と灰釉の掛け分け茶碗であるが、314が丸みが強く、316は腰部で折れて体部も直線的にやや開き気味に延びる。315は両者の中間のような形状である。

SK562(第44図・第45図、318～317) 碗 I C・II B・II D・II E、皿 I A・II F、鉢 I B・II B、ミニチュアの人形、杯、蓋、香炉、徳利などが出土した。

322は碗 II Bで、印版染付で花文が施される。323は銅版転写によって象の図柄が描かれている。325は磁器の小杯。底裏に「萬古」の印が押されている。四日市の万古焼きの製品を意味するものであろう。326・327は灯明皿。328は皿 II B。クロームによる淡緑色の釉がかり、花文と歌が記されている。330は赤褐色の焼きの杯で、内面には「せいろきねん 陣中作」、外面には「清國大平山」と刻まれ、長方形の枠に囲まれた「歩ノ六ノ六」と「安藤」とが押印されている。日露戦争の記念に陣中で制作したものだろう。

345・346はセットで、瓦質の七輪である。蓋上面はヘラミガキが施され、裏面は厚く煤が付着している。体部は型造りで、表面には亀甲文などが記され、二つの取手は亀を模している。口縁部は外側へ折り曲げ、上面には平坦部が形成される。口縁部内側には鍋などの支えが3か所つけられている。焚口の戸が左右に動く。内部には円形の棧がはまる。

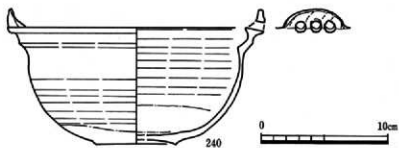
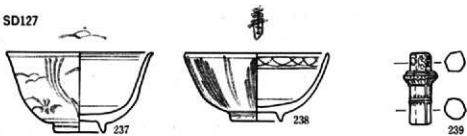
335～338はいずれも磁器で型で造られている。336は獅子舞いで、金・黄・青・赤の彩色が残る。337は手に扇をもった坊主か、338は手に馬のおもちゃを持った子供を背負う着物姿の女性。

SK378(第42図、297・298) 内面に墨書が残る土師質の皿が重なって2枚出土した。ほぼ同じ大きさで、直径8.2cm、底径4.5cm、高さ1.9cm。298には梵字のキが、中心に1字、周囲に中心を向いて8字が記されている。

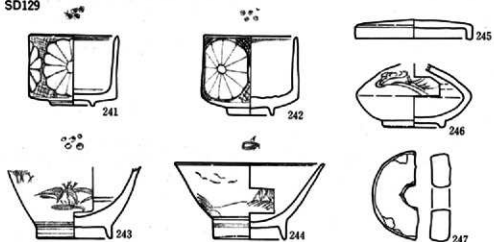
60A区表土剣ぎ(第41図、278～296) 重なる整地層の年代がわかりにくく、やや掘り過ぎてしまい、何等かの遺構を破壊してしまったために、見つかった遺物の一群がある。いずれも陶器ばかりで、碗 B・C・F、皿 B・蓋、合子、小壺、鉢などが出土した。

278・279がいわゆる広東碗で花文、捺文が施される。283はいわゆる柳茶碗で、外面に柳の絵の一部が認められる。283は白色釉を同心円状に施し、上から全面に淡黄色の釉をかけることで、縞模様を形成している。284は底裏に墨で「十」か、文字を記す。287・288はややく過る摺絵で、見込に単純な草花文がある。292は三足が付く鉢。灰釉がかり、体部下半は露胎。294は小壺。295は灰色の釉が掛かる合子。

SD127

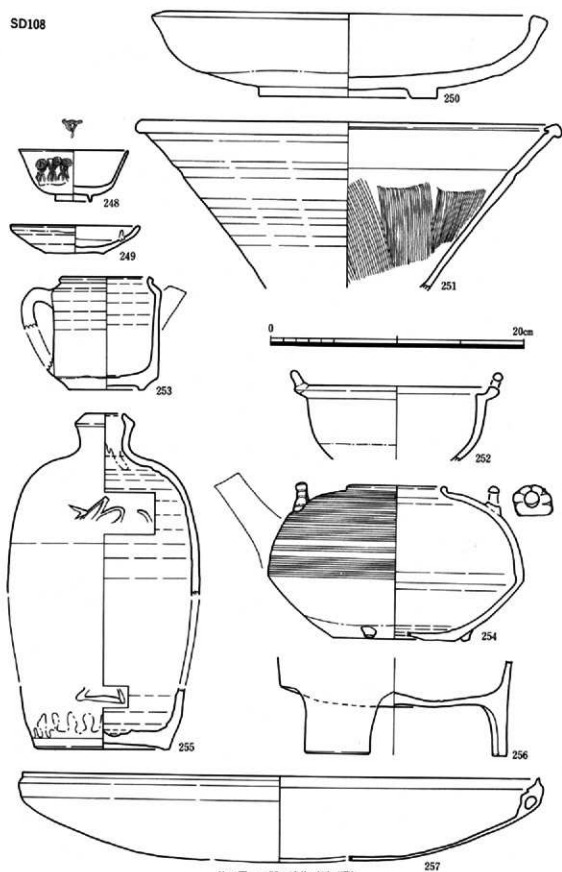


SD129



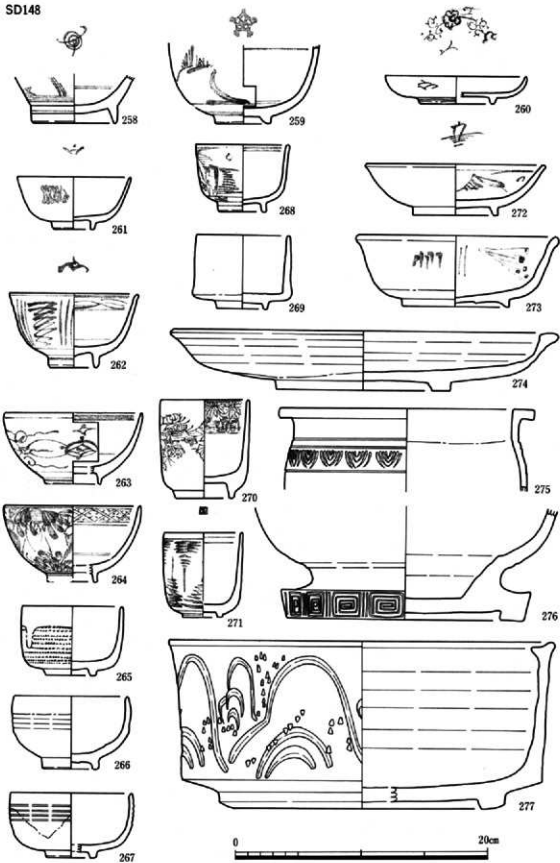
第38図 IV期の遺物（下街道側溝）

SD108



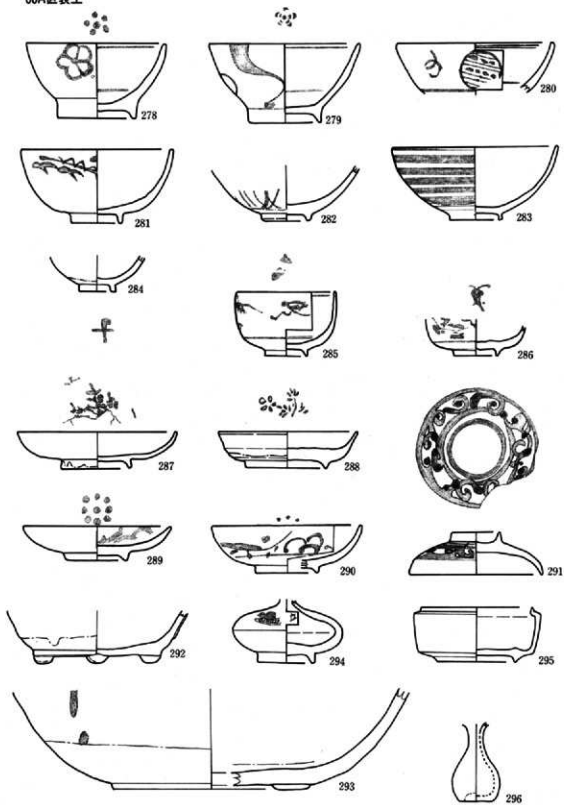
第39圖 IV期の遺物（区画溝）

SD148



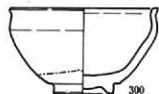
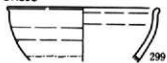
第40図 IV期の遺物(区画碑)

60A区表土

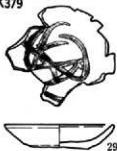


第41図 IV期の遺物(町屋)

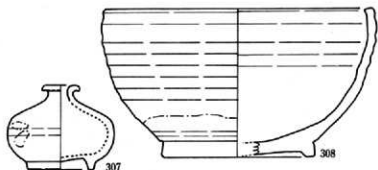
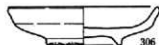
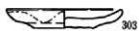
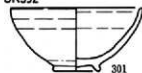
SK393



SK379

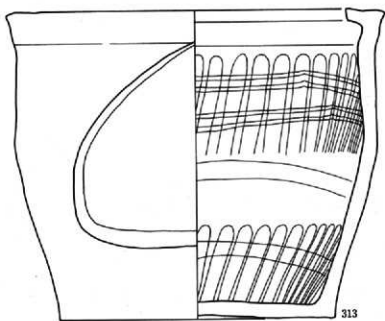
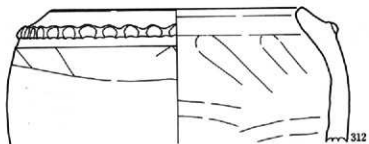
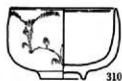


SK392

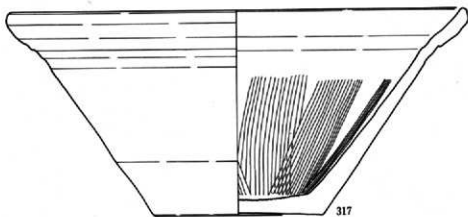
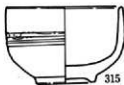


第42図 IV期の遺物（鹿角土坑等）

SK398

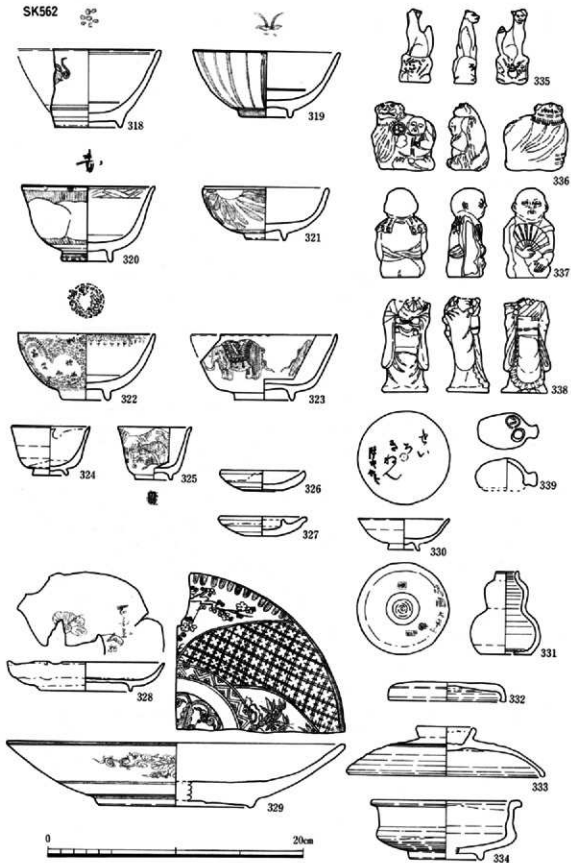


SK418

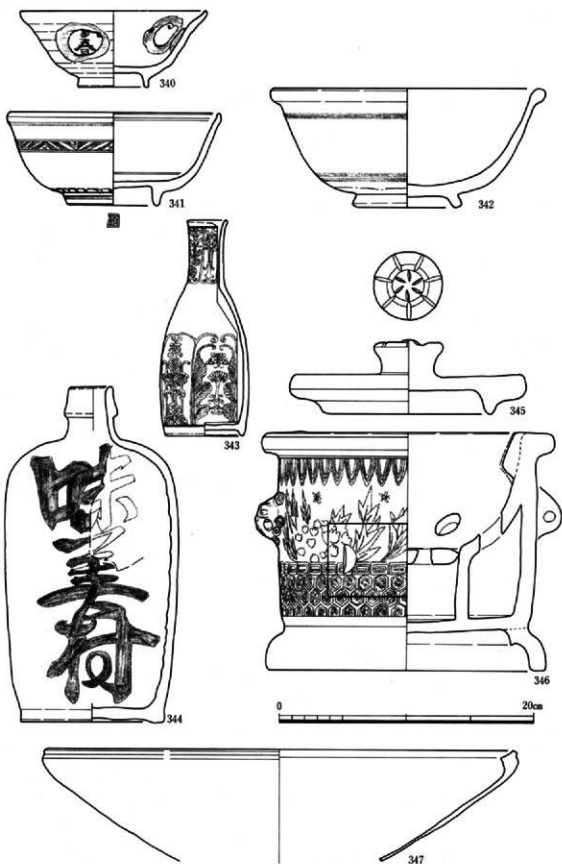


第43図 IV期の遺物（陶業土坑）

SK562



第44図 IV期の遺物（南楽土坑）



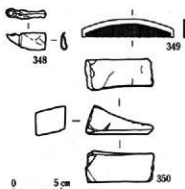
第45図 IV期の遺物（房業土坑）

(2) 金属製品・石製品

金属製品には、煙管と櫛がある。348は煙管の雁首で、太く短い首部は潰れ、火皿は欠損している。銅製。349は銅製の薄い櫛で、長さ9.8cm、幅2cm、厚さ1mm、櫛歯は257本造られている。

石製品には砥石350がある。長さ6.8cm、幅3cm、厚さ2.6cm。凝灰岩製。

(松原)



第46図 IV期の遺物(金属器、石器)

IV 自然科学的分析

1 勝川遺跡より産した昆虫群集について

1. はじめに

勝川遺跡は春日井市勝川町5丁目に所在し、弥生時代～江戸時代におたる複合遺跡である。地形的には第四紀更新世後期の低位～最低位段丘を構成する鳥居松面上に立地している。

今回、昆虫分析を実施したのは、勝川遺跡62A区(上屋敷地区)の江戸時代後期の試料である。江戸時代後期の勝川遺跡からは、多数の考古遺物とともに当時の住居跡や溝・井戸などが発見され、勝川宿として栄えていた頃の様子が発掘調査によって明らかになっている。

なお、比較試料として勝川遺跡より東南東2kmの庄内川の沖積低地に位置する松河戸63A区(江戸時代前期)からも試料を採取し、昆虫の分析を実施した。

分析試料の採取場所は、勝川遺跡では下街道に沿う幅1mの溝およびその上位に重なった土坑中、松河戸遺跡では屋敷地を区画する幅約1.5～3.0mのL字状の溝のコーナー付近の埋土である。試料採取地点の標高は、勝川遺跡では約13.4m(溝底13.0m)、松河戸遺跡では約14.0m(溝肩14m、溝底13.3m)であった。

2. 分析方法

分析試料は、両遺跡ともに発掘調査現場より昆虫を含んだ土ごと採取し、室内において主にプロッタ割り法によって昆虫を抽出した。発見された昆虫についてはクリーニングのち、1点ずつ実体顕微鏡下で現生標本と比較のうえ同定した。

分析した試料は、勝川遺跡では27リ入りコンテナ5箱分(約100kg)、松河戸遺跡では同4箱分(約85kg)である。

3. 昆虫群集

検出された昆虫は、第3表に示したとおりである。科および亜科レベルまで同定できた昆虫は勝川遺跡では2科77点・2亜科248点、松河戸遺跡では4科33点・4亜科18点であった。また、属レベルまで同定できたものは勝川遺跡では2属109点、松河戸遺跡では3属153点であり、種まで同定できたものは勝川遺跡15種306点、松河戸遺跡10種38点であった。検出された昆虫の総点数は、勝川遺跡では所属不明および未分類の甲虫目237点を含め960点、松河戸遺跡では同じく所属不明および未分類の甲虫目395点を含め921点であった。なお、第3表に示した昆虫は、個体数ではなく節片数であり、種まで同定できた昆虫については検出された部位ごとに、科(亜科)および属レベルまでしか同定できなかったものについては節片数で集計して示した。

両遺跡ともに検出された昆虫は、食業性昆虫のスジコガネ亜科(RUTELINAE)(計539

点)およびサクラコガネ属(*Anomala* spp.) (計254点)がきわめて優占する群集組成であるとみなすことができる。

勝川遺跡では、マメ科植物やブドウ・クリなどの果樹や、クス・ヤナギなどの葉を食害するヒメコガネ(*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY)が著しく多く発見され、ヒメコガネ1種だけで総点数の24.5%を占めた。スジコガネ亜科およびサクラコガネ属までしか分類できなかった節片のなかにも、ヒメコガネに同定されるべき節片も相当数含まれていることを考慮に入ると、ヒメコガネの数はさらにふえるものと考えられる。次に多く発見された昆虫は、同じく食葉性昆虫の一種のドウガネブイブイ(*Anomala cuprea* HOPE) 43点、地表性歩行虫のゴミムシ科(HARPALIDAE) 37点およびゴミムシ科の仲間のオオゴミムシ(*Lesticus magnus* (MOTSCHULSKY)) 3点であった。食葉性昆虫では、ヒラタアオコガネ(*Anomala octiescostata* BURMEISTER)、クロコガネ(*Holotrichia kitoensis* BRENSKE)、ヒロウドコガネ(*Maladera japonica* (MOTSCHULSKY))、アオウスチャコガネ(*Phyllopertha intermixta* ARROW)がそれぞれ1点ずつ見つまっている。

ほかに食糞性昆虫のエンマコガネ属(*Onthophagus* sp.) 2点、同科ポマルエンマコガネ(*Onthophagus atripennis* WATERHOUSE) 3点と、水生昆虫のコガムシ(*Hydrochara affinis* (SHARP)) 5点が発見されている。

松河戸遺跡では、スジコガネ亜科292点およびサクラコガネ属147点のほかに、ドウガネブイブイ21点、雑木林や屋敷林などの広葉樹の樹液に集まるシロテンハナムグリ(*Protaetia orientalis* (GORY et PERCHELON)) 4点やカナブン(*Rhomborrina japonica* HOPE) 2点、同じく樹液性の昆虫であるタマムシ(*Chrysochroa fulgidissima* (SCHONHERR)) 1点、コメツキムシ科(ELATERIDAE) 15点、コフキコガネ属(*Melolontha* sp.) 2点、アオハナムグリ(*Eucetonia roelefsi* (HAROLD)) 3点が発見された。

そのほかに水生昆虫のヒメゲンゴロウ亜科(COLYMBETINAE) 5点、ミズスマシ(*Gyrinus japonicus* SHARP) 2点が見つまっている。

なお、所属不明および未分類の甲虫目等とした計632点の昆虫片は、両遺跡ともにコガネムシ科の小型種やゴミムシ科等の腹部腹板、前胸・中胸・後胸の各側板、前肢・中肢・後肢片やその基節・転節、およびその他の微小節片等にあたるものが多く、現段階では同定することを見送ったが、今後より詳細な検討を加えれば分類可能なものも含まれている。

4. 古環境

ヒメコガネ・ドウガネブイブイ、スジコガネ亜科およびサクラコガネ属、その他の食葉性昆虫の多産によって、江戸時代後期の勝川遺跡の周辺にはブドウ・カキなどの果樹ないしは食葉性昆虫の生息するような樹木が多数生えていたことが考えられる。しかし、昆虫群集に江戸時代前期の松河戸遺跡のような樹液に集まる種群や森林性の食植性昆虫を多く

伴わないことから、樹木の密度はそれほど高くなく、樹種も低木や草本を中心としたものであったと推定される。

ヒメコガネやドウガネブイブイなどの比較的小型のコガネムシ科が多く発見されたことから、ハギやネムノキ・フジなどのマメ科植物やクス・ノブドウ・ヤナギなどが生えた畑地や村はずれの林縁などのような環境だった可能性が考えられる。

地表性歩行虫のコミムシ科や食糞性昆虫の産出から、人里に近い環境が推定され、水生昆虫のコガムシはおそらく人家に伴う灯火に飛来したものであろうと考えられる。

一方、江戸時代前期の松河戸遺跡では、スジコガネ亜科やサクラコガネ属、ドウガネブイブイなどの食糞性昆虫が多く発見されたものの、コフキコガネやシロテンハナムグリ・カナブンなどコガネムシ科の大型種も見いだされることから、樹木の生い茂った雑木林のような環境であったことが考えられる。これら大型のコガネムシ科は広葉樹の樹液や樹葉上に多くみられることから、木立のなかにはクスギやコナラ・カシなどがまじっていたことが推定され、ノゴリカミキリやスジコガネの発見からはマツが生えていた可能性が考えられる。

なお、今回発見された昆虫は、出土状況等から考えて両遺跡ともに、大部分が死後土中に埋もれたままほとんど移動することなく現在に至った現地性の昆虫化石（昆虫遺体）である可能性がきわめて高く、今後昆虫が検出された遺構と出現昆虫を詳細に分析・検討することによって、樹木が生えていた位置や樹種等さらに精度の高い情報が得られることも考えられ、昆虫分析の一つの方向性を示すものである。（森 勇一）

文 献

- 日浦 勇・宮武頼夫・那須孝樹（1984）、昆虫遺体群集による遺跡環境の復元に関する基礎的研究。古文化財の自然科学的研究、古文化財編集委員会編、同朋舎、411-429。
- 森 勇一（1988a）、勝川遺跡及びその周辺から産した昆虫化石と古環境。愛知県埋蔵文化財センター年報（昭和62年度）、118-137。
- 森 勇一（1988b）、昆虫化石と古環境。一愛知県勝川遺跡を中心として一、弥生文化の研究、10、雄山閣出版、202-212。
- 森 勇一（1989）、昆虫化石から得られた愛知県勝川遺跡周辺の古環境。考古学と自然科学、21、57-71。
- 森本 桂ほか（1984・1985・1986）、原色日本甲虫図鑑、I・II・III・IV、保育社
- 中根猛彦（1975）、原色日本昆虫図鑑、上・下、保育社
- 野尻湖昆虫グループ（1984）、野尻湖発掘（1978～1982）で産出した昆虫化石。地回研専報、27、137-156。
- 野尻湖昆虫グループ（1987）、第9次野尻湖発掘および第4回陸上発掘で産出した昆虫化石。地回研専報、32、117-136。
- 野尻湖昆虫グループ（1988）、昆虫化石ハンドブック。ニューサイエンス社、126p。

**Insect Remain Assemblage in the Kachigawa Site
of Aichi Prefecture, Central Japan**

Yuichi MORI

(Archaeological Research Center of Aichi Prefecture)

Insects are the most abundant of all living things in terms of numbers of kinds—at least a million species, making up several quite dissimilar groups. Therefore, we can get a lot of useful information from studying insect remains.

The author paid attention to the characteristic of indicator of insect remains, collected them at the Kachigawa and Matsukawado site. They have been classified to restore the paleoenvironment.

The Kachigawa site is located in the Kachigawa town at the southeast of Kasugai city. The Kachigawa site is the compound site ranging from the middle Yayoi period to the late Edo period, and situated on the lower terrace since late pleistocene. I analyzed the insect remains discovered in the deposits of the late Edo period at the Kachigawa site.

The Matsukawado site is located at 2 kilometers to the east-southeast of the Kachigawa site, and a sample of this site was taken for insect analysis. The insect remains of the Matsukawado site were discovered from the deposits of the early Edo period.

I succeeded in identifying a total of 980 sclerites of them at the Kachigawa site, 921 sclerites at the Matsukawado site. Many of them belong to plant-eating insects, such as RUTELINAE and *Anomala* sp. from the both sites.

Especially, abundant leave-eating insects, *Anomala rufocuprea*, *Anomala cuprea*, a lot of ground-wandering insects such as HARPALIDAE, and some dung-eating insects, *Onthophagus* sp. and *Onthophagus atripennis* were found at the Kachigawa site.

At the Matsukawado site, many leave-eating insects, *Anomala rufocuprea*, *Anomala cupera*, some forest-inhabiting insects, *Protaetia orientalis*, *Chrysochroa fulgidissima* and ELATERIDAE, and some aquatic insects, such as COLYMBETINAE and *Gyrinus japonicus* were found.

In the late Edo period, there were a lot of village-inhabiting insects such as RUTELINAE, *Anomala* sp., *Anomala rufocuprea*, and *Anomala cuprea* at the Kachigawa site. As the result, many people and their life certainly existed near there. And it is assumed that fruit trees were planted around their houses.

About the early Edo period, it is thought that people inhabited near the trees mixing the broad-leaved tree and the coniferous tree, judging from the fact that a lot of leave-eating insects were found in the plant-eaters of the Matsukawado site.

第3表 出現昆虫の種名およびその特徴

	昆虫種名	区 戸		形態的特徴・生態	生息環境
		前期	後期		
	ヒメゾンゴウ属科 COLYMBETINAE	5		ヒメゾンゴウ属・マメゾンゴウ属・モンキマメゾンゴウ属など日本にも属が生息している。体長5~10mmの中位のゾンゴウ科の仲間。	池や小川、水田などに生息、灯火にも飛来する。
生	ゴゾム <i>Hydrocha affinis</i> (SHARP)		W1 P1 T1	体長16~18mm、黒色で光沢がある。鞘翅には数本の浅い点列が見られる。成虫は水草・藻を食べるが、幼虫は肉食性である。	日本各地の池沼や水田などに普通に見られる。灯火にも飛来する。
	ミズムシ <i>Gyrinus japonica</i> SHARP	W1		体長6~8mm、鞘翅は黒色でつやがある。鞘翅には別個点列が見られる。水田に落ちた小虫を捕食する。	日本各地の池沼や水田に見られる。
	ムシゴキ属 <i>Oothypus</i> spp.	4	2	日本に記録が生息するが、発見された鞘翅や幼虫の形態的特徴から、おそらくコブマルムシゴキ科の近縁種と考えられる。	成虫は他の地性歩行虫で、大などの成虫や八咫に飛来する。
虫	コブマルムシゴキ科 <i>Oothypus atropensis</i> WATERHOUSE		W1 P1 H1	体長6~10mm、鞘翅光沢を帯びた黒色の成虫性昆虫。幼虫は卵期では中央部方に黒い斑があり、その両側の縁は平行。蛹では中央部方に1列の小さいこぶを有する。鞘翅の間隙にはわずかに黒い線が見える。	大の翼を折り、他の成虫や人間にも飛来する。日本各地に普通。
性	ゴキウコガネ科 SCARABAEINAE	2		coprinus属のいづれかの種に分類される黒色の鞘翅科が属見されている。	大型草食虫として牛馬糞に多い。
	ブイムシ科 HARPALEIDAE	3	3F	日本に約1200種が生息が知られている。今般発見されたブイムシ科は中・小型種に属する鞘翅(1F)および前胸板も特徴的である。	雑食性~肉食性の地性歩行虫である。生活ゾイや幼虫に集まり、灯火にも飛来する。
虫	オオブイムシ <i>Lucina magna</i> (MOTSCHULSKY)		P2	体長20mmをこえる大型のブイムシの一種。鞘翅・前胸板ともに黒色で光沢がある。盲行性で成虫・幼虫ともに肉食性である。	地中から山のみもとにかけての腐葉や樹の洞窟・根際などに生息する。
虫	ヤブヒメコガネ <i>Scarita ferricola pacifica</i> BATES		H1	体長19mm内外、黒色で光沢があり大あごの発達が目立つ。成虫・幼虫とも盲行性で、最初は土中や石の下にかくれていて、周囲を歩きまわってコブマルムシゴキ科の幼虫を捕食する。	平地の畑や野原などに普通に見られる。
性	ムシムシ <i>Mesitars jelskii</i> (MARSEUL)	W1		体長6~12mm、黒色でがらじょうな体つきをしている。鞘翅は上部・下部とも初期状態で閉鎖した状態を有する。	成虫は春から秋にかけてあらわれ、動物の死体や糞などに集まる。腐った動物質の糞などに生息する。ムシの幼虫は食べる。
	ハシロウ <i>Cicindela chinensis japonica</i> THUNBERG	W1		体長20mm内外、鞘翅は黒色でビロード状。周辺部と中央付近の鞘翅は金属色を示す。平地から低山地にかけて多く生息し、成虫は春から秋まで湿の上などの雑草類にみられ、他の虫を捕らえて食べる。	日本全土の比較的乾燥した地帯に生息する。
虫	コバヤシ科 ELATERIDAE	13		日本には約600種が知られる。体長は1mm程度の微小から40mmに達するものまでいるが、一般には10mm前後のものが多い。地味な色で石の下などにいるものもあり、肉食性のものもある。	成虫は地上・樹上・地上など水中を除くほとんどあらゆる場所に広く見られる。
	クマムシ <i>Chrochilus fuliginosus</i> (SCHONHERR)	W1		体長10~14mm、体全体が緑色で金属光沢があり前胸背板や鞘翅に赤色の帯状の線が見られる。	ムシムシやカタカタキ・コシなどの結虫中に産卵し、成虫もこれらの虫に多い。
	ノコギリカミキリ <i>Prionus incandens</i> MOTSCHULSKY	H1		体長22~30mm、鞘翅・前胸板ともに黒褐色で、鞘翅に不規則な点列が見える。	マフなどの針葉樹をはじめ、各種樹木に集まり、灯火にもよく飛来する。
性	シロツツノムシ <i>Protocis orientalis</i> (GOEY et PERCHELON)	W4	W1	体長20~25mm、光沢のある黒褐色から黒緑色・黒紫色など鮮やかに色変化する。成虫は6月頃現れ、鞘翅に集まる。	北海道を除く日本各地の低山地から平地にかけて分布する。
	カタツツノ <i>Ramborhinia japonica</i> HOPE	H1 T1	W1	体長22~28mm、緑色から黒緑色まで、体色により色変化する。成虫は7~8月頃マフ等類の樹液に集まる。	普通河川低山地を除く日本各地の低山地から平地に見られる。
	コバヤシ <i>Ephialtes chinensis</i> (FALDERMANN)	W1		体長10~14mm、黒褐色で、雄は頭部中央に一本の角があり、前胸背板の中央部もくぼむ。成虫は6月頃から出現、朽木や地味で発見されるが、灯火にも飛来する。昆虫の糞など好んで食べ、土中の朽木中に産卵する。	日本各地の雑木林の朽木の中によく見られる。

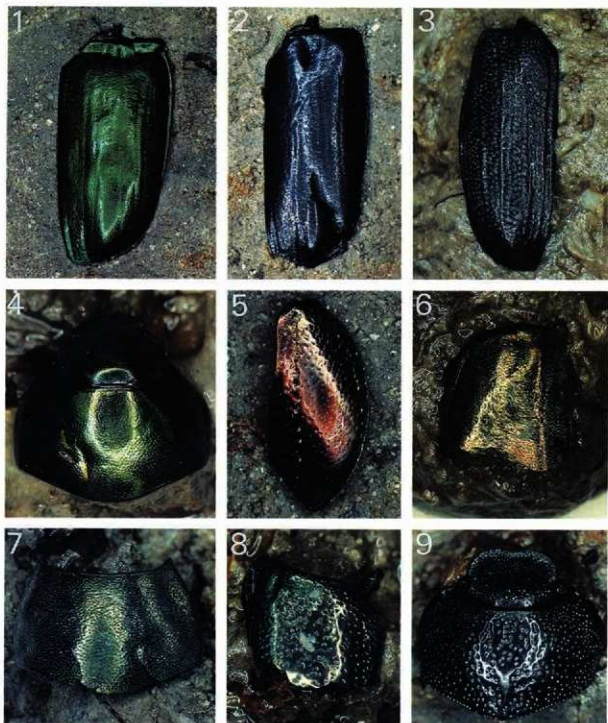
	コガネムシ科 SCARAEBIDAE	7	48	日本から約20種が知られ、産卵中からの発見も多い。主として動物の糞や死体に集まる食性とし、主に植物の糞や中化・腐敗を好む食性群に大別されるが、ここに含まれるコガネムシ科は主に食性性昆虫のみである。	
	スジコガネ科 RUTELINAE	292	147	マメ科等・ナラコガネ属・コガネムシ属などの食性性昆虫が含まれる。	
	サクラコガネ属 <i>Anomala</i> spp.	147	107	ヒメアオコガネやヒメコガネ・ドウモクシノビイなどを含む食性性昆虫である。	
食	スジコガネ <i>Mimale testaceipes</i> MOTSCHULSKY	W2		体長15~18mm、色彩変化が大きい。成虫は6月頃から出現し、主に針葉樹の葉を食す。	日本全土の樺太や蝦夷地などの針葉樹の葉を食す。
	ドウモクシノビイ <i>Anomala caprea</i> HOPE	W15 F1 H1 F2	W21 P16 A2 T1 L	体長18~20mm、緑色をしたやや光沢のある鞘翅を有し、雄は不明瞭なためである。	ブドウ・ナシなどの果樹のほか、多くの植物の葉を食する食性性昆虫である。
	サクラコガネ <i>Anomala deltoidea</i> HAROLD		W1	体長16~20mm、緑色~黄緑色を中心に体色には変化が多い。	日本全土に分布し、サクラなどのバラ科をはじめ、多くの広葉樹の葉を食す。
	ヒメコガネ <i>Anomala ruficeps</i> MOTSCHULSKY		W181 P27 S1 H3 A1	体長13~16mm、緑色・青緑色・黒色・赤褐色など色彩に変化が多い。	マメ科の植物を中心に、ブドウ・ナシなど多くの植物の葉を食す。
葉	ヒメアオコガネ <i>Anomala ochrocephala</i> BURMESTER		W1	体長10~12mm、緑色で光沢のある鞘翅を有する。鞘翅上面の縦筋は4本からなり、外面の2本は不明瞭。	本州(西経)より南部の日本各地に分布し、広葉樹の葉上に見られる。
	ツクコガネ属 <i>Meloelella</i> sp.	2		ツクコガネ・オオツクコガネをはじめ、日本にはる種生息する。生息地から考えて、上記2種のいずれかに分類される種が生息している。	本州以西の日本各地に分布し、広葉樹の葉を食す。灯火にも飛来する。
	フココガネ <i>Holotricia hōnensis</i> BRENSKE		P1	体長15~20mm、やや褐色を帯びた黒色光沢のある鞘翅を有し、前胸背板や頭部には黒大点列が散りばめられる。	日本全土、アサギなどの広葉樹を食す食性性昆虫。灯火にも飛来する。
花	ビロウツクコガネ <i>Meloelella japonica</i> (MOTSCHULSKY)		W1	体長3~9mm、黒色~暗赤褐色で全体がビロード状の細毛でおおわれる。成虫は4月頃地上に出現し、幼虫は土中で葉を食って生育する。	日本全土、各種の葉を食す。灯火にも飛来する。
	アオウスツクコガネ <i>Polyphlebia intermixta</i> ARROW		W1	体長5~11mm、前胸背板は黒では暗色で黄緑色の光沢があり、縁では黒帯が黄褐色。鞘翅は黒褐色にも暗褐色であるが、縁では黒帯を縦生し、前胸背板と同色の斑点がある。	日本各地の樹木や草花の葉上に見られる食性性昆虫。
	ハナムシ科 CETONINAE	1	1	コアハナムシ科アオハナムシ科に分類される類縁動物及び近縁科が混在した。	日本各地の樹木や草花の葉を食す。
	アオハナムシ <i>Eucetonia nuchii</i> (HAROLD)		W3	体長15~20mm、緑色でハナムシ科アオハナムシ科に似る。	日本各地、各種の花に集まる訪花性昆虫の一種。
	ハナムシ科 CHRYSOMELIDAE	8		日本に約50種生息し、樹木や草花の葉を食するものが多い。小形であるのと全体色が暗いこともあって産卵中から発見されるハナムシ科の分類は困難である。	農林地帯や人家付近の準化植物などの葉上に見られる。
食性性	ヒメアオコガネ科 <i>Chalcovra amansae</i> SILVESTRI		W1	体長1.5~4.5mm、鞘翅上面に1本の黄褐色帯があることにより分類される。	日本各地、ナラ・ナシ・リンゴなどに寄生するアソコ科イゴランを好んで寄生する。
	科属不明および未分類の甲虫目	365	237		
	総計	921	588		

(原注凡例)

W: 雌雄 P: 前胸背板 H: 頭部 T: 胸板 A: 腹部

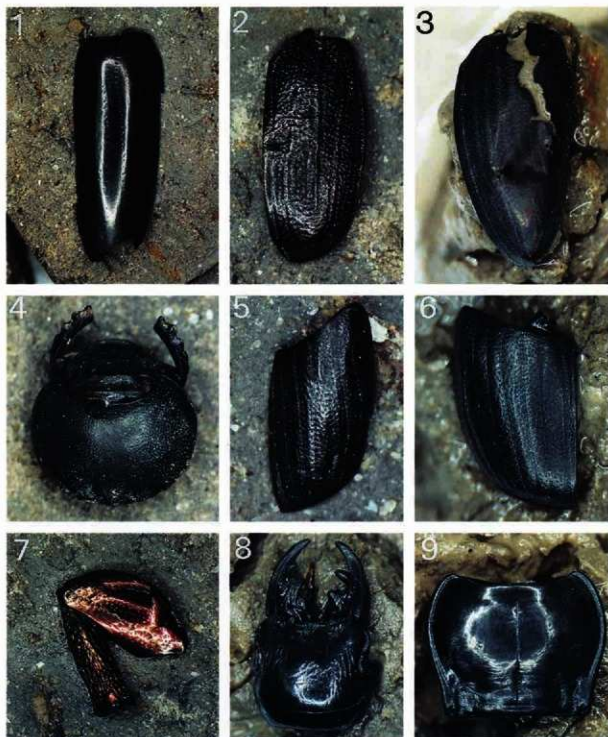
L: 雄器群 S: 小腸袋 F: 不明部分

(ただし、種名を決定できなかった昆虫については、種名をA記入した。)



第47図 出現昆虫の頭微鏡写真(1) (勝川遺跡62A区：江戸時代後期)

- | | |
|--|---|
| 1. ヒメコガネ <i>Anomala rufocuprea</i> MOTSCHULSKY
右鞘翅 (長さ9.2mm) | 6. ドウガネブイブイ <i>Anomala cuprea</i> HOPE
左鞘翅上半部 (長さ6.8mm) |
| 2. ヒメコガネ <i>Anomala rufocuprea</i> MOTSCHULSKY
右鞘翅 (長さ11.1mm) | 7. ドウガネブイブイ <i>Anomala cuprea</i> HOPE
前胸背板 (最大幅9.6mm) |
| 3. ヒメコガネ <i>Anomala rufocuprea</i> MOTSCHULSKY
左鞘翅 (長さ9.8mm) | 8. シロタンハナムグシ <i>Protactia orientalis</i> (GORY et PER-
CHELON)
左鞘翅上半部 (長さ5.4mm) |
| 4. ヒメコガネ <i>Anomala rufocuprea</i> MOTSCHULSKY
前胸背板および頭部 (最大幅5.2mm) | 9. クロコガネ <i>Holotrichia kiotsensis</i> BRENSKE
前胸背板および頭部 (最大幅8.8mm) |
| 5. ドウガネブイブイ <i>Anomala cuprea</i> HOPE
左後腿節 (長さ6.1mm) | |



第48図 出現昆虫の顕微鏡写真(2)

- | | |
|--|---|
| <p>1. コガムシ <i>Hydrochara affinis</i> (SHARP)
右鞘翅 (長さ12.5mm)</p> <p>2. アオウスチャコガネ <i>Phyllopertha internista</i> ARROW
右鞘翅 (長さ7.6mm)</p> <p>3. ビロウドコガネ <i>Maladera japonica</i> (MOTSCHULSKY)
右鞘翅 (長さ6.2mm)</p> <p>4. コブマルエンマコガネ属 <i>Onthophagus viduus</i> HAROLD
前胸背板および頭部・左右前脛節 (最大幅4.9mm)</p> <p>5. エンマコガネ属 <i>Onthophagus</i> sp.
右鞘翅 (長さ4.4mm)</p> | <p>6. エンマコガネ属 <i>Onthophagus</i> sp.
左鞘翅上半部 (長さ5.1mm)</p> <p>7. ヤクラクコガネ属 <i>Anomala</i> sp.
右後腿脛節 (長さ6.1mm)</p> <p>8. ナガヒョウタンゴミムシ <i>Scarites terricola pacificus</i>
BATES
前胸背板および頭部 (長さ8.2mm)</p> <p>9. オオゴミムシ <i>Lesticus magnus</i> (MOTSCHULSKY)
前胸背板 (最大幅6.8mm)</p> |
|--|---|

2 勝川遺跡出土瓦試料胎土分析報告

1. 分析の目的

一般に、胎土分析の対象とされるものは縄文土器や土師器などの土器類がほとんどであり、土を焼いた製品という意味では同じ性格である瓦の胎土については分析例が少ない。当社でもこれまでに愛知県下で出土する土器の胎土分析を多数行ってきたが、瓦の分析は、名古屋城三の丸遺跡関連の胎土分析における中～近世の瓦試料34点があるのみである。本分析は、この分析例の少ない瓦の胎土の状況を把握することにより、土器とは全く異なる用途の製品の製作・流通状況を考察するための基礎資料とすることを目的とする。

2. 試料

試料は、愛知県春日井市勝川遺跡より出土した奈良時代の瓦36点である。瓦の種類の内訳は、丸瓦8点、平瓦20点、軒丸瓦4点、軒平瓦4点である。各種類とも発掘調査担当者により複数種に分類されている。各試料の試料番号、種類、分類、調査区などを第4表に示す。

3. 分析方法

これまで、愛知県の胎土分析では、一貫して胎土中の砂分の重鉱物組成を胎土の特徴としてきた。本分析でも、この方法に従う。処理方法は以下の通りである。

土器片約10～15gを鉄乳鉢を用いて粉碎し、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm～1/8mmの粒子をテトラブプロモエタン（比重約2.96）により重液分離、重鉱および軽鉱物を偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを不透明鉱物とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。鉱物の同定粒数は250個を目標とし、その粒数を算出し、グラフに示す。同定粒数が100個未満の試料については粒数%を求めずに主な産出鉱物を表示するにとどめた。

4. 分析結果

鉱物の同定粒数100個以上を数えた試料は、全体の半数である18点しかなかった。これらの試料のほとんどが、変質粒である「その他」を80%以上含む同定可能な鉱物が量的にも少ない。中でも試料番号5、7、8、10、13などはほとんど「その他」からなる。また、本分析結果は次に示すように各分類毎に特徴を捉えることができる。

a. KAI（試料番号1～4）

全点とも鉱物同定粒数が100個未満であったことから、重鉱物含量の少ないことが特徴で

ある。試料番号2を除いた全点に斜方輝石、ジルコン、ゼタロ石の3鉱物が含まれていることから、後述するKBIIに類似する胎土である可能性もある。

b. KAII (試料番号5~8)

「その他」が非常に多く、90%以上を占める。特に、試料番号5および7は、「その他」で250個を数えた。

c. KBI (試料番号9~16)

KAIIと同様に「その他」が非常に多く、ほぼ90%以上を占める。このうち、試料番号13は「その他」で250個を数えた。また、試料番号15は「その他」以外の鉱物の量比が20%近くあることで、他のKBIとはやや異質である。

d. KBII (試料番号17~23)

同定鉱物粒数100個以上の試料が試料番号14と23の2点しかないことから、全体的に重鉱物を含む量が少ないことが特徴である。ただし、試料番号17と23の組成から斜方輝石、ジルコン、ゼタロ石の3鉱物を含むことが特徴になる可能性がある。

e. KBIII (試料番号24, 25)

2点とも斜方輝石と単斜輝石を多く含むことが特徴である。

f. KBIVa・IVb (試料番号26, 27)

KBIVaの試料番号26は、90%以上が「その他」であるが、それを除くとジルコンが特徴である。KBIVbの試料番号27は同定粒数100個未満であったが、ジルコンを含むことで試料番号26との類似性が考えられる。

g. KBV (試料番号28)

少量の斜方輝石、ジルコン、不透明鉱物と微量の角閃石、ゼタロ石が特徴である。

h. KCI (試料番号29, 30)

2点とも「その他」が多いことと少量の斜方輝石を含むことは共通するが、試料番号29は少量のジルコンを含み、試料番号30は微量の角閃石とゼタロ石を含むという違いがみられる。

i. KC Ia・KCII (試料番号31, 32)

分類の異なる2点であり、試料番号32は鉱物同定粒数100個未満であるが、両試料とも斜方輝石、酸化角閃石、黒雲母、ジルコンをともに含むことで胎土に類似性のあることが考えられる。

j. KDI (試料番号33)

「その他」が90%近くを占める。「その他」を除けば両輝石とゼタロ石が特徴である。

k. KDII (試料番号34)

少量のジルコンが特徴である。KBIVa・IVbに類似する。

l. KDIII (試料番号35, 36)

2点の試料とも鉱物同定粒数が100個未満であり、しかもほとんど重鉱物が含まれないことが特徴である。

以上各試料の分析結果を第4表、第49図に示す。

5. 考察

(1) 胎土と瓦の種類および分類との関係について

第49図では、各試料の組成の横に種類および分類等を示した。このうち、瓦の種類と胎土との間には相関性を認めることはできない。すなわち、各種類の瓦の胎土には、様々な組成のものが混在し、また、種類間で類似した組成の胎土も認められるからである。一方、上記結果に記載したように胎土は、分類毎に特徴を捉えられることから、分類との間には相関性があると考えられる。

(2) 中世の瓦胎土との比較

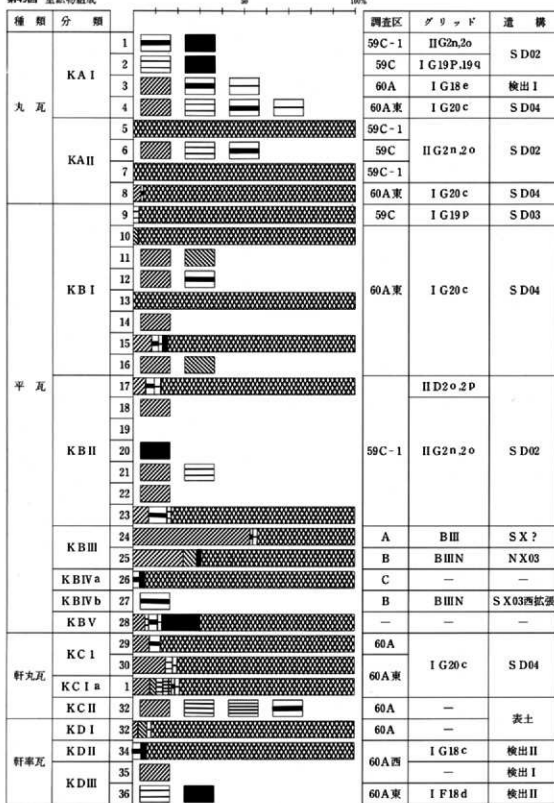
冒頭に述べたように愛知県下の遺跡から出土した瓦の胎土分析は、名古屋城三の丸遺跡関連試料の分析報告がある。ここでは、清州城下町遺跡、岐阜城千疊敷遺跡、名古屋城三の丸遺跡の3箇所の瓦胎土を分析し、それぞれの遺跡毎に胎土の特徴が捉えられた。前2者の遺跡出土の瓦は、ほとんどが尾張地域の指標となる「輝石型」の胎土からなるが、後者の遺跡は様々な組成の胎土が混在するという状況である。これに比べて本分析結果は、全く異なった結果であるといえる。このことは、尾張地域という見方では同一地域のものといえる瓦の製作あるいは供給状況に、奈良時代と中世の間には大きな違いがあったことを示唆する。その違いの内容を具体的に解明するためには、胎土分析だけではなく考古学情報も含めた総合的な検討が必要であると考ええる。

(3) 奈良時代の土器胎土との比較

愛知県下の遺跡から出土した土器の胎土分析では、本分析の対象となっている奈良時代のものが比較的少ない。主なものでは、志貴野遺跡関連試料胎土分析の奈良時代の土師器の粟や松崎遺跡関連試料胎土分析の中の8世紀の製壺土器数点がある。志貴野遺跡関連試料の分析では、尾張地域にある大瀬遺跡出土の試料が分析されており、ジルコンを多く含む胎土と両輝石を多く含む胎土とに分類されている。これらは、重鉱物が特に少ないこともなく、「その他」の量比も本分析の試料に比べれば多くはないことから、本分析試料と胎土が類似するとはいえない。しかし、本分析試料の多くが斜方輝石とジルコンを含むことは、大瀬遺跡の土師器胎土に通じるところがあり、尾張地域の胎土の地域性を感じさせる。今後は、三河地域の奈良時代の瓦の胎土分析をするなどして、瓦における胎土の地域性の検証も必要であろう。

(パリオ・サーヴェイ株式会社)

第49図 重鉱物組成



第4表 試料の重鉱物組成

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑色黒雲母	褐色黒雲母	ジルコン	ゼタロ石	緑レン石	電気石	不透明鉱物	その他	重鉱物同定粒数
1	0	1	0	1	0	0	0	5	0	0	0	7	38	52
2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	8	10
3	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	15	18
4	0	2	0	1	1	0	0	1	1	0	0	0	24	30
5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	250	250
6	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	13	16
7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	250	250
8	0	8	0	0	0	0	0	3	2	1	0	0	236	250
9	0	0	0	5	0	0	0	1	1	0	0	0	194	201
10	0	1	3	1	0	0	0	1	1	0	0	0	122	129
11	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23	25
12	0	1	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	11	17
13	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	247	250
14	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23	26
15	0	11	0	0	1	0	0	4	2	0	0	3	106	127
16	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	31	34
17	0	6	0	0	0	0	0	4	3	0	0	0	87	100
18	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	9
19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	3
21	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4	7
22	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	14
23	0	8	0	1	0	0	0	9	2	0	0	0	89	109
24	0	123	9	0	1	0	0	3	5	0	0	0	109	250
25	0	23	6	0	0	0	0	0	1	0	0	2	69	101
26	0	1	0	0	0	0	0	7	0	0	0	5	196	209
27	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	68	69
28	0	13	1	4	0	0	0	10	4	0	0	43	175	250
29	0	9	1	0	0	1	0	6	0	0	0	1	107	125
30	0	22	0	5	0	1	0	1	3	0	0	1	122	155
31	0	11	4	1	3	4	2	2	3	0	0	0	116	146
32	0	2	0	0	2	0	2	3	0	0	0	1	28	38
33	0	2	4	0	1	0	0	1	2	0	0	0	91	101
34	0	0	0	0	0	0	0	9	0	0	0	6	225	250
35	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	7
36	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	5	7

V ま と め

勝川遺跡は標高約13mの鳥居松段丘縁辺部に形成された遺跡で、主として弥生時代中期以降、現代に至るまでの複合遺跡である。今までの発掘調査によって、人々の活動が大きく四時期に区分されることが明らかになっており、ここでは土地区画整理関係による発掘調査で新たに得られた所見を列挙することとしたい。さらに南東山古墳についての見解も、示しておきたい。

(1) 新たな所見

I期（弥生時代中期）

62B区・62J区・63A区で高蔵期に比定できる、四隅が切れる方形周溝墓を多数検出した。また、62J区のSD165からは多数の当該期の土器が出土し、南東山地区のSD175からも土器が見つかったことから、I期において62J区付近が墓域であり、その南から東方に居住域があったと推定できよう。

II期（弥生時代後期～古墳時代）

この時期の方形周溝墓は、59B区・61B区・62A区・62C区などで見つかっており、また名古屋環状2号線用地内の調査でも確認されていて、墓域はI期の位置から西へ拡散したように見られる。居住域は、古墳時代初頭には南東山地区での居住が確認されたが、上屋敷地区では確認できていない。

III期（奈良時代～平安時代）

61B区・62J区・62C区で寺域を画する大溝を確認し、勝川廃寺の規模がほぼ確定できたことが最も大きな成果といえる。さらに寺域内を区画する溝も何箇所かで確認し得たが、版築を行うような建物はまったく確認できず、伽藍配置は依然として不明のままである。61A区・62A区・62B区・59C区で確認した掘立柱建物が、どんな性格の建物かは今後の検討課題として残った。なお寺の存続期間については60A区SD134などから灰釉陶器（O-53号窯式期）が見つかったことから、10世紀後半までを考える必要がある。

IV期（江戸時代以降）

下街道が2間幅で、その両側に町屋が並んでいたことが廃棄土坑や区画溝の位置から明らかになった。なおこの頃まで、依然として勝川廃寺の瓦が辺りに多量に散布しており、かまどや井戸などに再利用されることがあった。（松原）

(2) 南東山古墳について（13ページ第10図・第11図参照）

南東山古墳は勝川古墳群の一つで、別名「州原山古墳」という。昭和44年、春日井市教育委員会の調査終了後、墳丘上は畑地となり徐々に削られたため、調査当時には3m以上

あったとされる盛土も、現在はほとんど残っていない。今回は墳丘東端を調査したが、ここでの盛土（II b層）の残存状況は最厚で30cm、場所によってはまったく残っていない。

検出した遺構は、幅1.5m、深さ0.2mの浅い溝（第11図の土層図におけるII a層）のみである。これは、その規模から土取り溝と考えられる。戦後の開発にともない墳丘周辺は少なからず削られてきたが、墳丘東側ではII a層東側がほとんど壊されている。II a層西側からこの溝の方向を見ると、南東側から北西に向かい鈍角に屈曲して北北東に向かっていく（第10図）。そして7.4m進んだところで削り取られ、それより北ではII a層はまったく検出されなかった。

以上の発掘調査の所見を踏まえて、ここでは「春日井市遺跡発掘調査報告第四集」（以下「報告書」と略す）から今回の調査に関連する部分を取り上げ、検討を加えたい。

「報告書」によると墳丘東側、つまり今回の調査区周辺の埴輪採集地点が「墳丘の東側と南側で、（中略）採取された埴輪の分布からはほぼ墳丘の裾であったと推定」されるものの、「伝聞によれば東側をもっと大きく削り取ったということ」であり、ここに矛盾が見られる（疑問1）。次の問題は、本古墳についての最大の問題となる墳形である。「報告書」では直径40mの円墳と推定しているが、「[東春日井郡史]によれば、『皆前方後円式にして規模広大なり』とあって本古墳もその中に含めている」として疑問をなげかけている（疑問2）。

これらの二つの疑問点を今回の調査結果に照らし合わせてみる。疑問1については、周壕は当然削られたとしても、II a層が存在することにより墳丘にはほとんど至っていないものと考えたい。疑問2については、前述のごとく盛土がほとんど残っておらず、確証を得るには至らなかった。ただ、II a層の屈曲の仕方から単純に推定すれば、この屈曲部をくびれ部とする前方後円墳のようにも見える。もしこの推測が正しいとすると、後円部と思われる南側は大きく削られていることになり、「報告書」に記載された埴輪の採集地点が墳丘の東側及び南側とする見方に合致しない。逆に、本古墳を帆立貝式古墳とし、II a層の屈曲を造り出し部に伴うものと考えれば、最も削られた場所は北側となり、とりあえず不都合はない。この様に、これまでの調査結果を総合的に見てみると、帆立貝式古墳の可能性が高いかに見えるが、いずれにせよ墳丘の原形をまったく留めない現状において、部分的調査では自ずと限界がある。

春日井市教育委員会による調査はトレンチを入れただけのものであり、墳形を推し量るまでにいたっていない。それだけに今回の調査は重要なものであったが、盛土の削平は予想以上に進んでおり、如何ともできない状況であった。墳丘以北および東の調査区においては周壕の検出を目指したが、こちらも深く抉られており、その痕跡も確認できない有様であった。このような状況をすべて把握した上で、一応の結論として、帆立貝式古墳と考えた。これ以上削平が進む前に少しでも調査が行われるよう、行政的な配慮を期待したい。

（岡本）

附表

1. 遺構

遺構番号	調査区	旧遺構番号	備考
I期			
SZ 23	62B	SZ01	
30	62B	SZ02	
32	59C	SZ01	
33	63Aa	SZ04	
34	63Aa	SZ03	
35	63Aa	SZ02	
36	63Aa	SZ01	
39	62J	SZ05	
40	62J	SZ04	
41	62J	SZ06	
42	62J	SZ02	
43	62J	SZ03	
44	62J	SZ01	
SD165	62J	SD19	
175	90B	SD06	
II期			
SZ 16	62C	SZ01	
24	61B	SZ01	
25	61B	SZ02	
26	62A	SZ03	
27	61B、62A	SZ04	
28	62A	SZ02	
29	62A	SZ01	
37	62C	SZ02	
38	62C	SZ03	
SD163	62J	SD22	
170	90B	SD05	
SZ 31	59C	SZ02	
SB 73	90C	SB03	
74	90C	SB02	
III期			
SB 47	60C	SB01	
48	60C	SB02	
49	60B	SB01	
50	61A、62A	SB02	
51	62A	SB03	
52	62A	SB01	
56	62B	SB02	
57	62B	SB01	
58	59C	SB01	
59	59C	SB12	
60	59C	SB11	
61	59C	SB10	
62	59C	SB03	
63	59C	SB02	
64	59C	SB04	
65	59C	SB05	
66	59C	SB06	
67	62J	SB07	
69	62J	SB05	
71	62J	SB03	
72	62J	SB10	
SD 79	61B	SB11	
149	59C	SD03	
150	59C	SD04	
159	62C	SD03	
162	62C	SD02	
164	62J	SD21	
SD133	60A	SD06	
134	60A	SD04	

遺構番号	調査区	旧遺構番号	備考
IV期			
SB 53	60A	SB01	
54	60A	SB02	
SD108	61A	SD10	
SD127	62A	SD02	
129	62A	SD08	
147	59C	SD01	
148	59C	SD02	
151	59C	SD05	
SE 13	62A	SE01	
SX 24	60A	SX01	
SK339	60A	SK34	
379	62B	SK136	
392	62B	SK101	
393	62B	SK211	
398	62B	SK52	
418	62B	SK105	
562	62C	SK03	

2. 遺物

遺物番号	登録番号	遺 構	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備 考
1	62J S-1	SD163	石鏡	長 5.4	幅 1.2	厚 0.6	
2	62J S-4	SD163	石鏡	〃 4.1	〃 2.4	〃 0.7	
3	62J S-3	SD163	石鏡	〃 1.35	〃 1.45	〃 0.2	
4	62J S-2	SD164	石鏡	〃 2.1	〃 1.4	〃 0.55	
5	62J S-5	SK579	磨製石斧	〃 8.2	〃 5.4	〃 —	
6	62J S-6	SD166	砥石	〃 11.3	〃 8.5	〃 4.3	
7	62B E-4	SZ30	壺	15.8	—	—	
8	62B E-1	SZ30	壺	—	4.8	—	
9	62B E-5	SZ30	壺	24.8	—	—	
10	62B E-3	SZ30	壺	—	—	—	
11	62B E-2	SZ30	壺	—	11.5	—	
12	62J E-81	SZ39	壺	—	6.4	—	
13	62J E-80	SZ39	壺	—	7.3	—	
14	62J E-1	SD166	壺	6.8	—	—	
15	62J E-2	SD166	壺	8.5	—	—	
16	62J E-5	SD166	壺	11.6	—	—	
17	62J E-3	SD166	壺	16.7	—	—	
18	62J E-4	SD166	壺	18.1	—	—	
19	62J E-6	SD166	壺	22.0	—	—	
20	62J E-7	SD166	壺	28.4	—	—	
21	62J E-8	SD166	壺	23.9	—	—	
22	62J E-9	SD166	壺	26.9	—	—	
23	62J E-10	SD166	壺	—	—	—	
24	62J E-19	SD166	壺	—	—	—	
25	62J E-18	SD166	壺	—	—	—	
26	62J E-15	SD166	壺	—	—	—	
27	62J E-17	SD166	壺	—	—	—	
28	62J E-16	SD166	壺	—	—	—	
29	62J E-14	SD166	壺	—	—	—	
30	62J E-13	SD166	壺	—	—	—	
31	62J E-11	SD166	壺	—	—	—	
32	62J E-12	SD166	壺	—	—	—	
33	62J E-36	SD166	壺	20.8	—	—	
34	62J E-50	SD166	壺	21.0	—	—	
35	62J E-40	SD166	壺	21.8	—	—	
36	62J E-32	SD166	壺	25.6	—	—	
37	62J E-31	SD166	壺	22.4	—	—	
38	61B E-6	SZ27	壺	13.5	4.9	22.3	
39	62A E-1	SZ27	壺	—	5.0	—	
40	62A E-2	SZ27	壺	—	4.5	—	
41	61B E-4	SZ24	壺	11.6	4.9	16.1	
42	61B E-5	SZ24	壺	—	5.4	—	
43	61B E-2	SZ25	壺	13.8	6.0	26.8	
44	61B E-3	SZ25	壺	7.2	3.8	10.3	
45	61B E-1	SZ25	壺	19.0	5.4	28.4	
46	62J E-111	SD163	高杯	15.6	—	—	
47	62J E-86	SD163	壺	15.8	—	—	
48	62J E-87	SD163	壺	—	—	—	
49	62J E-115	SD163	台付壺	20.4	10.4	25.7	
50	62J E-113	SD163	壺	18.8	—	—	
51	62J E-114	SD163	台付壺	—	8.6	—	
52	90Ba S-1	表土	石鏡	長 3.2	幅 2.0	厚 0.8	
53	90Bf S-2	SD170	石鏡	〃 2.7	〃 1.6	〃 0.6	
54	90C S-3	トレンチ	石鏡	〃 2.4	〃 1.3	〃 0.4	
55	90C S-4	黒色土	石鏡	〃 2.8	〃 1.4	〃 0.7	
56	90C S-5	検出	石鏡	〃 2.4	〃 1.1	〃 0.5	
57	90C E-3	SB74	器台	—	—	—	
58	90C E-4	SB74	高杯	—	—	—	
59	90C E-6	SB73	壺	25.8	—	—	
60	90C E-7	SB73	壺	15.8	—	—	
61	90C E-5	SB73	壺	8.5	5.0	11.0	
62	90Ba E-1	SD175	壺	—	—	—	
63	90Bf E-2	SD170	壺	12.2	7.4	22.0	
64	59C E-25	検出	杯蓋A	—	—	—	
65	59C E-32	SD147	高杯	—	9.0	—	
66	62J E-135	SB68	杯	12.0	—	—	
67	63Ab E-4	SD154	皿	—	3.0	—	
68	60A E-48	表土	円筒埴輪	—	—	—	朝顔型
69	62B E-7	検出	円筒埴輪	—	—	—	
70	62B E-8	SK210	円筒埴輪	—	—	—	

遺物番号	登録番号	遺構	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
71	59C E-106	SD149	円筒埴輪	—	—	—	
72	60A E-49	表土	円筒埴輪	—	—	—	
73	59C E-110	SD148	円筒埴輪	—	—	—	
74	62B E-15	SK127	円筒埴輪	—	—	—	
75	59C E-107	SD148	円筒埴輪	—	—	—	
76	62J E-201	検出 I	円筒埴輪	—	—	—	
77	62B E-9	検出 III	円筒埴輪	—	—	—	
78	62B E-13	検出 III	円筒埴輪	—	—	—	
79	60A E-51	検出 I	円筒埴輪	—	—	—	
80	60A E-50	表土	円筒埴輪	—	—	—	
81	62B E-6	SK392	円筒埴輪	—	—	—	
82	62B E-14	検出 III	円筒埴輪	—	—	—	
83	62A E-34	SD129	円筒埴輪	—	—	—	
84	62B E-11	検出 I	円筒埴輪	—	—	—	
85	62B E-12	検出 II	円筒埴輪	—	—	—	
86	62J E-202	SD164	円筒埴輪	—	—	—	
87	62B E-10	検出 I	円筒埴輪	—	—	—	
88	59C E-108	覆乱土層	円筒埴輪	—	—	—	
89	59C E-109	レッキ層	円筒埴輪	—	—	—	
90	62C E-3	SD162	盤	20.2	—	—	
91	62C E-2	SD162	盤	19.6	11.4	3.0	
92	61B E-8	SD79	杯蓋B	18.4	—	—	
93	61B E-7	SD79	蓋	29.0	—	—	
94	62J E-109	SD164	杯蓋B	18.3	—	—	
95	62J E-96	SD164	杯蓋B	26.6	—	4.2	
96	62J E-97	SD164	杯A	—	5.4	—	
97	62J E-98	SD164	杯A	—	6.0	—	
98	62J E-99	SD164	杯A	—	—	—	
99	62J E-101	SD164	杯A	—	5.8	—	
100	62J E-102	SD164	杯A	—	—	—	
101	62J E-100	SD164	杯A	12.0	6.0	3.7	
102	62J E-107	SD164	杯A	11.8	8.0	—	
103	62J E-94	SD164	杯A	13.4	8.0	4.5	
104	62J E-93	SD164	杯A	11.4	7.7	5.0	
105	62J E-108	SD164	杯A	13.6	11.4	—	
106	62J E-106	SD164	杯A	17.8	—	—	
107	62J E-103	SD164	杯B	—	7.6	—	
108	62J E-95	SD164	杯B	16.0	11.4	4.0	
109	62J E-104	SD164	杯B	14.0	9.8	3.9	
110	62J E-110	SD164	壺	12.2	—	—	
111	60A E-41	SD134	杯蓋C	14.9	—	2.6	
112	60A E-38	SD134	杯A	13.0	8.2	2.8	
113	60A E-36	SD134	杯C	11.7	5.7	4.0	
114	60A E-34	SD134	杯C	12.7	6.0	3.6	
115	60A E-35	SD134	杯C	—	6.0	—	
116	60A E-42	SD134	杯	—	6.0	—	
117	60A E-44	SD134	皿	—	6.4	—	
118	60A E-43	SD134	皿	14.0	7.3	2.8	
119	60A E-33	SD134	壺	28.0	—	—	
120	60A E-47	SD134	浄瓶	—	8.2	—	
121	59C E-38	SD149	杯蓋B	13.8	—	4.4	
122	59C E-40	SD149	杯蓋B	15.8	—	—	
123	59C E-41	SD149	杯蓋B	20.4	—	—	
124	59C E-42	SD149	杯蓋B	21.6	—	—	
125	59C E-49	SD149	杯A	11.9	2.2	3.7	
126	59C E-44	SD149	杯D	—	8.6	—	
127	59C E-45	SD149	杯B	14.9	10.4	5.5	
128	59C E-48	SD149	杯B	19.1	13.7	6.6	
129	59C E-37	SD149	高盤	24.2	—	—	
130	59C E-36	SD149	冠	—	—	—	
131	59C E-54	SD149	瓶	6.8	—	—	
132	59C E-43	SD149	瓶	—	8.8	—	
133	59C E-55	SD149	提壺	21.9	—	—	
134	59C E-36	SD149	壺	23.9	—	—	
135	63Ab E-5	SD153	壺	30.6	—	—	
136	59C E-61	Pit13	杯A	13.4	8.0	3.8	
137	59C E-26	検出	杯A	10.6	7.0	2.9	
138	59C E-58	SB61	高杯	11.0	—	—	
139	59C E-30	検出	平瓶	—	—	—	
140	59C E-62	Pit19	杯D	—	6.9	—	

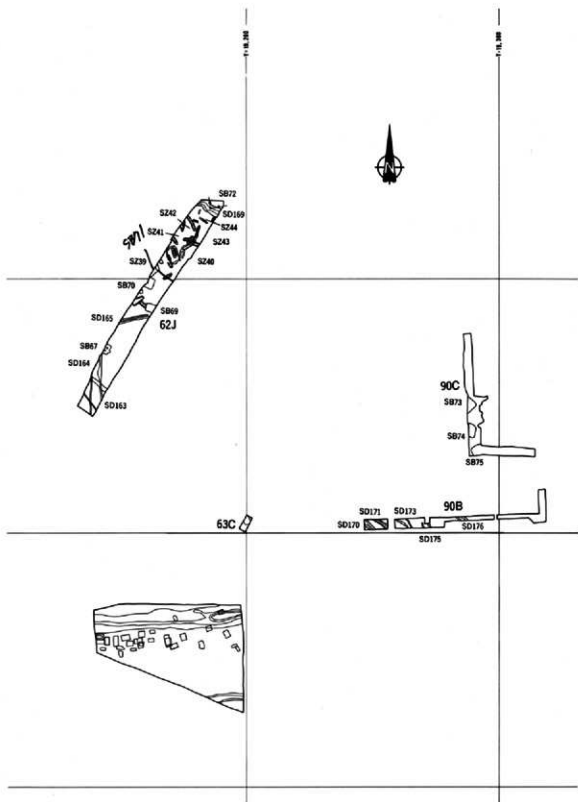
遺物番号	登録番号	遺 構	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備 考
141	59C E-59	SB59	高髷	—	—	—	
142	62J E-129	SB71	杯蓋B	20.3	—	—	
143	62J E-125	SB71	杯C	12.2	4.4	4.5	
144	62J E-126	SB71	杯B	12.8	9.3	3.45	
145	62J E-127	SB71	杯B	15.4	10.9	3.7	
146	62J E-128	SB71	杯B	—	13.6	—	
147	62J E-133	SB69	杯蓋B	—	—	—	
148	62J E-134	SB69	杯蓋B	—	—	—	
149	62J E-130	SB69	杯A	14.0	4.7	4.9	
150	62J E-131	SB69	杯B	15.1	12.4	3.4	
151	62J E-132	SB69	杯B	15.2	10.7	4.7	
152	62J E-138	SB67	皿	10.6	6.3	2.3	
153	62J E-136	SB67	瓶	6.7	—	—	
154	62J E-137	SB67	杯A	32.1	24.0	8.0	
155	62J E-152	SD169	杯蓋B	—	—	—	
156	62J E-151	SD169	杯蓋B	14.3	—	—	
157	62J E-150	SD169	杯蓋B	16.9	—	—	
158	62J E-149	SD169	杯蓋B	19.0	—	—	
159	62J E-144	SD169	杯A	—	6.3	—	
160	62J E-142	SD169	杯A	12.0	5.4	4.2	
161	62J E-140	SD169	杯B	13.8	11.8	3.5	
162	62J E-147	SD169	杯B	—	9.8	—	
163	62J E-141	SD169	杯B	15.2	11.4	3.8	
164	62J E-146	SD169	杯B	—	12.3	—	
165	62J E-148	SD169	杯B	15.0	12.1	3.9	
166	62J E-143	SD169	杯A	14.0	9.1	7.4	
167	62J E-154	SD169	高杯	—	10.8	—	
168	62J E-153	SD169	高杯	—	11.3	—	
169	62J E-139	SD169	土師器蓋	—	7.4	—	
170	62J E-180	SD169	杯蓋A	11.0	—	—	
171	62J E-181	SD169	杯蓋A	17.5	—	—	
172	62J E-185	SD169	杯蓋B	18.0	—	—	
173	62J E-167	SD169	杯蓋B	16.6	—	2.9	
174	62J E-169	SD169	杯蓋B	14.9	—	3.2	
175	62J E-184	SD169	杯蓋B	17.0	—	—	
176	62J E-183	SD169	杯蓋B	15.3	—	—	
177	62J E-168	SD169	杯蓋B	16.8	—	—	
178	62J E-157	SD169	杯C	11.6	2.0	3.7	
179	62J E-159	SD169	杯C	15.4	5.8	3.2	
180	62J E-158	SD169	杯A	12.6	5.9	4.0	
181	62J E-160	SD169	杯A	16.4	11.4	6.3	
182	62J E-176	SD169	杯B	10.8	6.8	3.5	
183	62J E-161	SD169	杯B	13.2	10.6	3.9	
184	62J E-163	SD169	杯B	14.2	11.2	3.7	
185	62J E-162	SD169	杯B	15.0	10.6	3.7	
186	62J E-177	SD169	杯B	14.0	10.8	3.6	
187	62J E-164	SD169	杯B	14.2	11.6	3.8	
188	62J E-179	SD169	杯B	15.8	13.1	3.8	
189	62J E-178	SD169	杯B	15.8	11.6	3.1	
190	62J E-165	SD169	杯B	16.2	11.4	3.5	
191	62J E-166	SD169	杯B	19.6	14.6	5.3	
192	62J E-170	SD169	鉢	10.4	5.8	7.8	
193	62J E-171	SD169	鉢	14.6	10.3	12.4	
194	62J E-186	SD169	瓶	7.4	—	—	
195	62J E-187	SD169	瓶	—	9.6	—	
196	62J E-188	SD169	壺	12.9	—	—	
197	62J E-190	SD169	壺	20.2	—	—	
198	62J E-191	SD169	壺	18.1	—	—	
199	62J E-192	SD169	壺	20.9	—	—	
200	62J E-193	SD169	鉢	26.7	—	—	
201	59C E-104	検出	丸瓦KA II	—	—	—	
202	63Aa E-13	SK509	丸瓦KA I	—	—	—	
203	63Aa E-12	SK518	丸瓦KA I	—	—	—	
204	62B E-30	SK392	平瓦KB III	—	—	—	
205	63Aa E-9	SK518	平瓦KB I	—	—	—	
206	63Aa E-8	SK506	平瓦KB III	—	—	—	
207	62B E-16	表土ハギ	軒丸瓦KC I	—	—	—	
208	62B E-17	SK392	軒丸瓦KC I	—	—	—	
209	62A E-9	SE13	軒丸瓦KC I	—	—	—	
210	59C E-96	レキ層	軒丸瓦KC I	—	—	—	

遺物番号	登録番号	遺構	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
211	62B E-18	SK390	軒丸瓦KC I	—	—	—	
212	62B E-21	表土	軒丸瓦KC I	—	—	—	
213	62B E-20	SK398	軒丸瓦KC I	—	—	—	
214	59C E-113	SD149	軒丸瓦KCII	—	—	—	6233Ac
215	60A E-62	検出 I	軒丸瓦KCII	—	—	—	6233Ac
216	59C E-112	SD149	軒丸瓦KCII	—	—	—	6233Ac
217	59C E-67	SD149	軒丸瓦KCII	—	—	—	6233Ac
218	59C E-97	SD148	軒丸瓦KCII	—	—	—	6233Ac
219	59C E-65	SD149	軒丸瓦KCII	—	—	—	6233Ac
220	62B E-25	SK398	軒平瓦KD I	—	—	—	三重弧文
221	62A E-12	SE13	軒平瓦KD I	—	—	—	三重弧文
222	62A E-13	SE13	軒平瓦KD I	—	—	—	三重弧文
223	62A E-11	SE13	軒平瓦KD I	—	—	—	三重弧文
224	62A E-10	SE13	軒平瓦KD I	—	—	—	三重弧文
225	60A E-73	SD134	軒平瓦KDII	—	—	—	四重弧文
226	60A E-74	SD134	軒平瓦KDII	—	—	—	四重弧文
227	62J E-211	SD169	軒平瓦KDIII	—	—	—	均整唐草文
228	62J E-210	SK568	軒平瓦KDIII	—	—	—	備行唐草文
229	59C E-69	SD149	軒平瓦KDIII	—	—	—	備行唐草文
230	63Aa E-7		軒平瓦KDIII	—	—	—	備行唐草文
231	60A E-77	表土	軒平瓦KDIII	—	—	—	備行唐草文
232	59C E-68	SD149	軒平瓦KDIII	—	—	—	備行唐草文
233	60A E-80	SD134	文字瓦	—	—	—	「石」
234	59C E-101	SD148	文字瓦	—	—	—	「二十一」
235	60A E-79	SK339	?	—	—	—	
236	59C E-71	SD149	瓦塔	—	—	—	
237	62A E-23	SD127	碗II D	11.6	4.2	6.3	
238	62A E-28	SD127	碗II B	16.3	4.0	5.4	
239	62A E-31	SD127	いニチュア	1.6	1.6	5.7	灯籠
240	62A E-29	SD123	鍋	20.2	6.4	9.1	
241	62A E-129	SD129	碗II G	7.0	3.4	5.5	
242	62A E-19	SD129	碗II G	7.4	3.8	6.2	
243	62A E-21	SD129	碗II C	—	5.9	—	
244	62A E-22	SD129	碗II C	11.8	5.8	5.95	
245	62A E-25	SD129	合子	9.2	—	1.5	
246	62A E-24	SD129	小壺	—	4.6	—	
247	62A E-30	SD129	戸車	6.9	—	1.6	
248	61Ab E-18	SD108	碗II E	8.7	2.9	4.0	
249	61Ab E-19	SD108	灯明皿	10.2	4.7	2.2	
250	61Ab E-22	SD108	鉢I A	31.3	13.7	6.6	
251	61Ab E-20	SD108	鑿鉢	33.0	—	—	
252	61Ab E-15	SD108	鍋	16.2	—	—	
253	61Ab E-14	SD108	甌	7.0	6.0	8.9	
254	61Ab E-16	SD108	土瓶	7.0	9.5	12.1	
255	61Ab E-17	SD108	德利	3.0	—	—	
256	61Ab E-24	SD108	七輪	—	—	—	
257	61Ab E-23	SD108	物椀	41.0	—	—	
258	59C E-75	SD148	碗I C	—	6.5	—	
259	59C E-73	SD148	碗II B	—	4.4	—	
260	59C E-86	SD148	皿II B	11.0	5.6	2.2	
261	59C E-80	SD148	碗II E	9.0	3.1	4.1	
262	59C E-2	SD148	碗II D	10.2	3.6	5.8	
263	59C E-78	SD148	碗II B	11.0	4.4	5.6	
264	59C E-79	SD148	碗II B	10.8	3.8	6.0	
265	59C E-9	SD148	碗I F	8.0	4.0	5.4	継茶碗
266	59C E-11	SD148	碗I F	9.0	4.2	5.8	
267	59C E-10	SD148	碗II G	9.6	3.8	5.0	
268	59C E-5	SD148	碗II G	7.4	3.6	5.2	
269	59C E-7	SD148	碗II G	7.4	5.8	4.0	
270	59C E-4	SD148	碗II G	7.0	4.6	7.8	
271	59C E-6	SD148	碗II G	6.2	3.2	6.6	
272	59C E-13	SD148	皿II C	14.2	6.6	4.0	
273	59C E-12	SD148	鉢I B	15.8	5.5	8.4	
274	59C E-20	SD148	鉢I A	30.0	13.6	5.6	
275	59C E-21	SD148	壺	20.0	—	—	
276	59C E-22	SD148	壺	—	18.6	—	
277	59C E-23	SD148	水甕	30.6	21.0	13.0	
278	60A E-2	表土	碗I C	11.0	6.2	6.0	
279	60A E-3	表土	碗I C	11.8	5.6	6.3	
280	60A E-4	表土	碗I B	12.2	—	—	

遺物番号	登録番号	遺 構	器 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備 考
281	60A E-5	表土	碗 I B	12.0	4.0	5.9	
282	60A E-11	表土	碗 I B	—	3.6	—	
283	60A E-7	表土	碗 I B	13.0	4.1	5.8	
284	60A E-10	表土	碗 I B	—	2.8	—	
285	60A E-12	表土	碗 I G	7.8	3.4	5.1	
286	60A E-13	表土	碗 I G	—	3.5	—	
287	60A E-16	表土	皿 I B	12.5	5.4	5.0	
288	60A E-15	検出 II	皿 I B	10.9	6.3	7.9	
289	60A E-18	表土	皿 I B	11.6	4.8	2.7	
290	60A E-17	表土	皿 I B	11.7	4.8	3.8	
291	60A E-24	表土	蓋	3.6	10.2	3.4	
292	60A E-27	表土	鉢	—	10.0	—	
293	60A E-28	表土	鉢	—	15.2	—	
294	60A E-31	表土	小壺	—	4.2	—	
295	60A E-14	表土	合子	8.6	6.1	4.3	
296	60A E-32	表土	小瓶	—	2.6	—	
297	62B E-59	SK379	土師質皿	8.4	4.7	1.9	
298	62B E-58	SK379	土師質皿	8.2	4.5	1.9	
299	62B E-36	SK393	碗 I A	12.0	—	—	
300	62B E-35	SK393	碗 I A	11.6	4.6	6.8	
301	62B E-46	SK392	碗 I B	10.4	3.8	5.0	
302	62B E-48	SK392	碗 I F	10.6	9.6	6.0	
303	62B E-49	SK392	皿 I A	9.2	4.8	1.5	
304	62B E-50	SK392	皿 I B	11.4	2.8	4.8	
305	62B E-52	SK392	皿 I E	12.8	6.6	2.9	
306	62B E-51	SK392	皿 I D	11.2	5.8	3.0	
307	62B E-53	SK392	小壺	2.0	5.2	6.7	
308	62B E-54	SK392	鉢 I C	21.4	12.0	11.8	
309	62B E-56	SK392	大いぶし	19.0	28.7	17.5	常滑、アカモノ
310	62B E-37	SK398	碗 I F	8.6	3.6	5.6	
311	62B E-38	SK398	碗 I F	12.0	—	—	
312	62B E-39	SK398	壺	20.0	—	—	常滑
313	62B E-40	SK398	ケド	30.0	22.0	23.8	常滑
314	62B E-43	SK418	碗 I F	9.2	4.4	6.1	
315	62B E-42	SK418	碗 I F	8.5	4.4	6.0	
316	62B E-41	SK418	碗 I F	9.0	4.3	5.4	
317	62B E-45	SK418	楕鉢	35.8	13.2	16.1	
318	62C E-7	SK562	碗	11.4	5.2	6.2	
319	62C E-9	SK562	碗	11.6	4.2	5.2	
320	62C E-10	SK562	碗	10.3	3.8	5.9	
321	62C E-8	SK562	碗	10.0	3.2	4.1	
322	62C E-13	SK562	碗	10.55	3.5	5.25	
323	62C E-17	SK562	碗	11.6	4.7	5.2	
324	62C E-6	SK562	小杯	6.2	2.8	3.9	
325	62C E-5	SK562	小杯	5.8	3.0	4.2	
326	62C E-19	SK562	灯明台	6.6	2.9	1.6	
327	62C E-22	SK562	灯明台	6.6	2.7	1.55	
328	62C E-25	SK562	皿	12.4	7.2	2.3	
329	62C E-32	SK562	大皿	26.4	12.0	5.1	
330	62C E-23	SK562	猪口	7.2	2.3	2.4	
331	62C E-40	SK562	小壺	1.65	4.15	6.5	
332	62C E-26	SK562	合子蓋	9.3	—	1.55	
333	62C E-28	SK562	蓋	15.6	4.6	3.9	
334	62C E-27	SK562	香炉	11.6	5.6	4.6	
335	62C E-44	SK562	ミニチュア	—	2.2	—	
336	62C E-42	SK562	ミニチュア	—	—	5.3	狐 獅子舞
337	62C E-41	SK562	ミニチュア	—	3.0	7.0	僧 母子
338	62C E-43	SK562	ミニチュア	—	3.5	—	
339	62C E-45	SK562	水注	—	4.8	—	
340	62C E-29	SK562	鉢	14.8	5.6	6.0	
341	62C E-30	SK562	鉢	17.0	7.4	7.3	
342	62C E-33	SK562	鉢	21.2	8.0	9.3	
343	62C E-34	SK562	瓶	3.2	6.0	17.0	
344	62C E-36	SK562	徳利	3.2	26.6	11.1	
345	62C E-47	SK562	蓋	—	—	—	
346	62C E-48	SK562	七輪	23.8	22.0	18.9	
347	62C E-46	SK562	土鍋	36.8	—	—	
348	61A M-1	検出 I	煙管	—	—	—	
349	61A M-2	SK160	磚	(長) 9.8	(幅) 2.0	(厚) 0.1	
350	61A S-2	検出 I	磁石	(長) 6.8	(幅) 3.0	(厚) 2.6	

圖 版

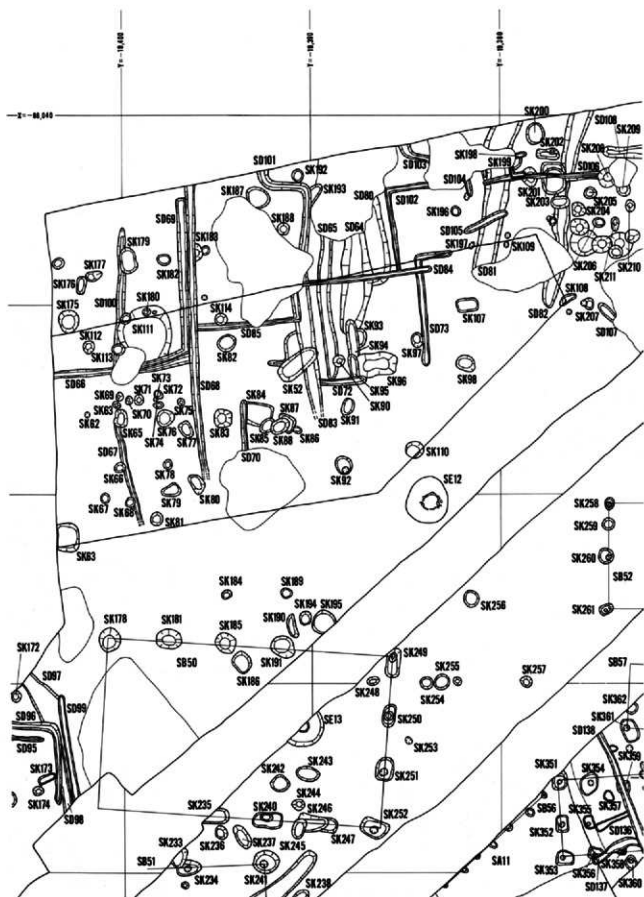
図版 2 遺構全体図(2) S = 1/1,500



図版3 遺構図(1)



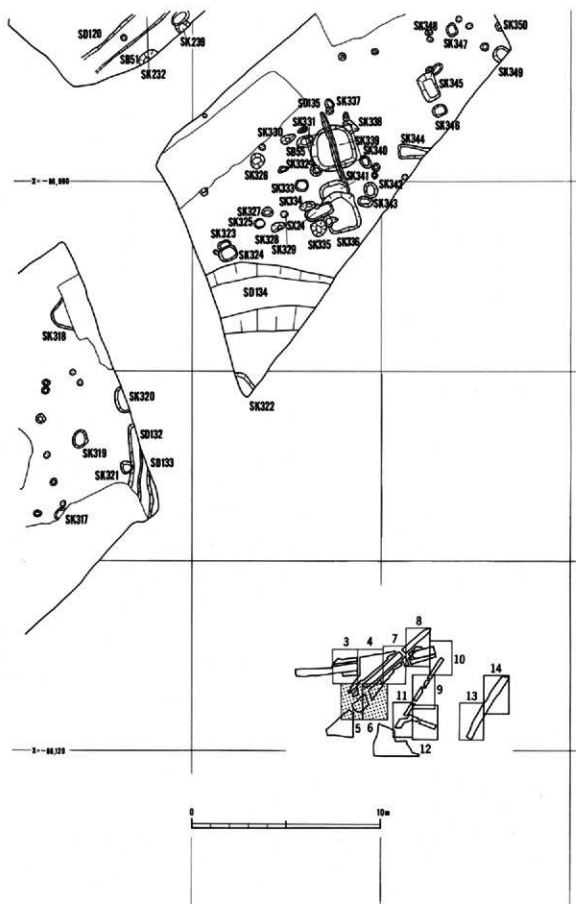
図版 4 遺構図(2)



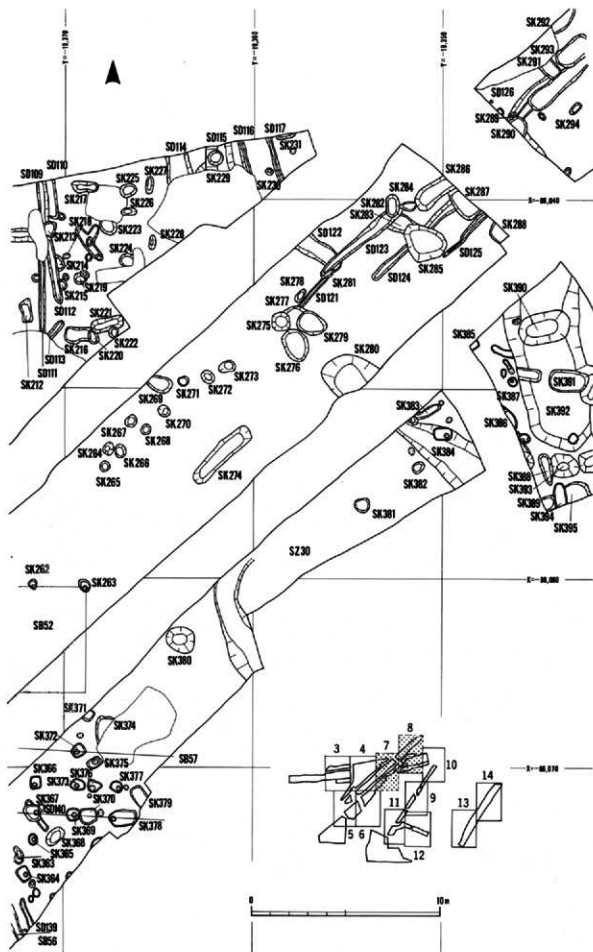
図版 5 遺構図(3)



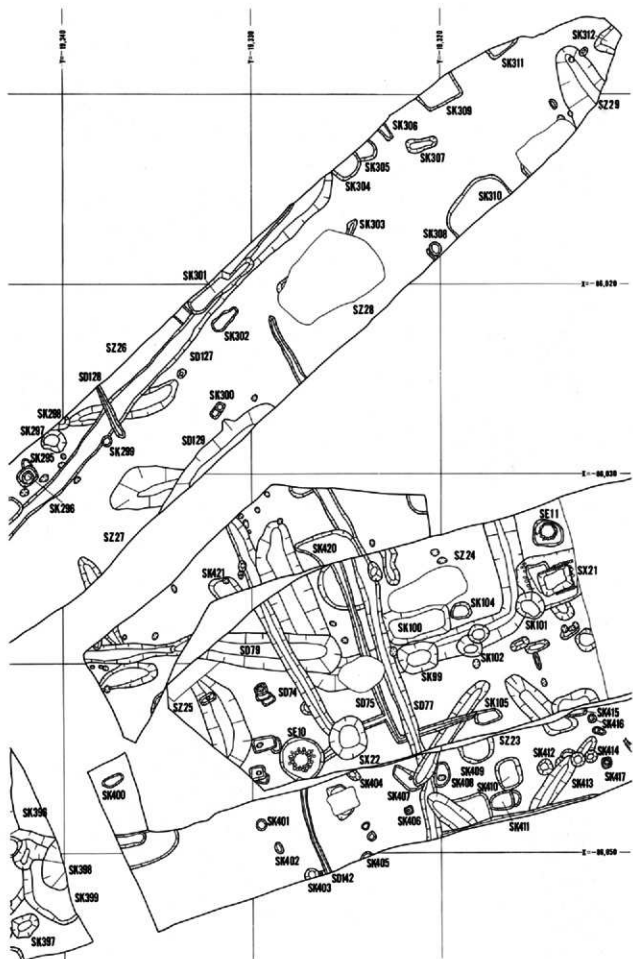
図版 6 遺構(4)



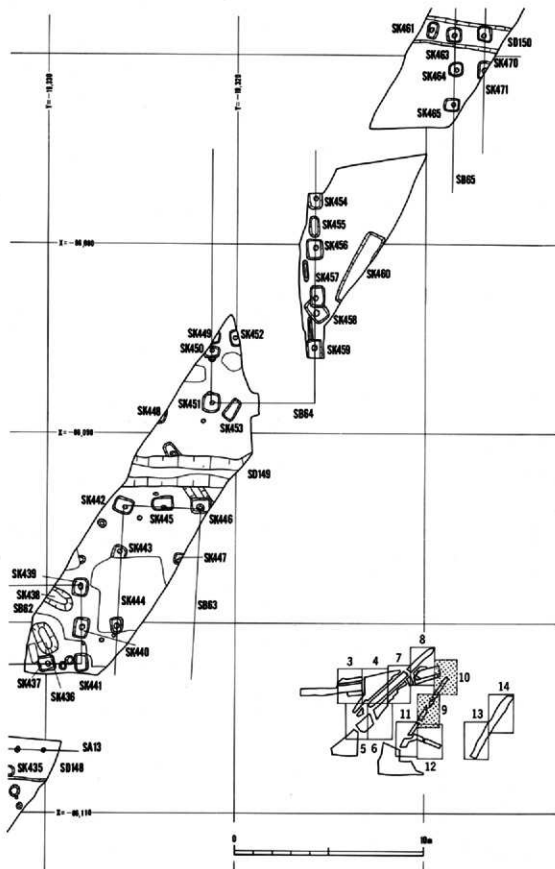
図版7 遺構図(5)



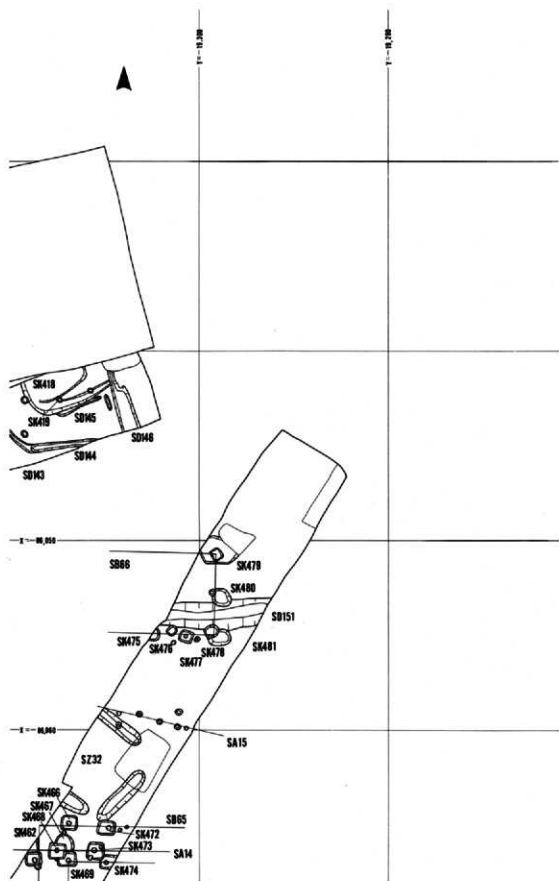
図版 8 遺構図(6)



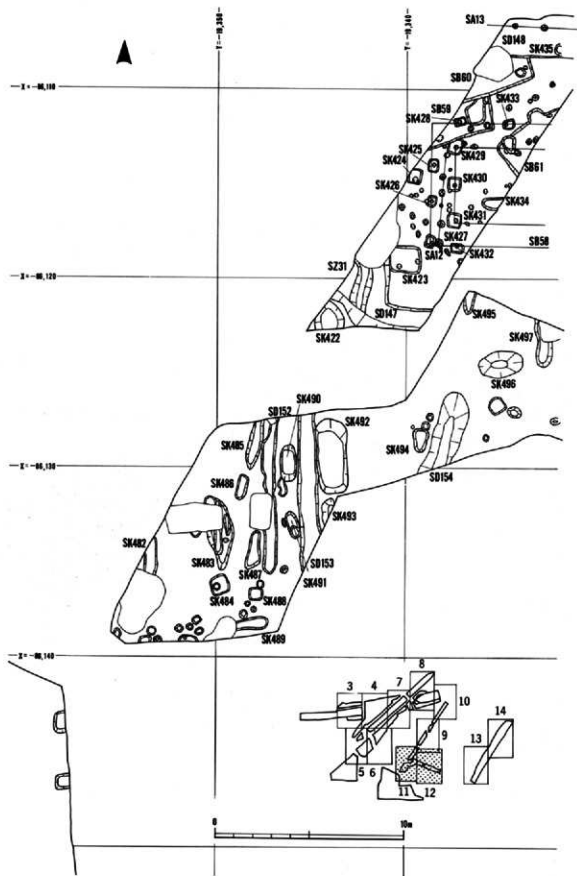
図版 9 遺構図(7)



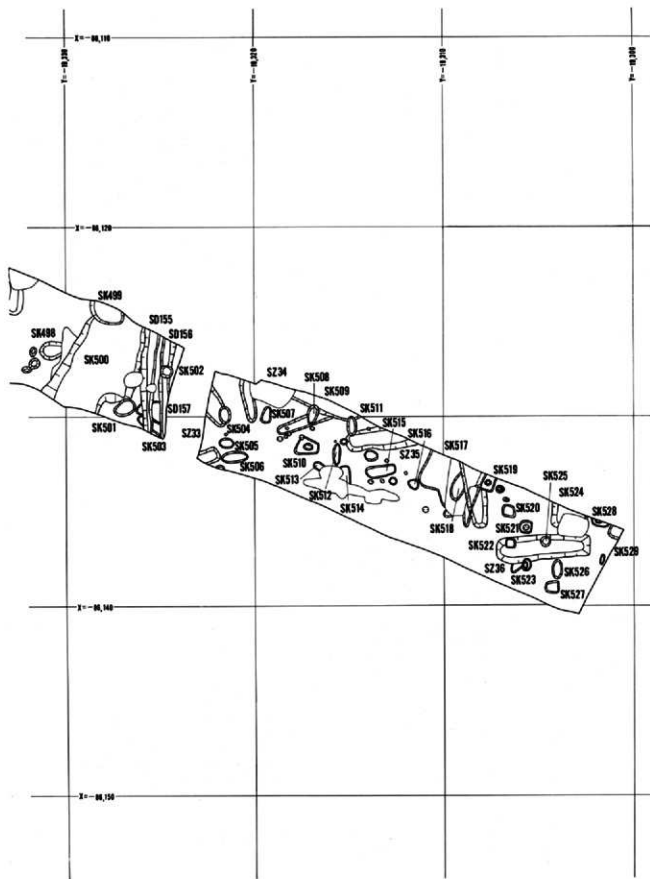
图版10 遗物图(8)



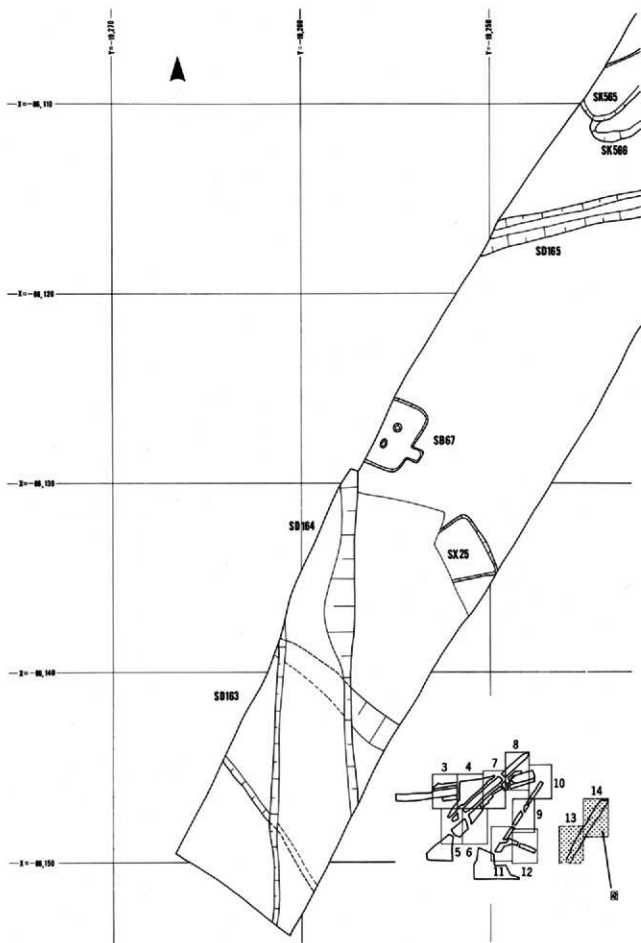
図版11 遺構図(9)



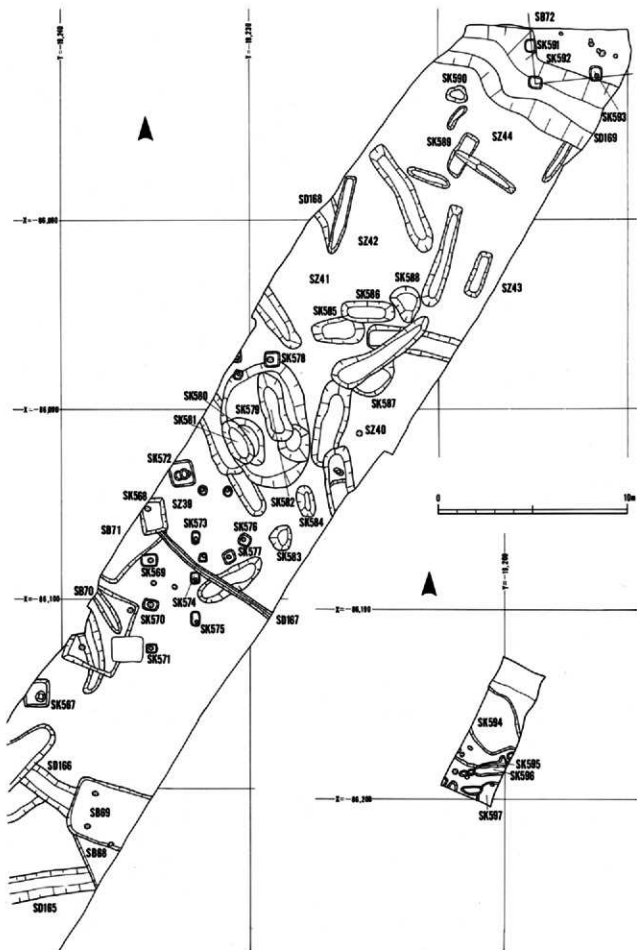
圖版12 遺構図(10)



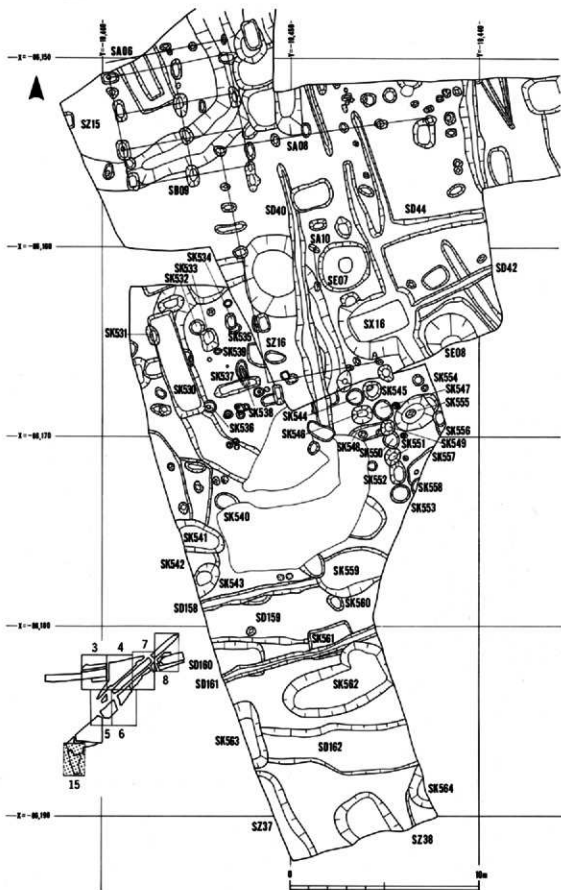
圖版13 遺構800



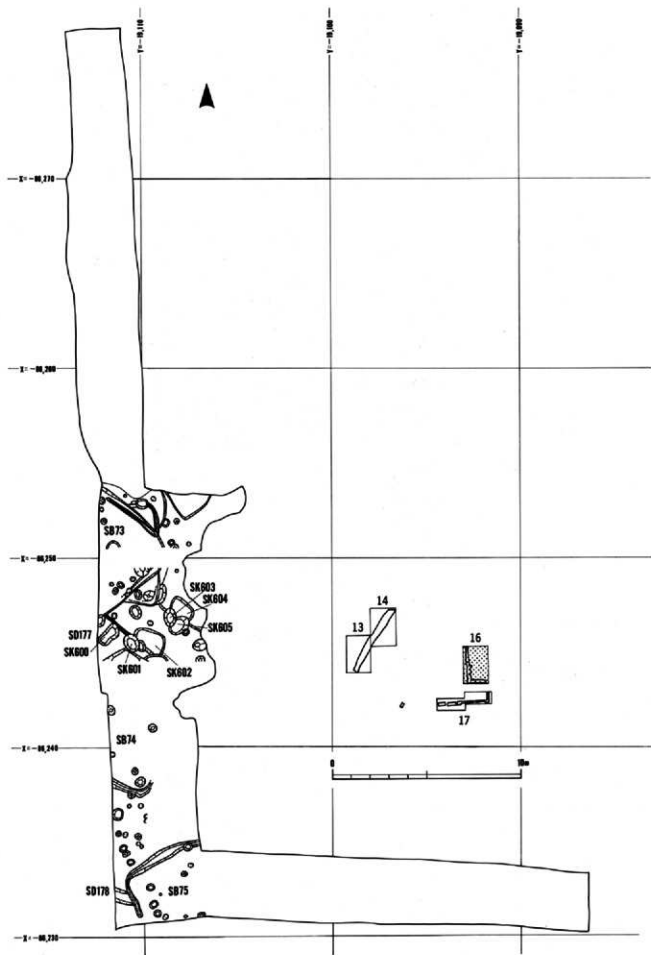
図版14 遺構図①②



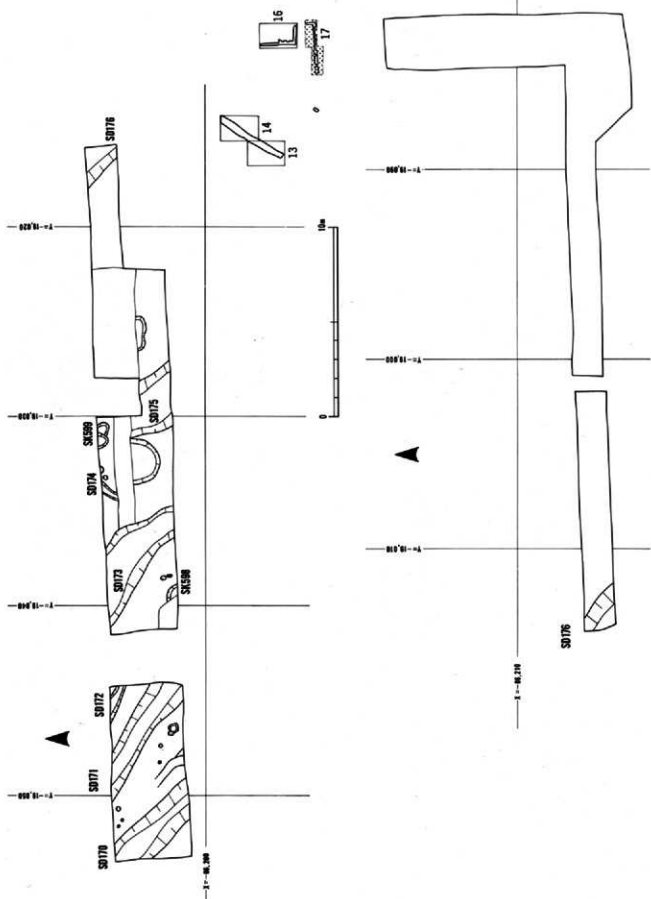
図版15 遺構図(3)



図版16 遺構図04



图版17 遗物图09



図版18 59C区全景（上が北西，昭和59年9月14日撮影）



図版19 61A・B区全景（上が北北西，昭和61年9月25日撮影）





竪穴住居SB59~61
(南西から)



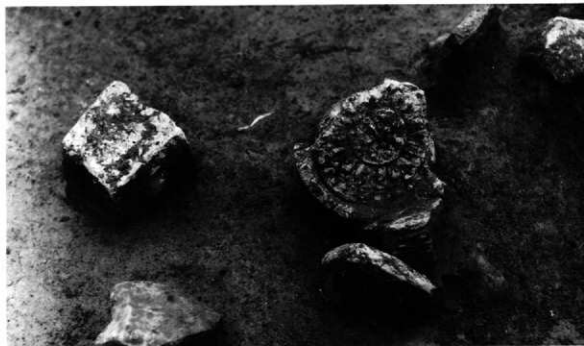
掘立柱建物SB62
(南から)



SB65 (北から)



SD149 (北から)



遺物出土状態 (SD149)

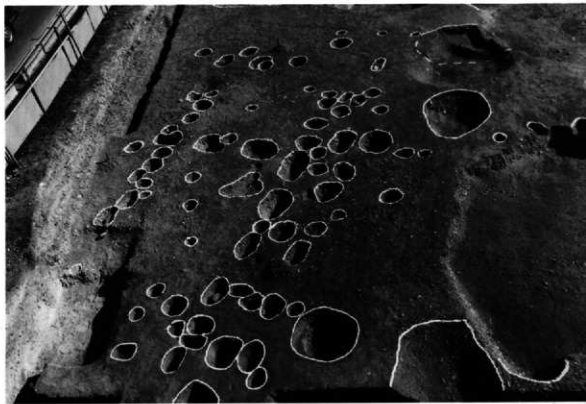


遺物出土状態
(SK441, 南から)

SD134 (南から)



SB53・54 (西から)



61A区 (北東から)



図版23

61A区, 61B区
遺物出土状態

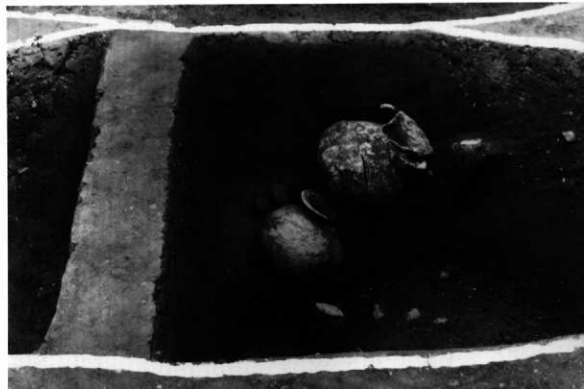
SD108 (北から)



SZ24・27周溝内
遺物出土状態 (北から)



SZ25周溝内
遺物出土状態 (南から)





62A区全景 (南西から)



SZ26・27周溝 (東から)



SB50 (南から)



SD127 (南西から)



SE13断ち割り (南東から)



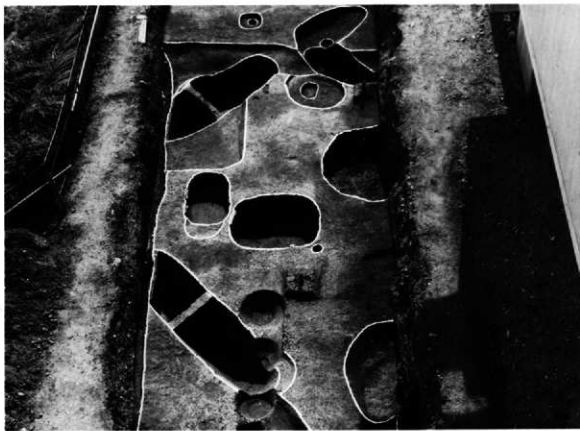
SE13遺物出土状態
(南東から)

図版26

62B区の遺構



SZ30周溝 (南西から)



SZ23 (北東から)



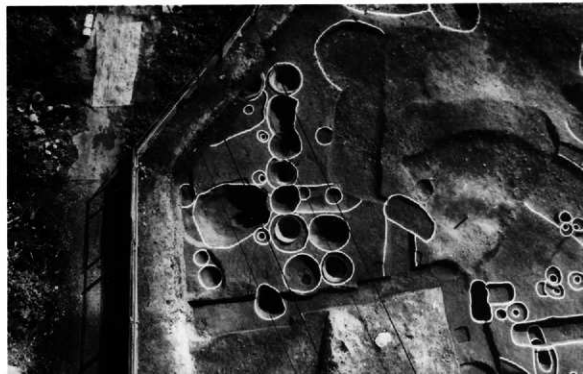
SB56・57 (南から)



SZ16周溝 (北から)



SD159・162 (北から)



IV期土坑群 (北、上方から)

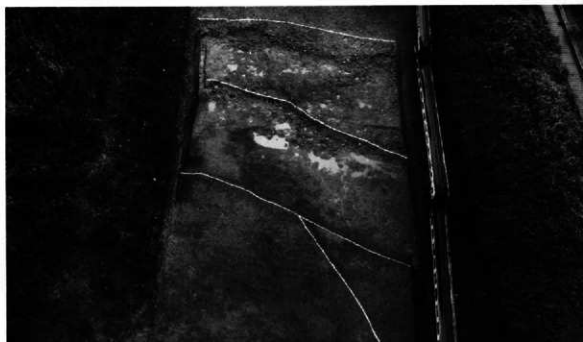
SD164 (III期、南西から)



SD163 (II期、南西から)

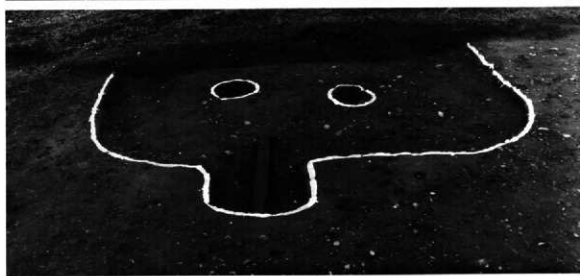


完掘状態 (南西から)





SB69 (北から)



SB67 (東から)



SB67かまど (西から)



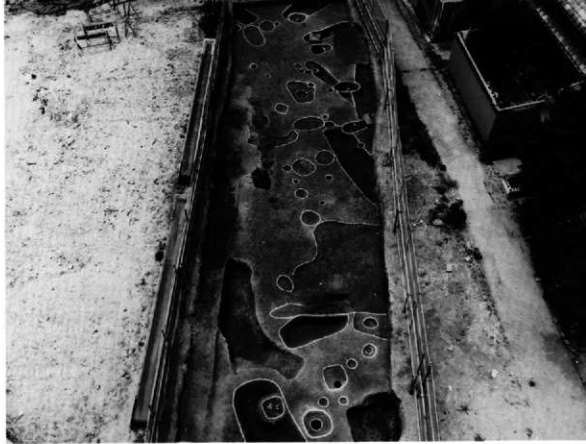
62J区北半 (北東から)



SZ42~44 (北から)



SB72・SD169 (北西から)



63A区全景 (南東から)



63Ab区全景 (西から)



SD154遺物出土状態
(南から)

右 90B区全景
(東から)



左 SD170
(西から)



SD170遺物出土状態

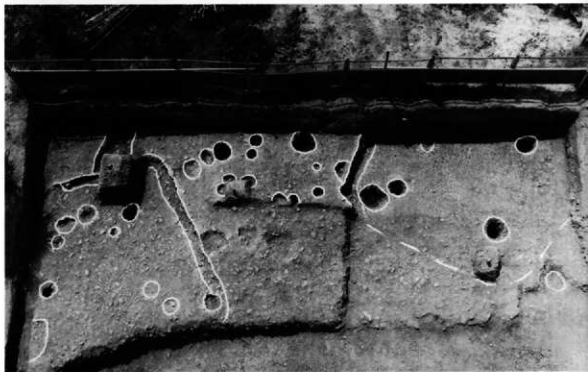


図版33

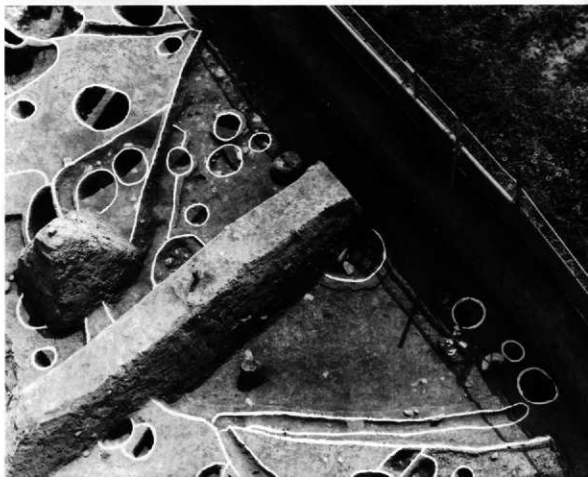
90C区の遺構



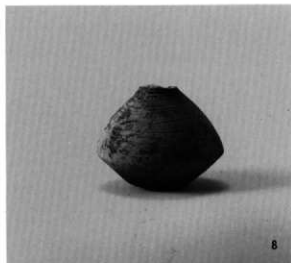
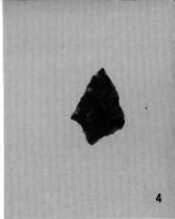
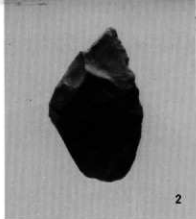
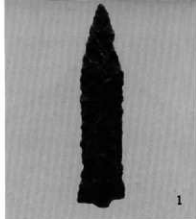
90C区全景 (東から)

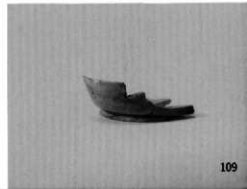


SB74・75 (東から)

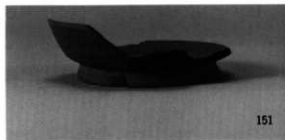
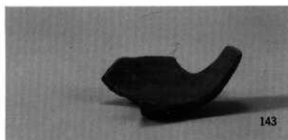
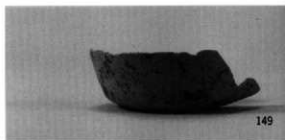


SB73 (北東から)

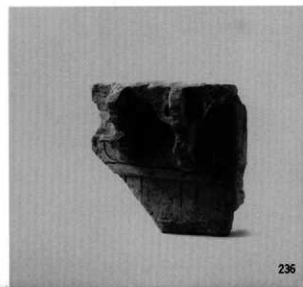
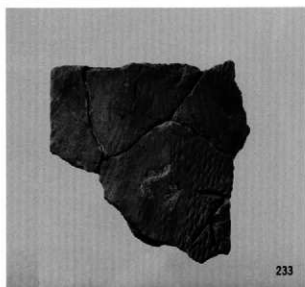
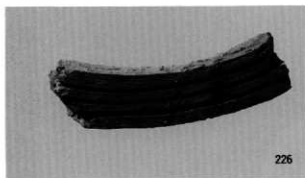
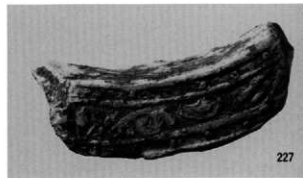


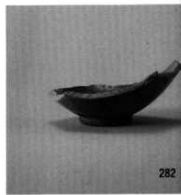
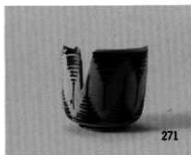
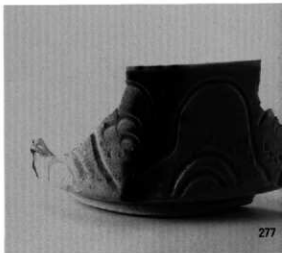
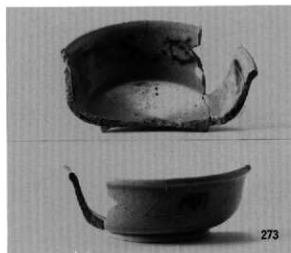
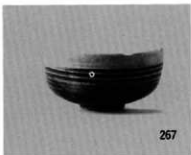
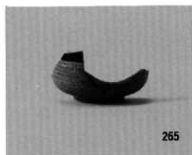
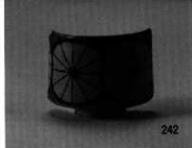


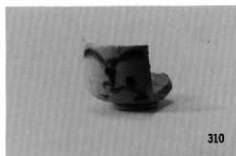
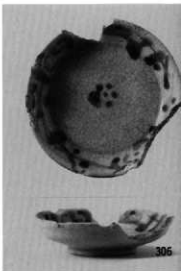
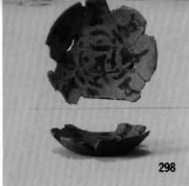
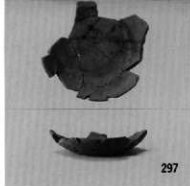
図版36
III期の遺物(2)











愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第19集

勝川遺跡Ⅲ

1992年3月31日

編集発行 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

印刷 西濃印刷株式会社